寺入遺跡

昭和61年度土地改良総合整備事業薄根北
部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

1986

沼田市教育委員会
沼田市埋蔵文化財発掘調査団

寺入遺跡

昭和61年度土地改良総合整備事業薄根北
部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

1986

沼田市教育委員会
沼田市埋蔵文化財発掘調査団

序　　文

沼田市における埋蔵文化財調査は関越自動車道（新潟線）建設工事に伴い昭和57年度58年度の２ケ年にわたり「石墨遺跡」が調査されたことは、記憶に新しいところであります。このような大規模な埋蔵文化財発掘調査がいくつか実施され、いままで断片的にしか捉えられていなかった沼田市の原始、古代が徐々にではあるが解明されようとしております。しかしこれらは開発によって遺跡が破壊されるため止むなく事前に調査が行われるものであります。

今回は昭和61年度土地改良総合整備事業薄根北部地区に係る「寺入遺跡」の発掘調査で、調査の結果縄文時代の住居址をはじめ多くの土器や石器などの貴重な資料が発掘されました。

当市においては縄文時代の遺跡の調査例は少なく、この成果は今後郷土の古代史研究を進める上で極めて意義深いものであります。私達の祖先が営々として築いてきた生活のあり様を知る上でこの資料はわれわれに多くの問題を提起してくれています。

本報告書が、地域を知り新しい文化を創造する上で多くの方々に寄与するところ大なることを期待してやみません。

最後になりましたが調査にたずさわった関係者の皆様の労苦に心からお礼申し上げ序文といたします。

昭和62年３月

沼田市教育委員会
教育長　佐　藤　国　利

例　　言

1．本書は昭和61年度土地改良総合整備事業薄根北部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．遺跡は群馬県沼田市石墨町字寺入に所在する。

3．発掘調査は、沼田市埋蔵文化財発掘調査団が薄根北部土地改良組合の委託を受けるとともに沼田市教育委員会が、国庫補助金・県費補助金・市費により実施した。

4．発掘作業は昭和61年7月28日～10月18日まで実施し、整理作業は10月20日～昭和62年3月31日まで行った。

5．調査体制は以下の通りである。

団　　長	千吉良　直　太	教育次長
副団長	北　沢　　進	経済部長
顧　　問	杉　木　栄　次	助　　役
〃	佐　藤　国　利	教　育　長
〃	金　子　捨　次	総務部長
幹　　事	青　柳　迪　夫	企画財政課長
〃	松　井　誠　二	庶務課長
〃	藤　井　正　久	社会教育課長
〃	金　井　初　保	農政課長
発掘担当者	小　池　雅　典	社会教育課主事
調査員(兼)	小　池　雅　典	〃
事務局長(兼)	藤　井　正　久	社会教育課長
事務局員	新　井　康　裕	社会教育係長
〃	諏　訪　光　生	農政係長
〃	内　山　高　重	農林土木係長
〃	増　田　雄　二	農政課主事
〃	小　沢　一　行	農政課技師
〃	勝　又　久美子	社会教育主事
相談員	水　田　　稔	文化財調査委員
〃	石　北　直　樹	昭東中教諭

6．発掘調査作業員は次の通りである。(敬称略)

阿部静子、阿部タネ、石塚タミ、内山春夫、生方のぶ、生方もく、大島はる、岡村良男、岡村宜子、小林アイ、佐藤こと、七五三木康三、七五三木でん、田村かう子、田村マサ子、田

村雪江、野村　武、笛木栄子、松井あさの、丸山けさ江、丸山なを

7．本書の執筆・編集は小池雅典が行った。

8．遺物の実測・図版作成等は小池の他に次の作業員が行った。（敬称略）

遠藤秀子、後藤多貴江、酒向つた子、塩野明美、霜垣ユミ子、竹之内信子、高橋洋子、野村武、笛木栄子、保坂隆子、松本トキ子、森田美香

9．本書に掲載した遺構写真は小池が、遺物写真は八木義衛氏が撮影した。

10．本遺跡の資料は沼田市教育委員会が保管している。

11．発掘調査及び本書の作成において次の方々から御指導、御協力をいただいた。心より感謝の意を表する次第である。（敬称略）

太田栄太郎、関口信夫、西田健彦、能登　健、薄根北部土地改良組合、沼田市経済部農政課、昭和村教育委員会

12．題字は沼田市教育委員会教育長佐藤国利による。

凡　　例

1．遺構配置図・遺構図中の方位は磁北を表わす。

2．遺構挿図中に記載した断面基準線の数字は海抜高である。

3．挿図の縮尺は以下のように統一した。ただし遺物の実測図については異った縮尺のものが多いので図中のスケールを参照していただきたい。

住居址……1/60　　配石遺構……1/40

土　坑……1/40　　遺　　物……1/3・1/4・1/6

4．遺構写真及び遺物写真図版の縮尺は任意である。

目　　次

序

例　　言

凡　　例

I　調査に至る経緯と遺跡の環境……1

1．調査に至る経緯……1

2．遺跡の位置と環境……1

3．周辺の遺跡……1

II　調査の方法と遺跡の概要……2

1．調査の方法……2

2．遺跡の概要……2

3．基本層序……2

III　検出された遺構と遺物……7

1．住居址……7

2．配石遺構……50

3．土　　坑……51

4．遺構外出土土器……61

5．遺構外出土石器……72

IV　まとめ……74

Ⅰ　調査に至る経緯と遺跡の環境

1.　調査に至る経緯

昭和56年度より開始された土地改良総合整備事業薄根北部地区は昭和63年度までの７年間で、総事業量39.4haが実施される予定である。昭和60年度工区の一部は、群馬県遺跡台帳に記載されている№1015遺跡に近接しているため踏査を行ったところ遺物が採集され、当区域も遺跡の範囲に入ることが確認された。遺跡の状態や性格を把握するため、３本のトレンチを入れて試掘調査を行ったところ大きく削平されている部分があるものの、中期を主にした多量の縄文土器片と石器が検出され集落跡であることが予想された。農政課と教育委員会との間で協議を行ったが工事計画変更は困難であると判断されたため、昭和61年度に本調査を実施することとなった。遺跡の名称は字名をとって寺入遺跡と命名した。

2.　遺跡の位置と環境

寺入遺跡は沼田市のほぼ中央やや西側に所在し、関越自動車道の北約1.4kmの所に位置する。この地区は三峰山東麓の端部で南流する四釜川の右岸にあたり、標高は451m～457mを測る東傾斜の斜面である。しかし東斜面で背に三峰山を持つ地形であるため午後の日照時間は比較的少ない。四釜川からは直線距離で70m、比高差は20mを測る。また今回の調査区域は、四釜川にそそぐ沢により南側を大きく北側をわずかに区切られている。現在では当地区の四釜川両岸は一部畑地があるものの河川に近い付近では小区画の水田地となっている。

3.　周 辺 の 遺 跡

旧石器時代　旧石器を出土する遺跡は、関越自動車道建設に伴う発掘調査により三峰山南麓から西麓において存在することが判明したが、当市においては薄根川右岸の最上段上面に位置する戸神諏訪遺跡（３）があげられる。詳細は不明であるが岩宿Ⅰ文化に相当するナイフ等が確認されている。

縄文時代　縄文時代の遺跡は薄根川と四釜川の間の段丘面に多く存在するが、表採により確認されたものがほとんどで早期～後期にかけての資料が主である。発掘調査により遺構が確認されたのは四釜川左岸の石墨遺跡（２）と戸神諏訪遺跡である。石墨遺跡からは早期の住居址と落し穴が戸神諏訪遺跡からは前期の住居址と落し穴が検出されている。

弥生時代　弥生時代の遺物は後期樽式期のものが多く、段丘面上に分布する。石墨遺跡からは住居址、円形周溝墓が、戸神諏訪遺跡、諏訪平遺跡(13)からは住居址等が検出されている。

古墳時代　集落は段丘・丘陵上に多く分布するが前期・後期の遺構がほとんどである。戸神諏訪遺跡では前期の住居址が、石墨遺跡では前期・後期の住居址が検出されている。古墳は集落を

臨む山裾の傾斜地に築造される例が多く、ほとんどが後期に属すると考えられる。宇楚井・原町古墳群(8、10)が知られているが、発掘調査が行われ詳細が知れるのは大釜漏1号古墳(6)と、月夜野町の金山古墳群(9)である。

奈良・平安時代　該期の遺跡は、前時代の遺跡とほぼ複合している。しかし、奈良時代の住居址は少なく平安時代に入りその数は大きく増大しその範囲も拡大している。発掘調査により遺構が検出されているのは、四釜川左岸の微高地上に位置する石墨遺跡、同右岸の舌状台地に位置する大釜遺跡(7)、小沢川を挟み石墨遺跡に対岸する、戸神諏訪遺跡、土塔原遺跡(4)である。

II　調査の方法と遺跡の概要

1. 調査の方法

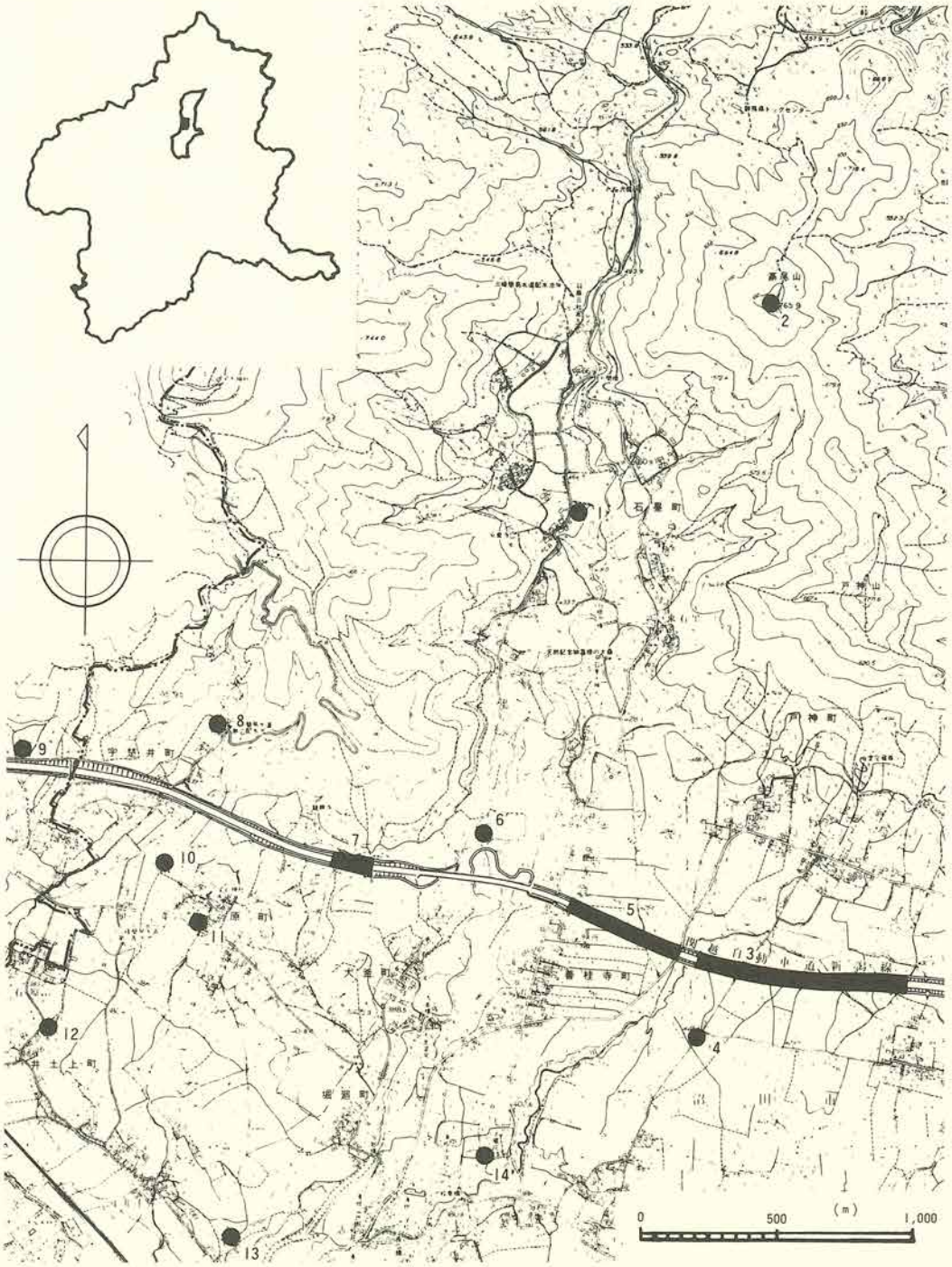
遺跡地周辺は四釜川に面した傾斜地で、耕地は水田・桑園として利用されている。土地改良による工事はこの小区画の水田を大区画にまとめる設計であり、複雑で大幅な切土と盛土が予想されるため、試掘結果に基づき遺跡が破壊される約3,300m²を対称として調査を行った。現水田構築時にすでに大幅な削平と盛土が行われていることから上面は重機により土を剝ぎ、傾斜の方向に合わせて5mグリッドを設定した。南北軸は算用数字で、東西軸はアルファベットを使用し、グリッド名は南東コーナー名を使用した。調査は土置場の関係から南側から行い、調査終了地区を一部埋め戻して北側の調査を実施した。試掘の結果から遺構すべてがローム層を掘り込んでいないと予想されたので各グリッドとも1m幅のベルトを残し掘り下げて遺構の確認を行った。

2. 遺跡の概要

寺入遺跡からは縄文時代早期～後期の遺物が中期後半を中心として多量に検出され、長期にわたり生活の場として使用されたことが窺われる。検出された遺構のうち住居跡として確定できたのは18軒である。残存状況が不良で遺物も僅かな住居址もあったが、16軒が縄文時代中期、1軒が後期、他の1軒は不明（弥生？）である。土坑は25基が検出された。遺物を有する土坑は縄文時代中期～後期に属する。他に縄文時代の配石遺構2基、竪穴状遺構1基が検出された。

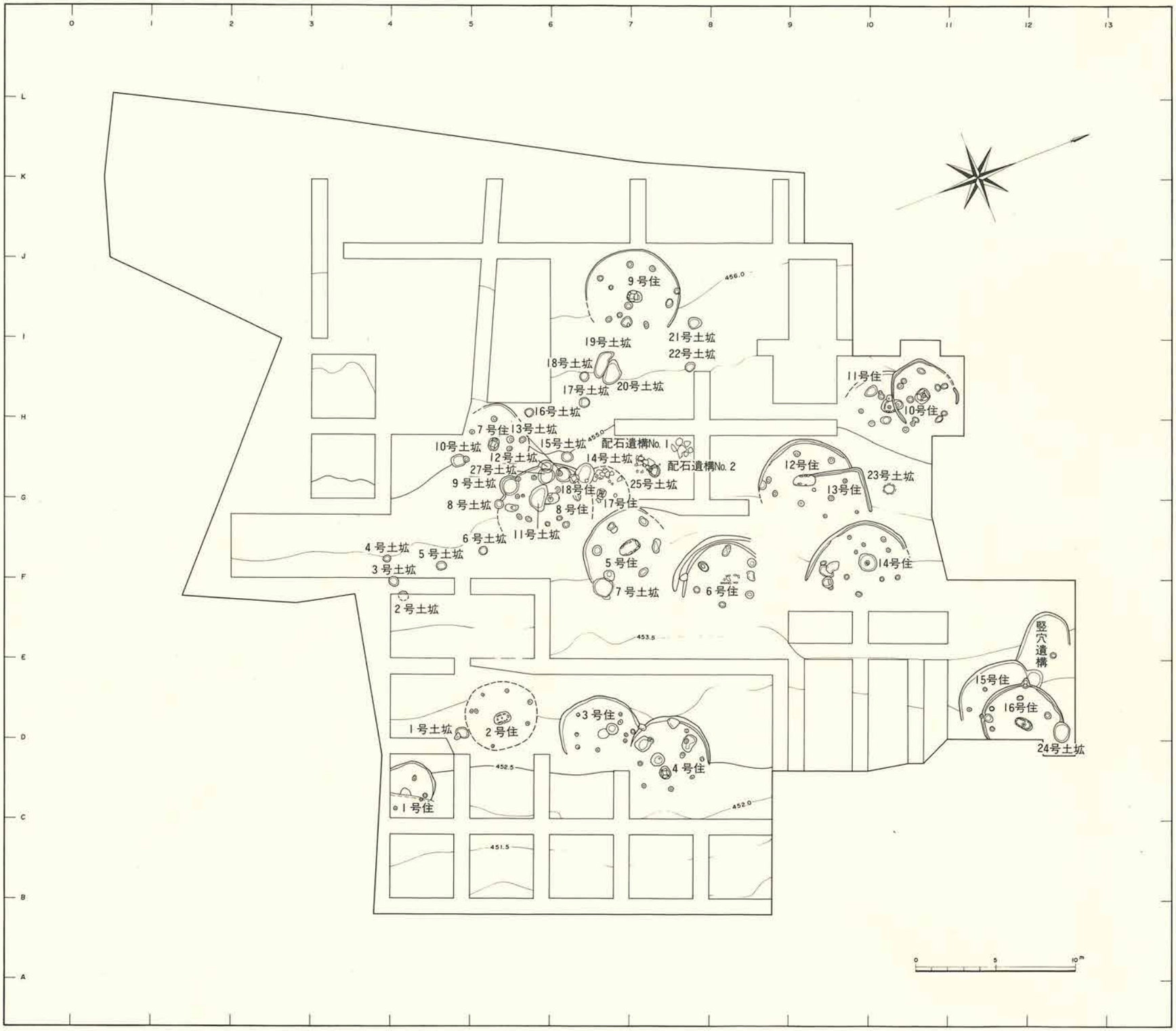
3. 基本層序

前述のように調査区内は水田構築時に大幅な削平が部分的に行われているため、削平の少ない部分を標準土層として把握した。第Ⅰ層、灰色土、現水田耕土で軽石を少量含む。第Ⅱ層、赤灰褐色土。Ⅰ層に似た土であるが酸化している。第Ⅲ層、灰褐色土。ＦＰ軽石を多く含む。第Ⅳ層灰褐色土。軽石を少量含む。第Ⅴ層、黒褐色土。縄文時代の遺物を多く包含する。削平されている部分と層厚が厚い部分がある。掘り方の浅い遺構はこの層中で確認された。第Ⅵ層、ローム漸移層、ローム層を掘り込む遺構の確認面。第Ⅶ層、ローム層。



第１図　寺入遺跡の位置と周辺の主な遺跡

1．寺入遺跡　2．高王山城址（安土・桃山）　3．戸神諏訪遺跡　4．土塔原遺跡　5．石墨遺跡
6．大釜漏１号古墳　7．大釜遺跡　8．宇楚井古墳群　9．金山古墳群　10．原町古墳群
11．原町「経塚」　12．荘田城址（室町）　13．諏訪平遺跡　14．小沢城址（室町）


9号住
21号土坑
22号土坑
19号土坑
18号土坑
17号土坑
20号土坑
16号土坑
11号住
10号住
7号住
13号土坑
15号土坑
10号土坑
12号土坑
27号土坑
9号土坑
8号土坑
6号土坑
11号土坑
18号住
8号住
17号住
25号土坑
14号土坑
配石遺構No. 1
配石遺構No. 2
12号住
13号住
23号土坑
4号土坑
5号土坑
3号土坑
2号土坑
5号住
7号土坑
6号住
14号住
竪穴遺構
15号住
16号住
24号土坑
1号土坑
2号住
3号住
4号住
1号住
456.0
455.0
453.5
452.5
452.0
451.5

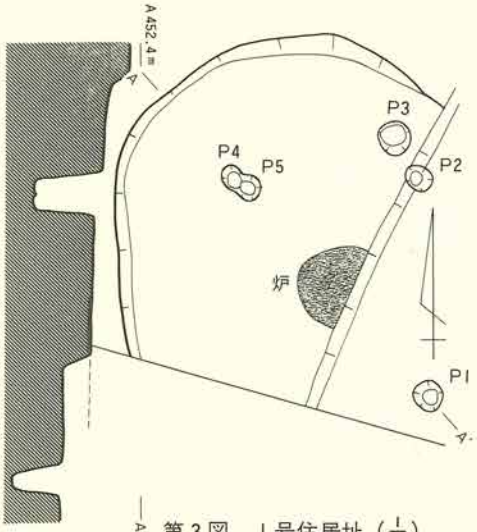
第2図　遺構配置図

Ⅲ　検出された遺構と遺物

1．住　　居　　址

1号住居址

C－4グリッドに位置し、傾斜のある調査地区内では最も低いレベルに検出された住居址である。一部が調査区域外にかかることや、削平や攪乱をかなり受けていたことから、不確定ではあるが、平面形は、南北方向に長軸をもつ楕円形と推定できる。壁は北および西側において確認でき、確認面からの深さは、12cm以下を測り、やや外傾し立ち上がる。床面は軟弱で、やや傾斜をもつ。柱穴は5本検出され深さは40cm～55cmを測るが同時に存在していたのは3本であり、調査区域外に存在すると推定される1本と合せ4本主柱と考えられる。炉はほぼ半分が削平されており残存部分も地山のロームが焼けているだけで炉石等は検出できなかった。



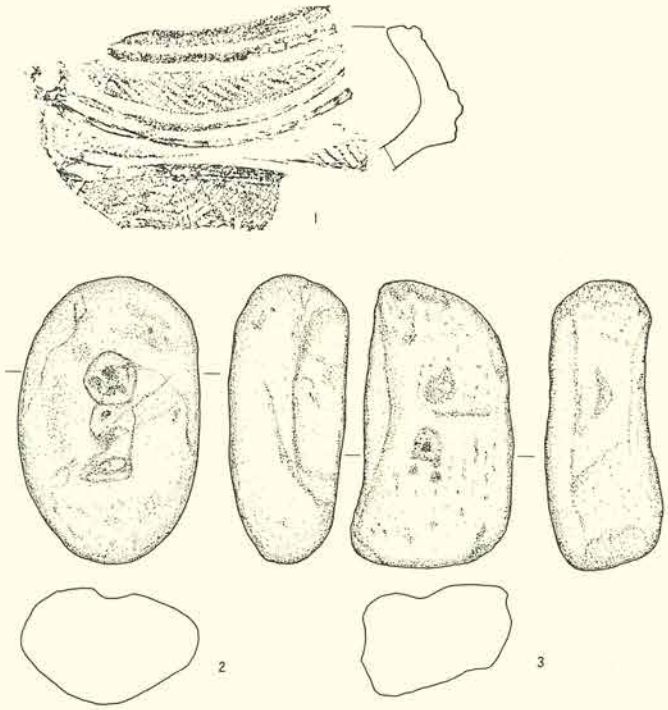
第3図　1号住居址（$\frac{1}{60}$）

遺物は、覆土中から少量検出されたのみである。

1号住居址出土遺物

1はキャリパー状を呈する小型の加曽利E1式段階の土器である。深鉢形土器の破片で、口縁部は隆帯と沈線によって区画される。地文は縄文RLである。

2、3は凹石で、片面に集合打痕が認められる。



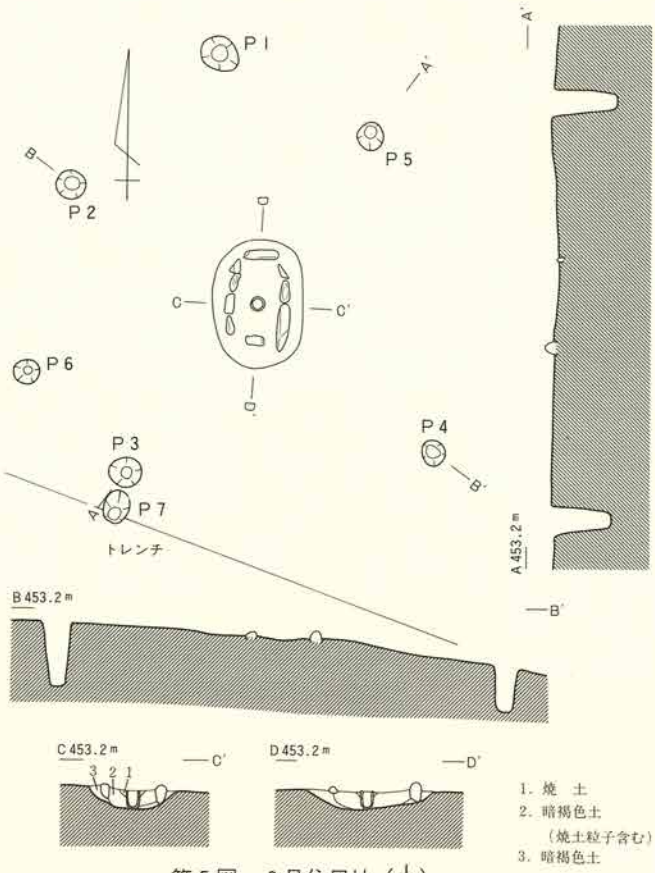
第4図　1号住居址出土遺物（$\frac{1}{3}$）

2号住居址

D－5グリットに位置し、1号土坑に近接する。床面がローム層を掘り込んでいないため平面形は確認できなかったが遺物の出土状態や柱穴の配置などから、円形あるいは楕円形を呈すると考えられる。床面は上記のとおり明確にはできなかったが遺物や炉のレベルで、ほぼ把握でき

た。柱穴は７本検出され、P_1～P_5が深さ34cm～52cmと深く、主柱穴と推定できる。炉はやや細長い河原石９個を長方形に列べて構築しており埋甕を有する。炉の長軸はほぼ磁北をとり炉石の部分で74cm、短軸は52cmを計る。

覆土中からは炉の付近を中心として多量の土器破片と石器類および礫が床面よりやや浮いた状態で出土した。



第５図　２号住居址（$\frac{1}{60}$）

２号住居址出土遺物

１は１ケ所に小波状の口縁を有する深鉢で、胴下半から一部口縁にかけて欠損している。口縁部は、４単位の横Ｓ字状の隆帯により区画されている。地文は撚糸のＬである。

２は小型で甕形をした深鉢で口縁部を欠損している。文様は細い沈線により渦巻文や懸垂文が施される。他の遺物の出土状態とは異なり住居の東端側の床面レベルより低い位置から検出されており、他の遺構に伴う可能性も考えられる。

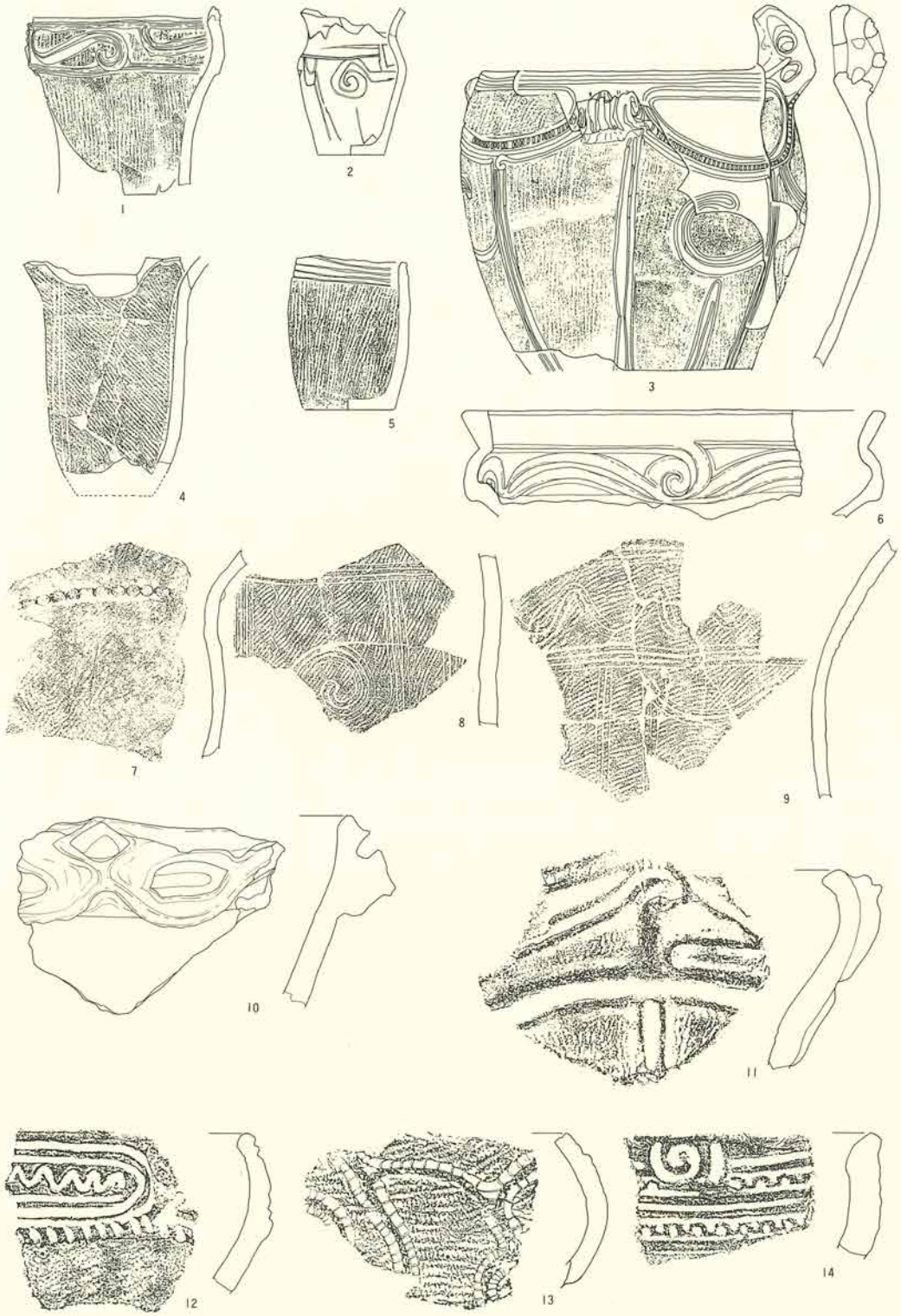
３は胴上半部に最大径を持つ深鉢で、胴下半から一部口縁部にかけて欠損している。口縁部はやや内湾し、刻みを施した４単位の孤状の隆帯により区画され、その連結部の２ケ所には把手が認められる。一つは、隆帯によるコイル状を呈し横側に、他の一つは、透かし孔を有する方形で大形の把手で口縁上端部に付く。胴部には隆帯の連結部から三本の懸垂文が下がる他、蕨手状の沈線等が施されている。地文は撚糸のＬである。

４はキャリパー形深鉢の胴部破片である。頸部から直線的に下る３本１組の懸垂文と１本の波状の懸垂文が交互にほぼ等間隔で施される。地文は縦位の縄文ＬＲである。

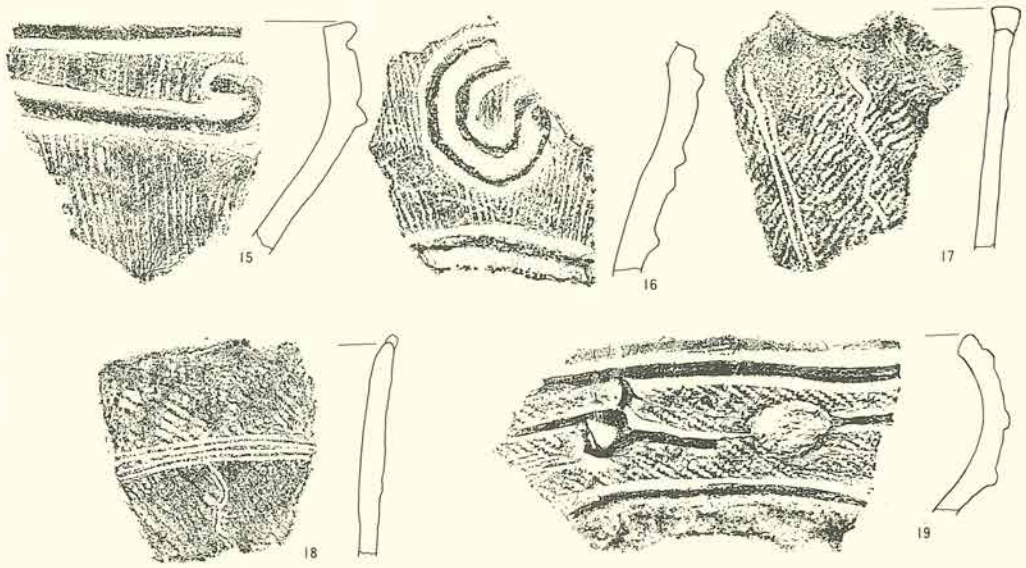
５は炉に使用されていた深鉢で、胴上半を欠損している。胴部はやや丸味をもった円筒形を呈し、上端部には半截竹管を使用した平行沈線が巡っている。地文は撚糸のＬである。

６は口縁部がくの字に外反した浅鉢の破片である。胴上部に、厚みのない隆帯により渦巻文が施される。内外面ともよく研磨され赤彩痕が認められる。

７～９は深鉢の大形胴部破片である。７は頸部に鎖状の隆帯を巡らし、その下半には縦位の縄文ＲＬが施されている。８・９は半截竹管による平行沈線を基本文様とし、８は蛇行状の懸垂文



第６図　２号住居址出土遺物〔１〕（$\frac{1}{6}$、10～14は$\frac{1}{3}$）



第７図　２号住居址出土遺物〔２〕（$\frac{1}{3}$）

や蕨手文、９は連弧状の文様を施す。地文はいずれも縦位の縄文ＲＬである。

10以下は深鉢の口縁部片である。10は、ぶ厚い眼鏡状の隆帯を施す。頸部は無文である。11はゆるいキャリパー状を呈し、隆帯による区画がなされており、渦巻文が施される。地文は撚糸のＬである。

12は口縁と頸部は刻目を有する隆帯により区画され、その内側は沈線による隋円文と波状文が施される。頸部の文様は縦位の縄文ＲＬである。

13の口縁部は内湾し、隆帯による区画がなされている。隆帯の両側にはキャタピラ状の押引文が施されている。地文は縦位の縄文ＲＬである。

14は口唇部が外反し渦巻文を含む沈線によって区画されており交互刺突文も施されている。

15は口縁部が隆帯と沈線によって横位に区画されており、地文は撚糸のＬである。

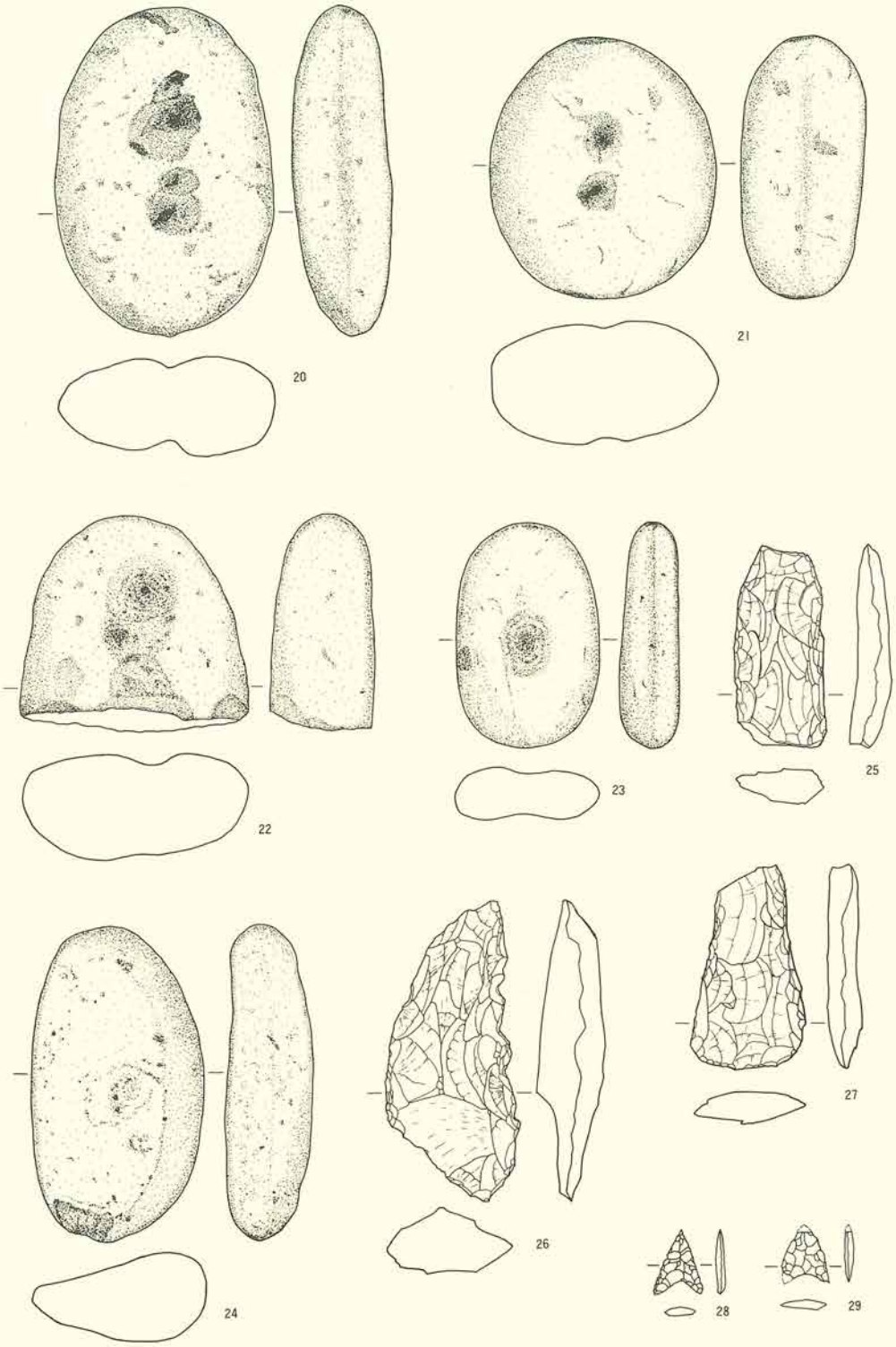
16は頸部に一条の隆帯がめぐり口縁部には蕨手状の隆帯が施される。地文は撚糸のＬである。

17、18は口唇部に小波状の突起をもち、前者には沈線による懸垂文が、後者には横の沈線が施される。地文は縄文である。

19は隆帯によって区画がなされ、地文は縄文ＲＬが施される。頸部は無文である。

20～23は凹石である。いずれも両面に集合打痕が認められるが21には上下縁辺にも打痕を有する。24は磨石で、片面にのみわずかな磨痕による凹をもつ。25～27は打製石斧である。25、26は刃部を、27は基部を欠損する。27は撥形を呈する。28～29は、無茎の石鏃である。29は先端部と片側の脚部を欠損する。いずれも基部には深い抉れが入る。

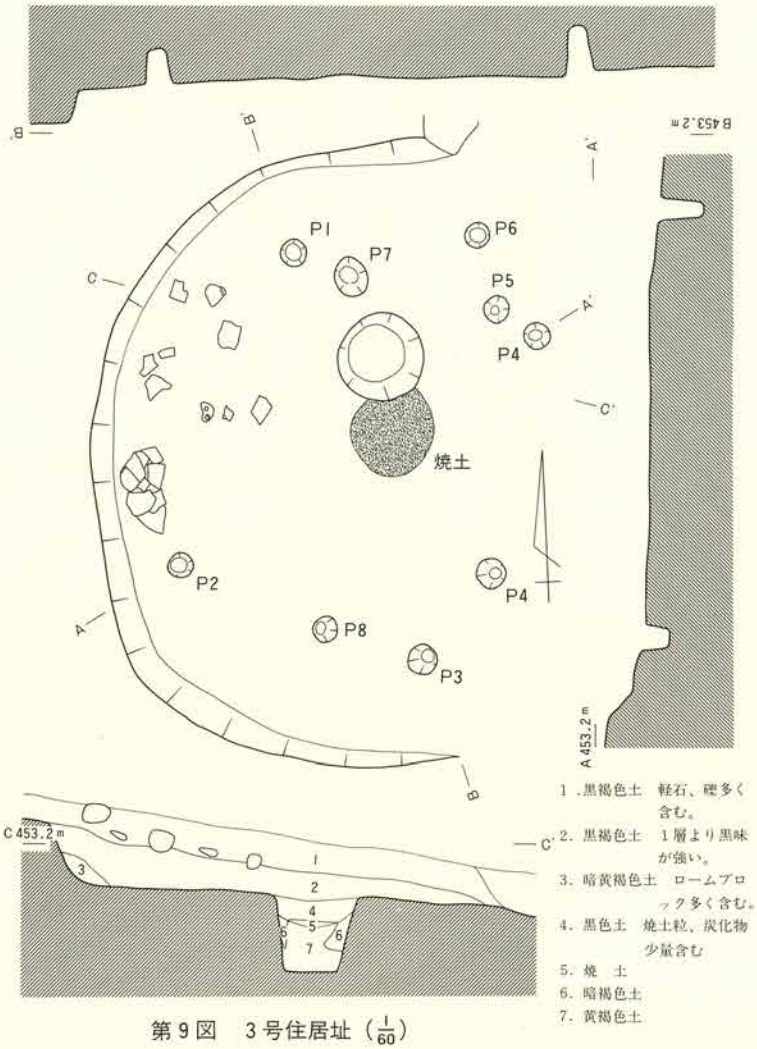
以上の出土遺物を観察すると土器は、炉に使用されていた土器をはじめとして、地文に撚糸文をもつ個体がいくつかみられ、破片の中には勝坂的な文様を残すものが目立つことから多くは、加曽利Ｅ１式段階に比定されよう。



第8図　2号住居址出土遺物〔3〕（$\frac{1}{3}$、28・29は$\frac{1}{2}$）

3号住居址

C－6、D－6グリットを中心に位置し、北側は4号住と接している。平面形は、径4m85cmのほぼ円形を呈すると考えられるが東側は削平されているため詳細は不明である。壁は西側部分で26cmを測り、外傾して立ち上がる。床面は中央付近で、堅緻であったが、壁付近では軟弱であった。柱穴は9本検出されたが主柱穴はP_1～P_4と推定され、深さは20cm～36cmを測る。堅い床面上に焼土が認められたが明確な炉は検出できなかった。中央部やや北側には径70cmの土坑が確認され、上場より深さ15cmの位置には厚さ5cmの焼土層が検出された。遺物は床面から浮いた状態で多く出土したが、西側では床直の遺物も確認された。



第9図　3号住居址（$\frac{1}{60}$）

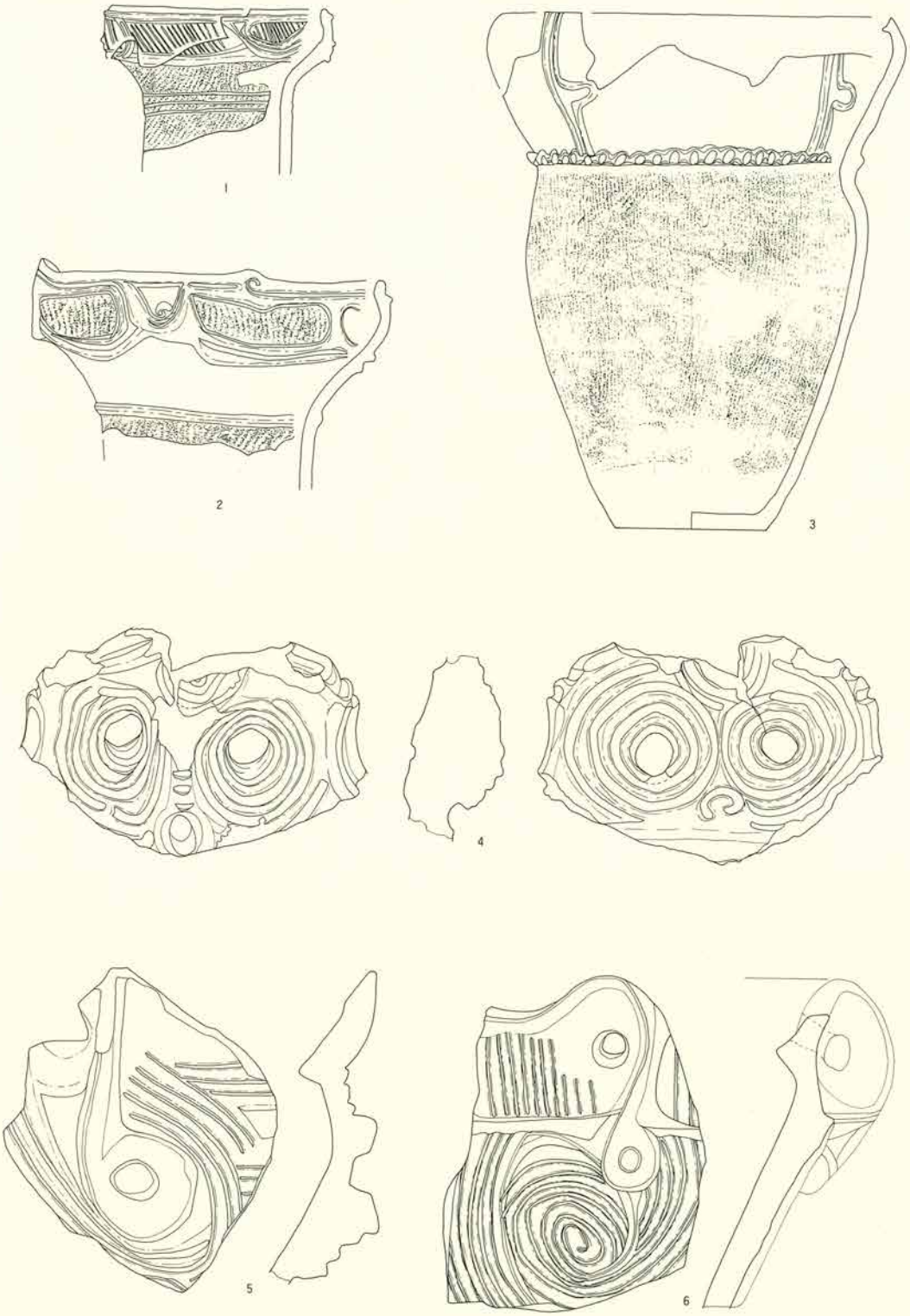
3号住居出土遺物

1、2はキャリパー状を呈する深鉢である。前者は口縁部から胴部以下にかけて多く欠損しており口縁部は隆帯によって区画され、中には斜行する沈線が充填される。地文は縦位の縄文RLである。後者は胴部以下を欠損し、口縁部は隆帯と沈線によって区画される。地文は縦位の縄文RLであるが、頸部は無文である。

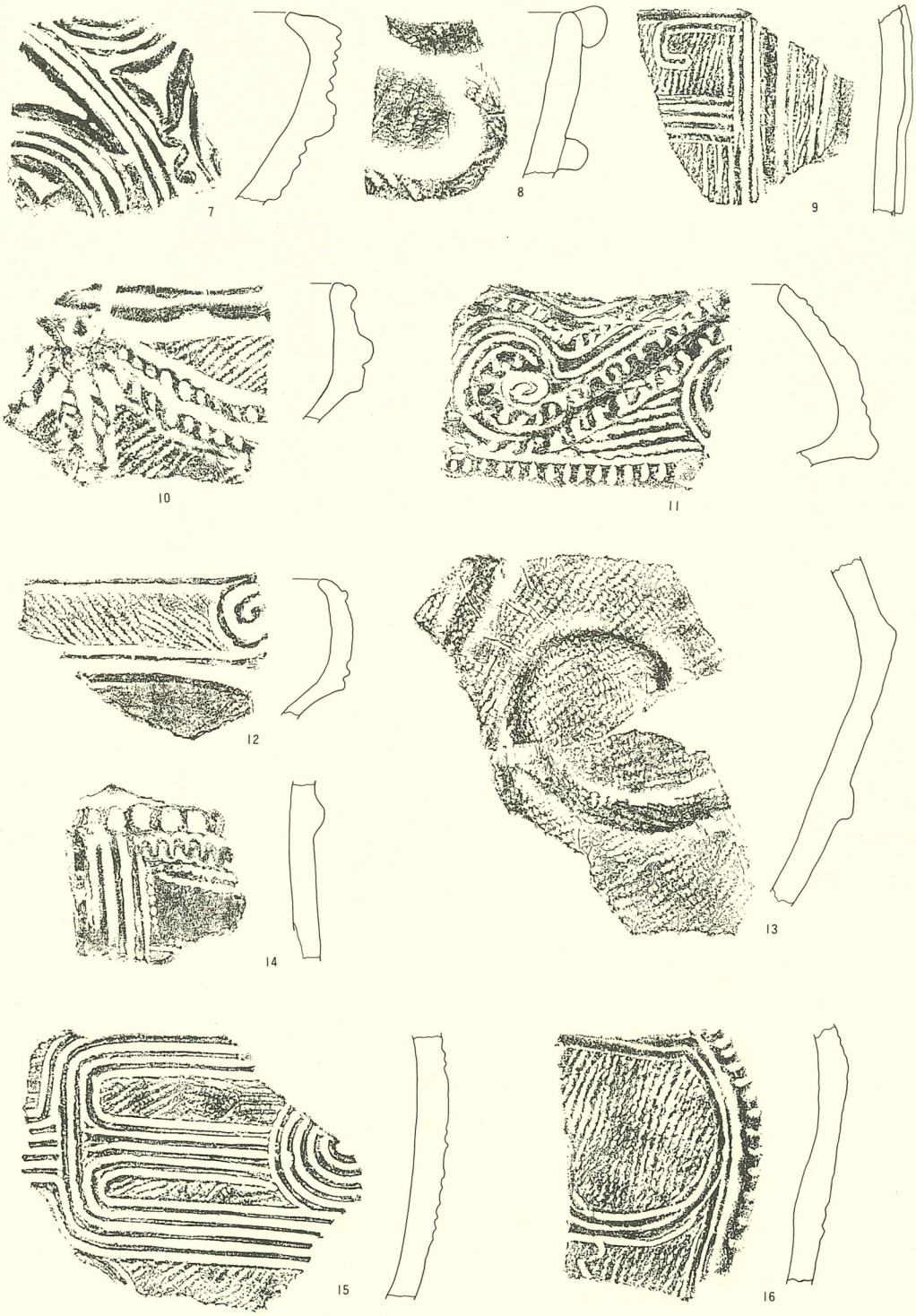
3は大型の深鉢形土器で、口縁上部が強く内湾する。頸部は鎖状の隆帯がめぐり、無文の口縁部には縦位の隆帯が施される。地文は撚糸のLである。この土器は破片で床直上に検出された。

4は口縁上端に付く大型の方形把手である。左右に大きな孔を有しそのまわりを3重に沈線を巡している。

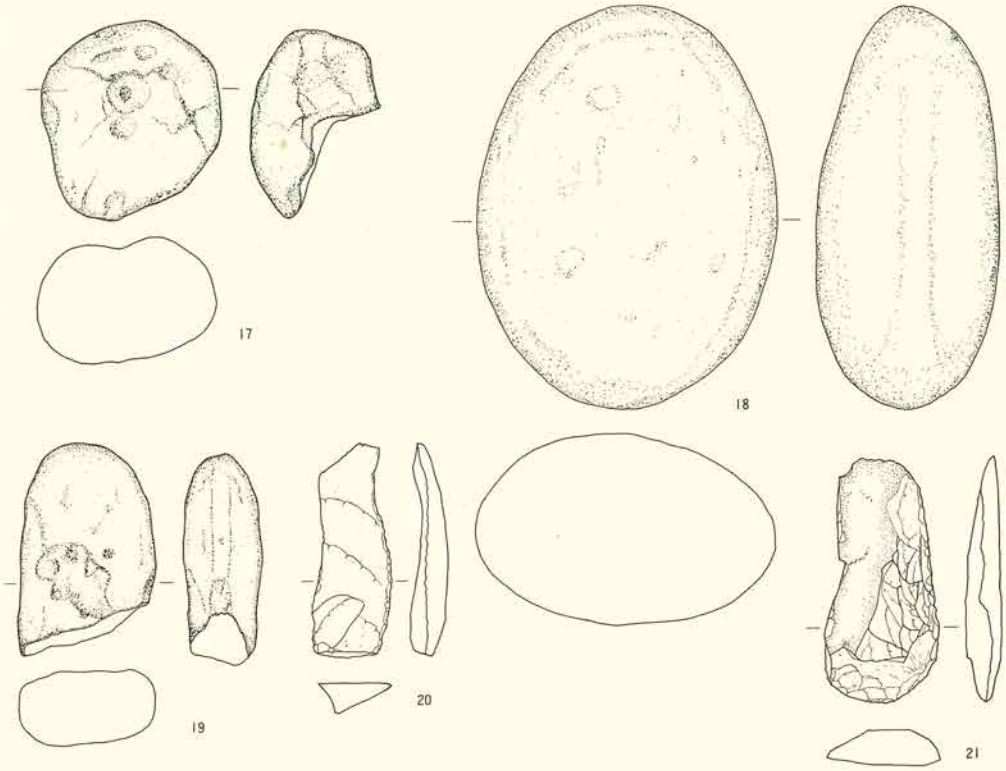
5、6はダイナミックな曲線文を持つ口縁部の破片で、半截竹管を使用した沈線を多用している。



第10図　3号住居址出土遺物〔1〕（$\frac{1}{6}$、4～6は$\frac{1}{3}$）



第11図　3号住居址出土遺物〔2〕（$\frac{1}{3}$）



第12図　3号住居址出土遺物〔3〕($\frac{1}{3}$)

7は口唇部が強く内湾する深鉢の口縁部片である。隆帯と沈線により文様を構成している。

8はぶ厚い隆帯を持つ口縁部片で、地文および隆帯上に縦位の縄文ＲＬを施す。

10・12はキャリパー形深鉢の口縁部片である。前者は、あらく太い刻みを施した2本の隆帯によって区画され、地文には縄文ＬＲが施される。後者は、隆帯と沈線によって区画され、地文には縄文ＲＬが施される。

11は口縁部で強く「く」の字に内湾する深鉢の口縁部片である。隆帯と沈線により蕨手文を構成しており隆帯上には交互刺突文が施される。

9・13・14・15・16は深鉢の胴部片である。9・14・16は隆帯と半截竹管による平行沈線によって区画され、14は連続刺突文、他は地文に撚糸Ｌが施される。13は隆帯による蕨手文を有し全面に縄文を施す。15は半截竹管による平行沈線を多用し、地文に縦位の縄文ＲＬを施す。

17・19は凹石である。両者とも一部欠損しているが片面には集合打痕が認められる。

18は大型の磨石である。20は剝片石器である。一部欠損しているが、両縁にはこまかい調整剝離が施されている。

21は、撥形の打製石斧で片面に自然面を残す。

4号住居址

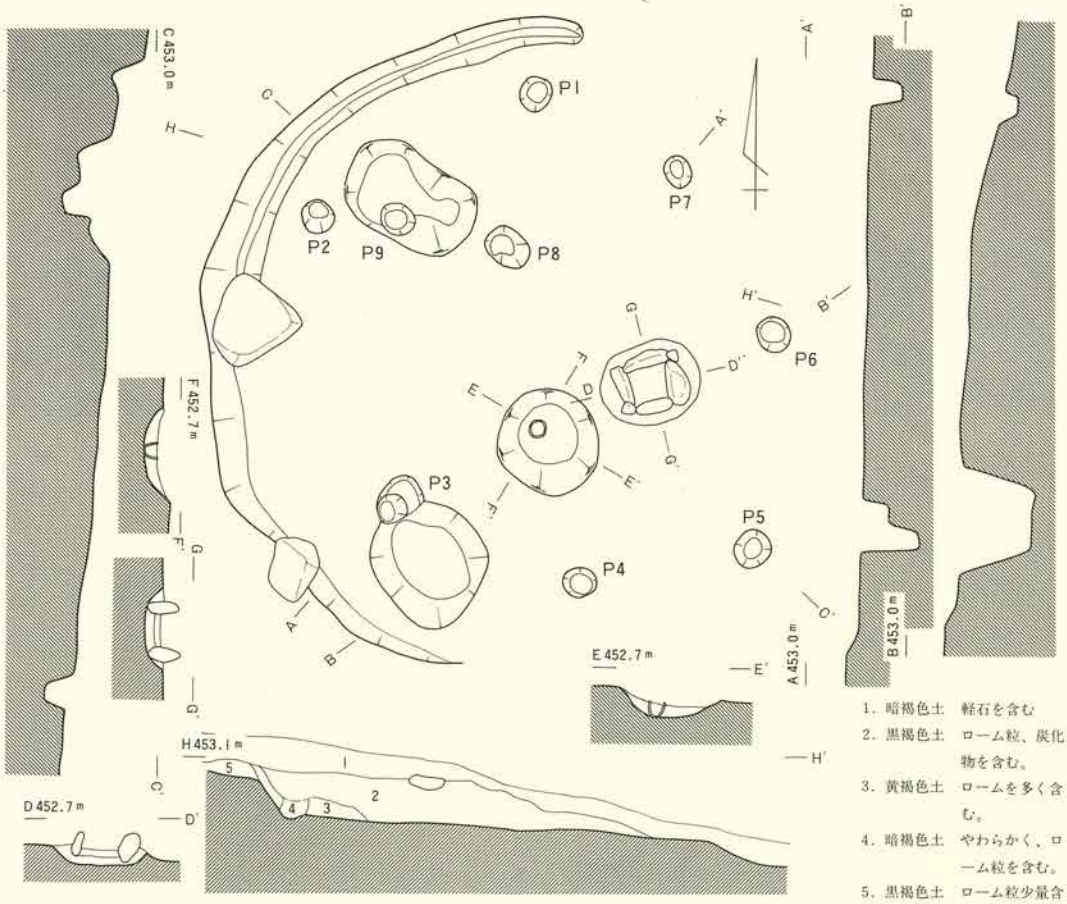
C、D－7グリッドを中心に位置し南端は3号住と接する。平面形は、残存部からほぼ円形を呈すると考えられるが、炉の位置と付合せず2軒以上の重複も推定できる。壁は北東で20cmを測りこの部分にのみ浅い周溝を検出した。床面は、不明確であった。柱穴と考えられるピットは9本検出され、深さは10cm～46cmを測る。炉はやや大ぶりの河原石4石を基本に組み合わせたものと、炉石はぬかれていたが埋甕を有するもの2基が検出された。

尚、土坑が2基認められたが住居址との関係は明確にし得なかった。遺物は大多数が床面から浮いた状態で出土した。

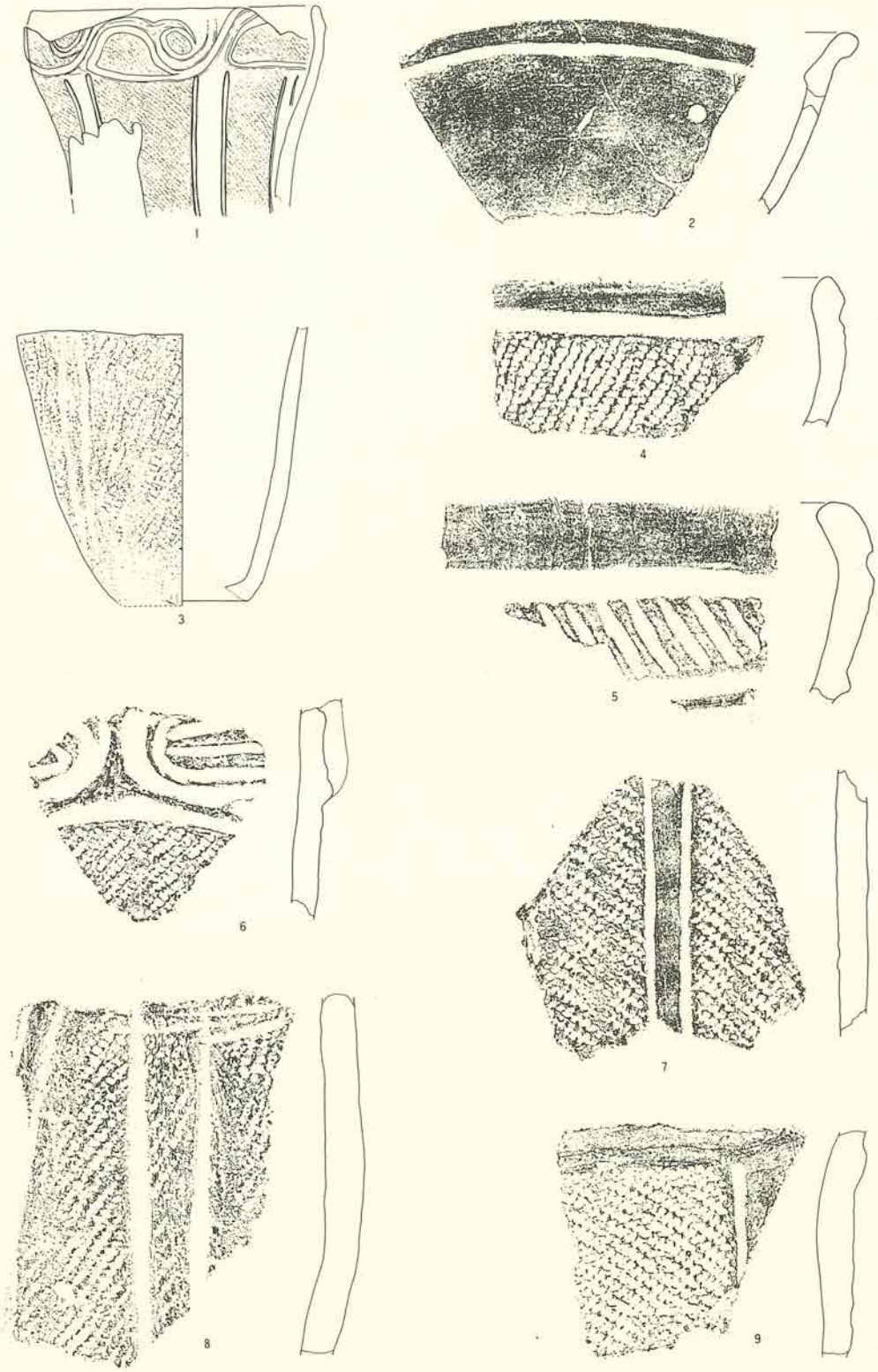
4号住出土遺物

1は深鉢形土器で口縁端部と胴下半部を欠損する。口縁部は隆帯と沈線によって5単位に区画されているが渦巻はくずれている。胴部は沈線による懸垂文によって区画されその間は磨消されている。地文は無節の縄文縦位のLである。

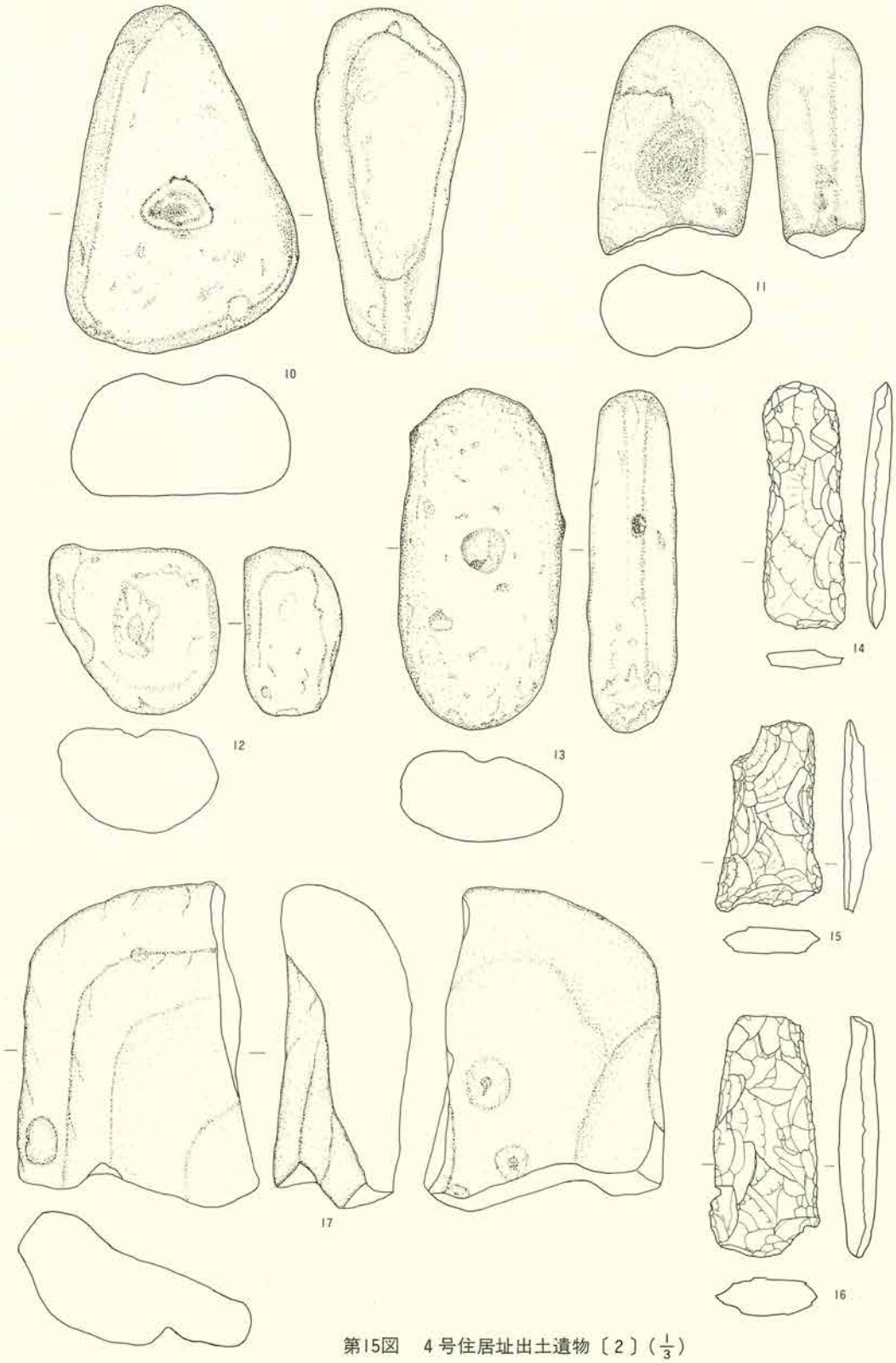
2は浅鉢の口縁部片で、口唇端部はするどく外反し、内側に段をもつ。段の下には小孔が穿たれている。内外面とも赤彩痕が認められる。



第13図　4号住居址（$\frac{1}{60}$）



第14図　4号住居址出土遺物〔1〕（$\frac{1}{3}$、1は$\frac{1}{6}$）



第15図　4号住居址出土遺物〔2〕($\frac{1}{3}$)

3は炉に使用されていた深鉢の胴部で底部を欠損する。沈線による懸垂文を施し、沈線間は磨消している。地文は縦位の縄文ＲＬである。

4はほぼ直立した深鉢の口縁部片で沈線に区画された下方には複節縄文縦位のＲＬＲが施される。

5も深鉢の口縁部片で沈線により区画された中に斜向した幅広い沈線が充塡されている。

6は口縁下半から胴部にかけての破片で口縁部は隆帯と沈線により楕円に区画されている。胴部には縦位の複節縄文ＲＬＲが施されている。

7～9は深鉢の胴部片である。いずれも沈線の懸垂区画による磨消部を有する。地文は7・9が縦位の複節縄文ＬＲＬ、8がＲＬＲである。

10～13は凹石である。10・13は片面に、11・12は両面に集合打痕を有する。14・15・16は打製石斧で14・16は短冊形、15は刃部を欠損しているが撥形を呈すると推定される。17は石皿の破片である。皿の中央にあたる部分は非常に良く研磨され周辺部よりさらに低くなっている。裏面は錐揉み状凹穴が施されている。尚、この石は炉石として検出された。

遺物については炉に使用された土器以外は特に床直と判断できるものは認められなかったが、全体として加曽利Ｅ３式の新しい段階に比定できる土器が多い。

5号住居址

Ｆ－6・7グリッドにかけて位置し、7号土坑の上に床を貼って構築していた。平面形は壁の残存部および、柱穴の配置から円形状を呈していたと推定される。壁は西側部分で82cmを測り、垂直ぎみに立ち上がる。床面はほぼ平坦で炉の付近では硬質であったが、壁周辺は軟弱で、東側は攪乱を受けていた。柱穴は6本検出された。いずれも径は60cm前後とやや大きく深さは26cm～36cmを測り、ほぼ等間隔で炉を囲むよう配置していた。炉はやや細長い河原石を11石列べて長方形に構築していたが、焚口と考えられる南側部分については石は配置されていなかった。下焼面は良く焼けて赤変しており、長軸は炉石の部分で1m16cm、短軸は72cmを測る。遺物は床面から浮いた状態で多く出土したが、浅鉢が1点南西柱穴付近で、ほぼ完形床直で検出された。

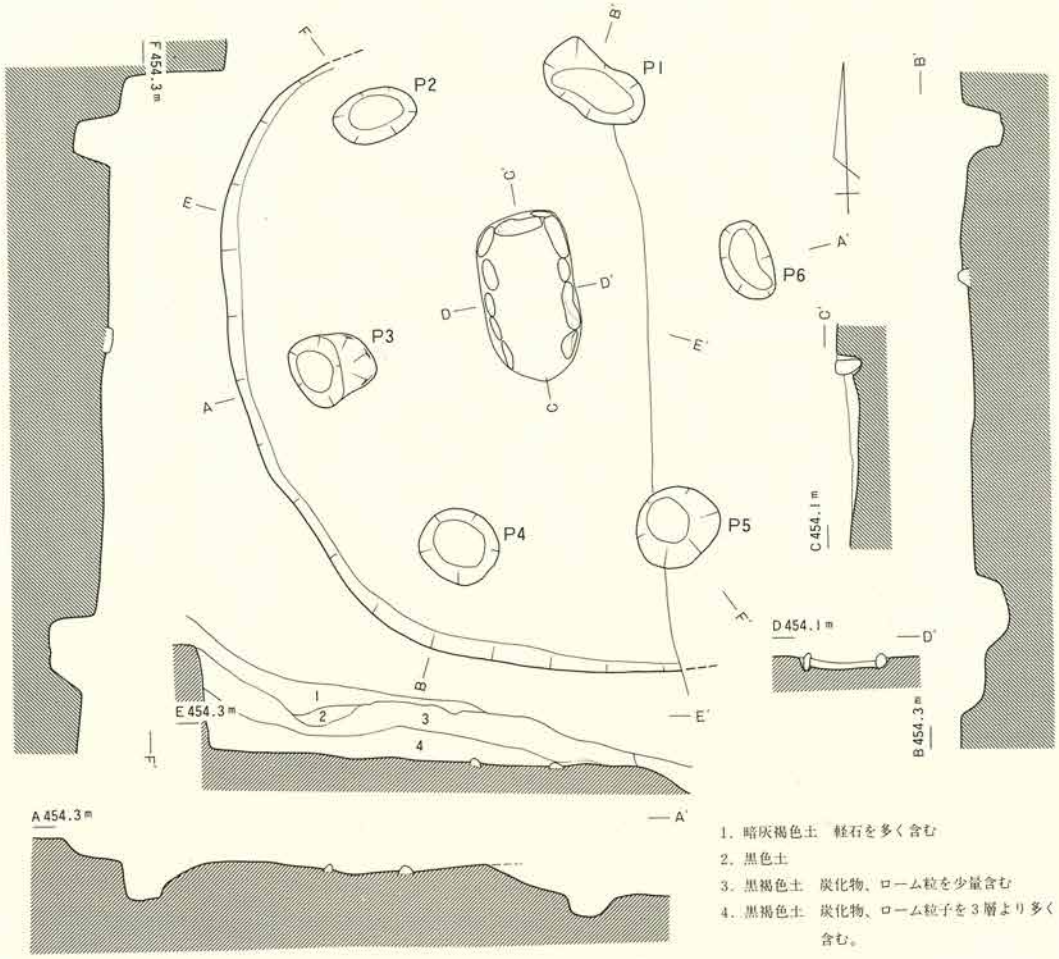
5号住居址出土遺物

1は大型の浅鉢形土器で約半分を欠損する。口唇部は幅広く平坦で、内外面とも良く研磨され赤彩痕が認められる。

2は小型の浅鉢で口唇部の一部を欠損するがほぼ完形で、床直出土である。1と同様に内外面とも良く研磨され赤彩痕が認められる。

3は深鉢の大形胴部片である。3本1組の沈線によって懸垂文や曲線文が施されている。地文は縦位の縄文ＲＬである。

4は頸部が強く内湾し口縁がほぼ直立する有孔鍔付土器の口縁部である。内外面とも良く研磨され鍔にあたる部分に小孔が上下方向に穿たれている。鍔下には沈線と縄文が施されている。



第16図　5号住居址（$\frac{1}{60}$）

5・7はキャリパー状を呈する深鉢形土器の破片である。両者とも口縁部は隆帯と沈線によって横位に区画されるが前者は区画内に斜行する沈線が充塡され頸部は無文である。後者は口縁部頸部とも縄文ＲＬが施される。

6は浅鉢形土器で口唇部は丸味をもつ。

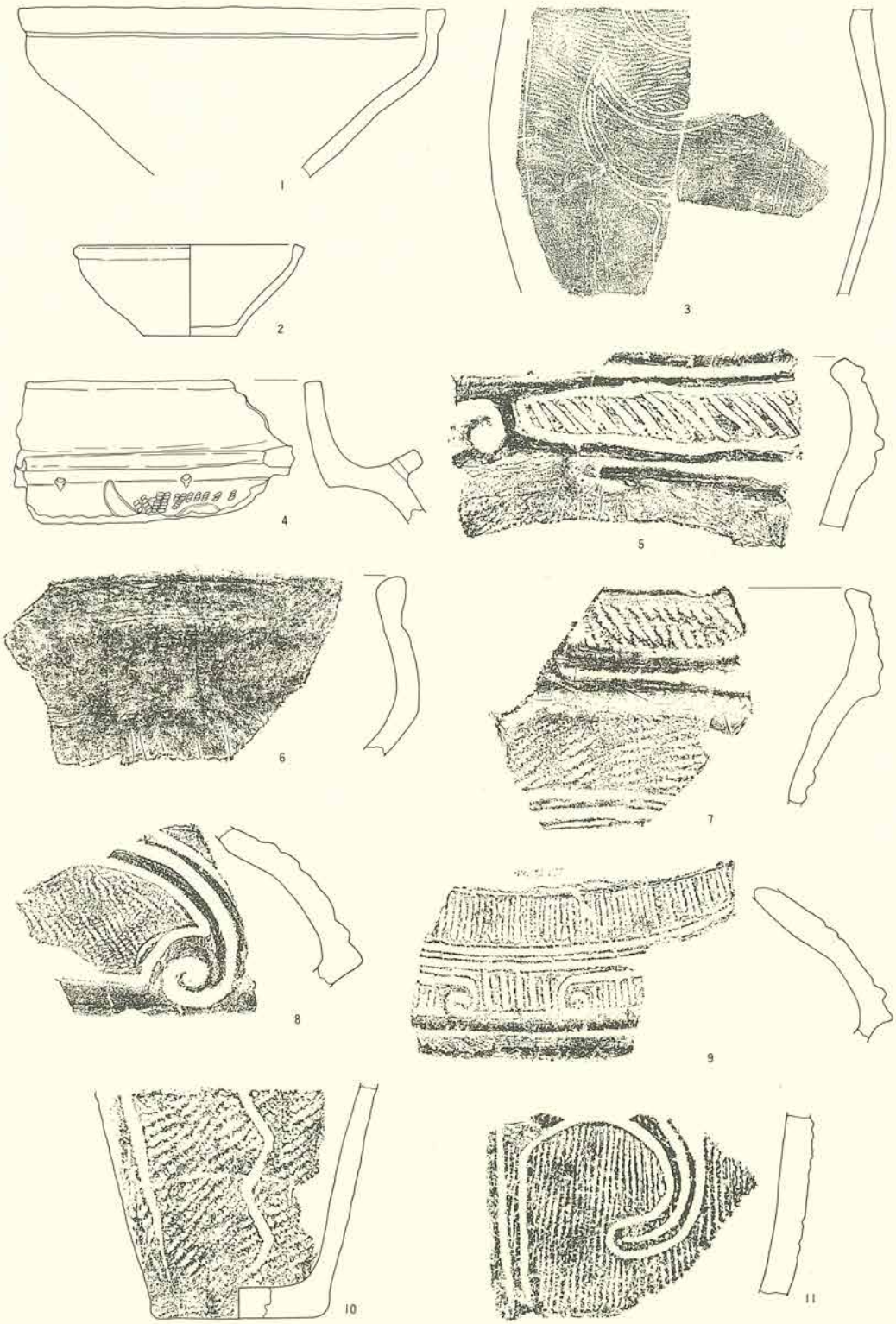
8・9は「く」の字に強く内湾する土器である。両者とも上端部を欠損しているが、前者は隆帯と沈線による渦巻文を構成し、その区画内に縄文ＲＬを施す。外面には赤彩痕が認められる。後者は、横に巡る沈線と渦巻文によって区画され、中には縦方向の沈線が充塡される。

10は深鉢の胴部から低部にかけての破片で、直線および波状の懸垂文が施される。地文は縦位の縄文ＲＬである。

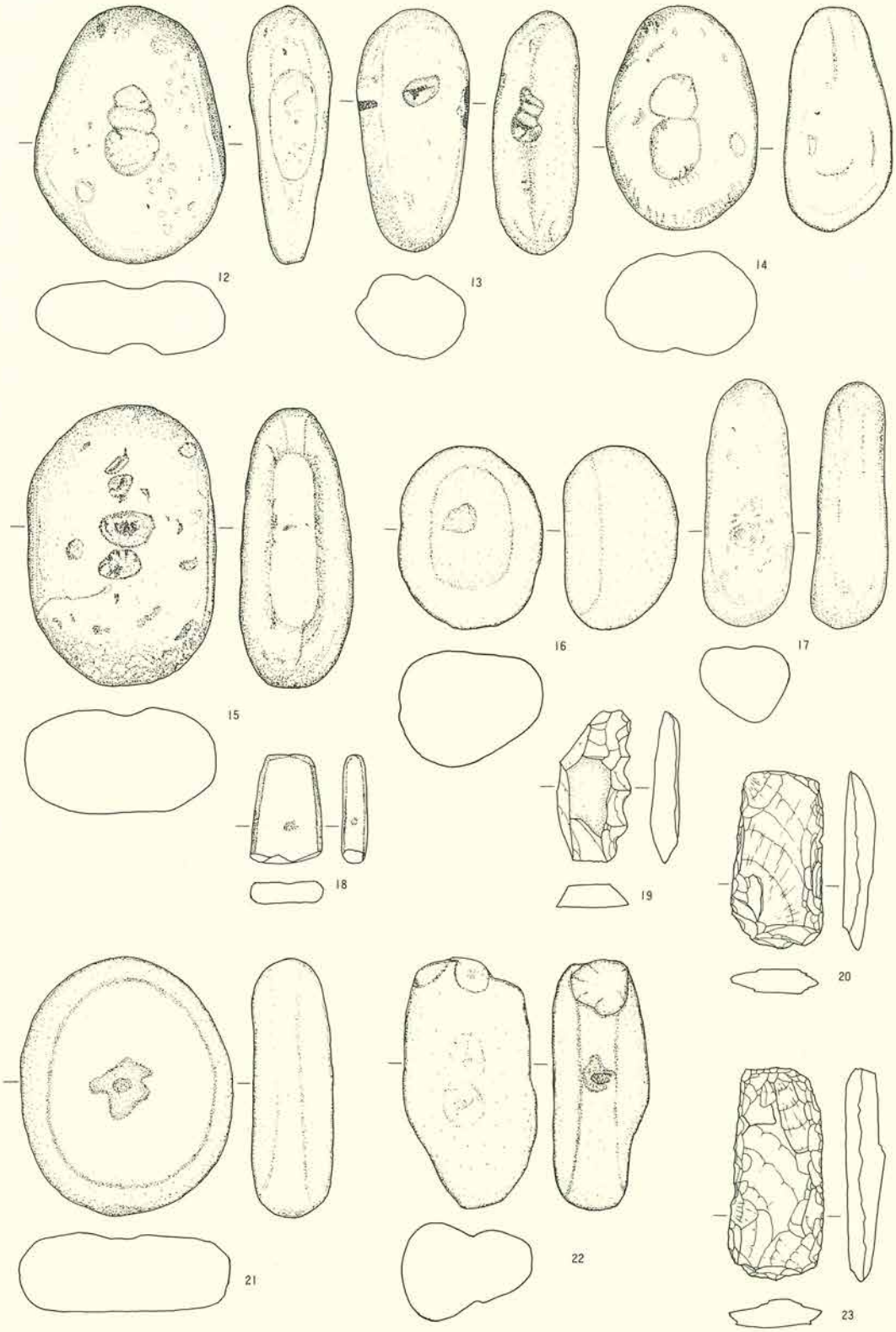
11は深鉢の胴部片で、地文撚糸Ｌの上に沈線による文様が施されている。

12～14は凹石である。いずれも両面に敲打痕が認められるが13には両側面にも打痕を有する。

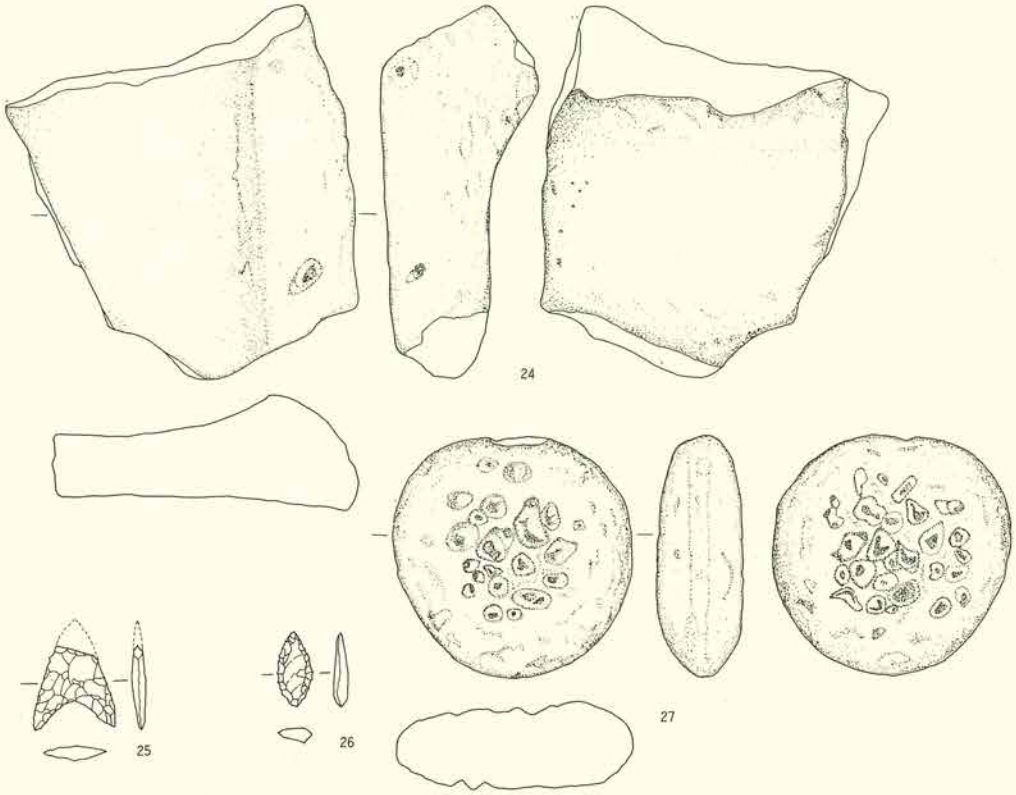
15～17・21は磨石である。15は両平坦面および両側面が良く研磨されており、一平坦面に集合打痕が認められる。16・17は片面のみ研磨され打痕が施されている。21は両平坦面が研磨されており片面中央部に打痕を有す。側面部も使用痕が認められる。22は両面および側面に打痕を有す



第17図　5号住居址出土遺物〔1〕（$\frac{1}{3}$、1～3は$\frac{1}{6}$）



第18図　5号住居址出土遺物〔2〕($\frac{1}{3}$)



第19図　5号住居址出土遺物〔3〕（$\frac{1}{3}$、25・26は$\frac{1}{2}$、27は$\frac{1}{6}$）

る凹である。

18は磨製石斧状の欠損した石製品であるが凝灰岩質の軟かい石材を使用している。

19は剝片石器で片縁に粗い調整が施されている。20・23は短冊形の打製石斧である。

24は両面が使用された石皿の破片である。

25・26は石鏃である。25は基部に抉れが入り、26は柳葉形を呈し側縁に調整剝離が入念に施されている。

27は河原石を使用した多孔石で両面とも使用されている。

出土遺物は浅鉢の破片が多く認められ、特徴的である。出土土器は多くが加曽E２段階に比定されよう。

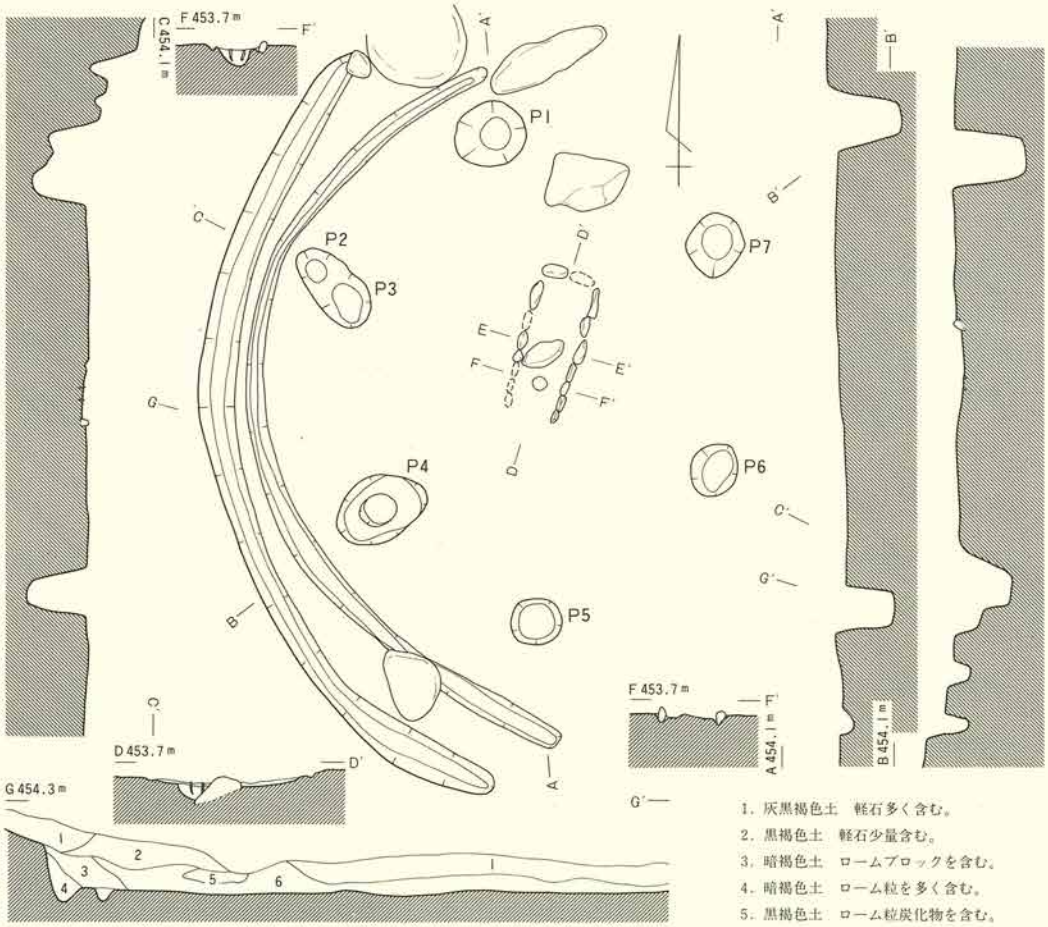
6号住居址

E－7、F－7・8グリッドに位置する。平面形は円形、あるいは楕円形を呈すると考えられるが東半分が削平されているため詳細は不明である。壁は西側で床面から26cmを測りやや外傾しながら立ち上がる。西側部分には壁周溝と思われる溝が2条確認され、いずれも明確な掘り込みを持っていた。床面はほぼ平坦で西側部分と炉付近で良く踏み固められていた。柱穴は7本検出されたが、内2本は建替時の重複と考えられ、炉を中心に配列されたほぼ等間隔の6本主柱と推

定できる。深さは40cm～60cmを測る。炉はやや長い小ぶりの河原石を焚口の南側を除いて長方形に列べて構築しているが西側の多くは抜かれていた。炉内には、焚口側に小型の深鉢の胴部が埋設されていた。遺物は床面からやや浮いた状態で出土した。

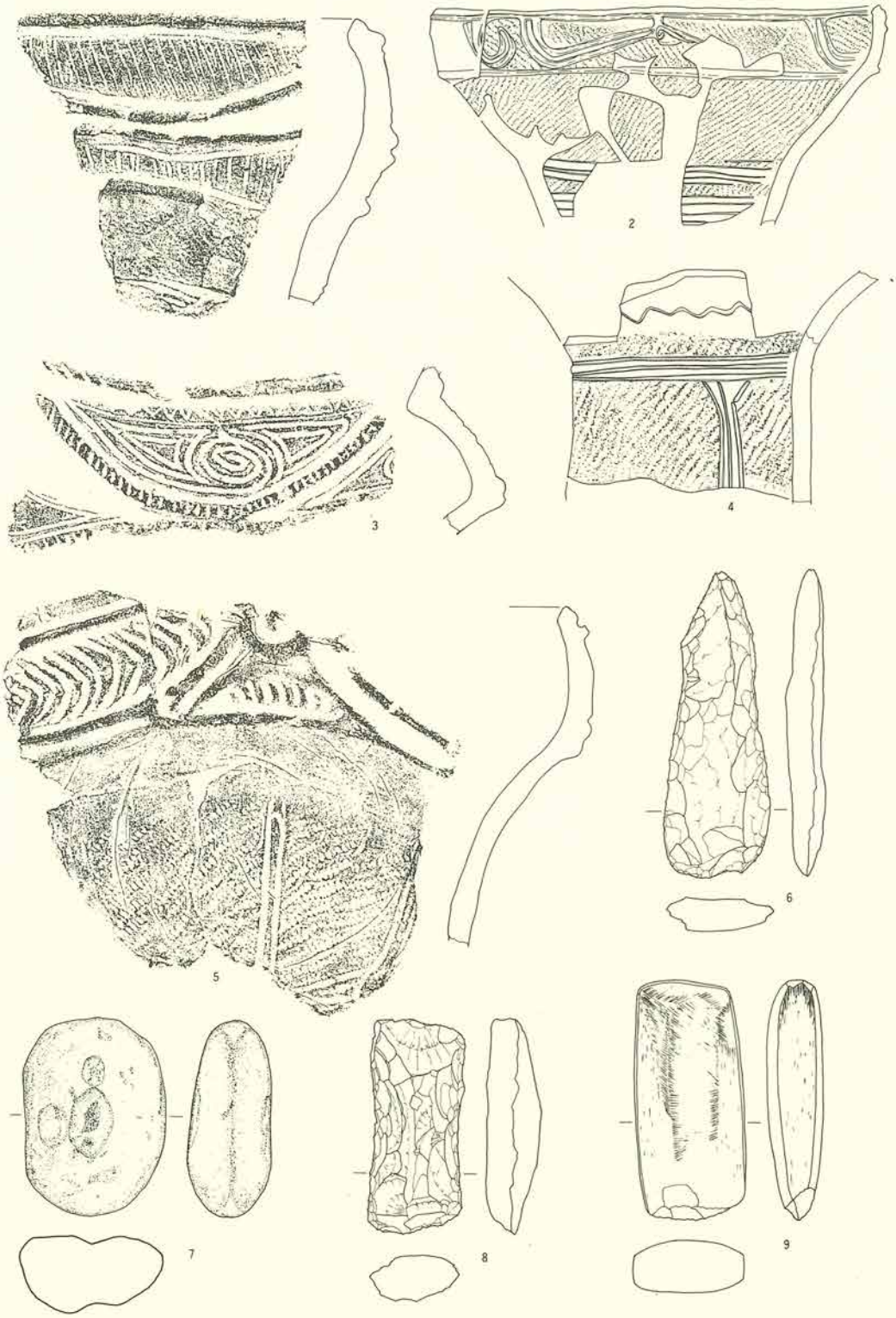
6号住居址出土遺物

1・2はキャリパー状を呈する深鉢の破片である。1の口縁部は隆帯と沈線によって横位に区画され中には細い斜行する沈線が充填される。頸部は無文である。2の口縁部は、横に巡る隆帯と蕨手状隆帯によって構成される。地文は原体RLが口縁部においては横位に、それ以下の部分については縦位に施される。3は胴上部が強く張り出し頸部でくの字に外反する浅鉢の破片である。胴下部は刻みを施した隆帯によって区画され、中には沈線による渦巻文や鋸歯状文が充填される。胴下部は無文である。4は炉に使用されていた小型の深鉢形土器で胴部から頸部にかけての破片である。頸部はやや下側に3条の沈線を巡らしその上側には波状沈線が巡る。胴部には沈線による懸垂文が下がる。胴部の地文は縦位の縄文RLである。5はキャリパー状を呈する深鉢の破片である。口縁部は隆帯による渦巻文を中心に横位に区画されその区画内にはくの字状の沈線が充填される。頸部上側は無文で胴部には2条1組の沈線が懸垂される。胴部地文は、縦位の

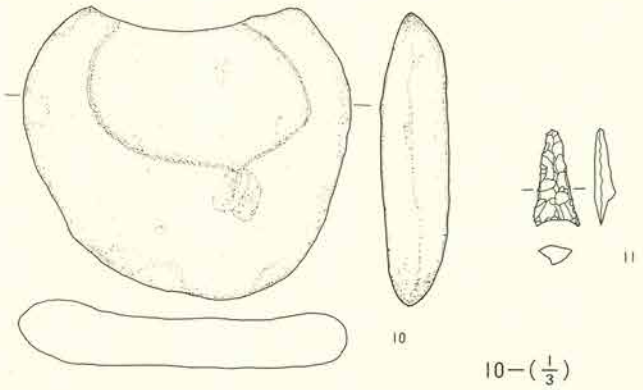


第20図　6号住居址（$\frac{1}{60}$）

縄文ＲＬである。



第21図　６号住居址出土遺物〔１〕（$\frac{1}{3}$、２・４は$\frac{1}{6}$）



10－($\frac{1}{3}$)
第22図　6号住居址出土遺物〔2〕11－($\frac{1}{2}$)

6・8は打製石斧である。6は撥形で8は刃部を欠損しているため詳細は不明である。

7は凹石である。平坦面には集合打痕が認められる。

9は磨製石斧であり、刃部を欠損している。全面に顕著な擦痕を残す。

10は小型の石皿状石器である。一部欠損しているが一面に磨滅による浅い凹を有する。

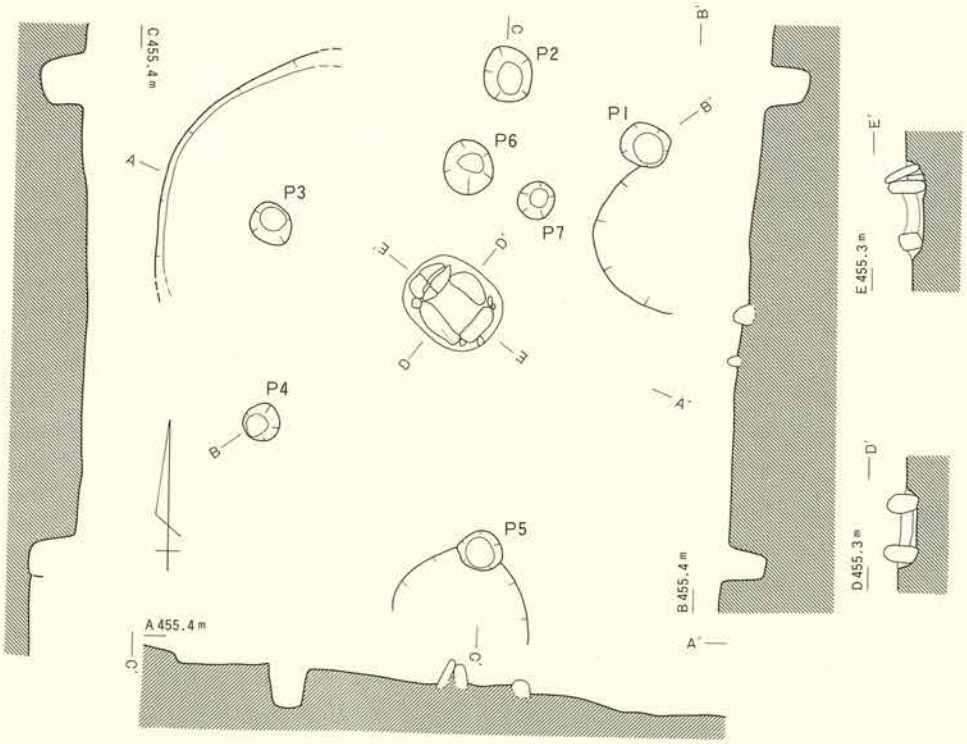
11は無茎の石鏃である。長軸が長く基部には弱い抉れが入る。

以上、出土遺物について記してきたが、深鉢の頸部は、無文あるいは無文化傾向が観取され加曽利E 2段階に比定される土器と考えられる。

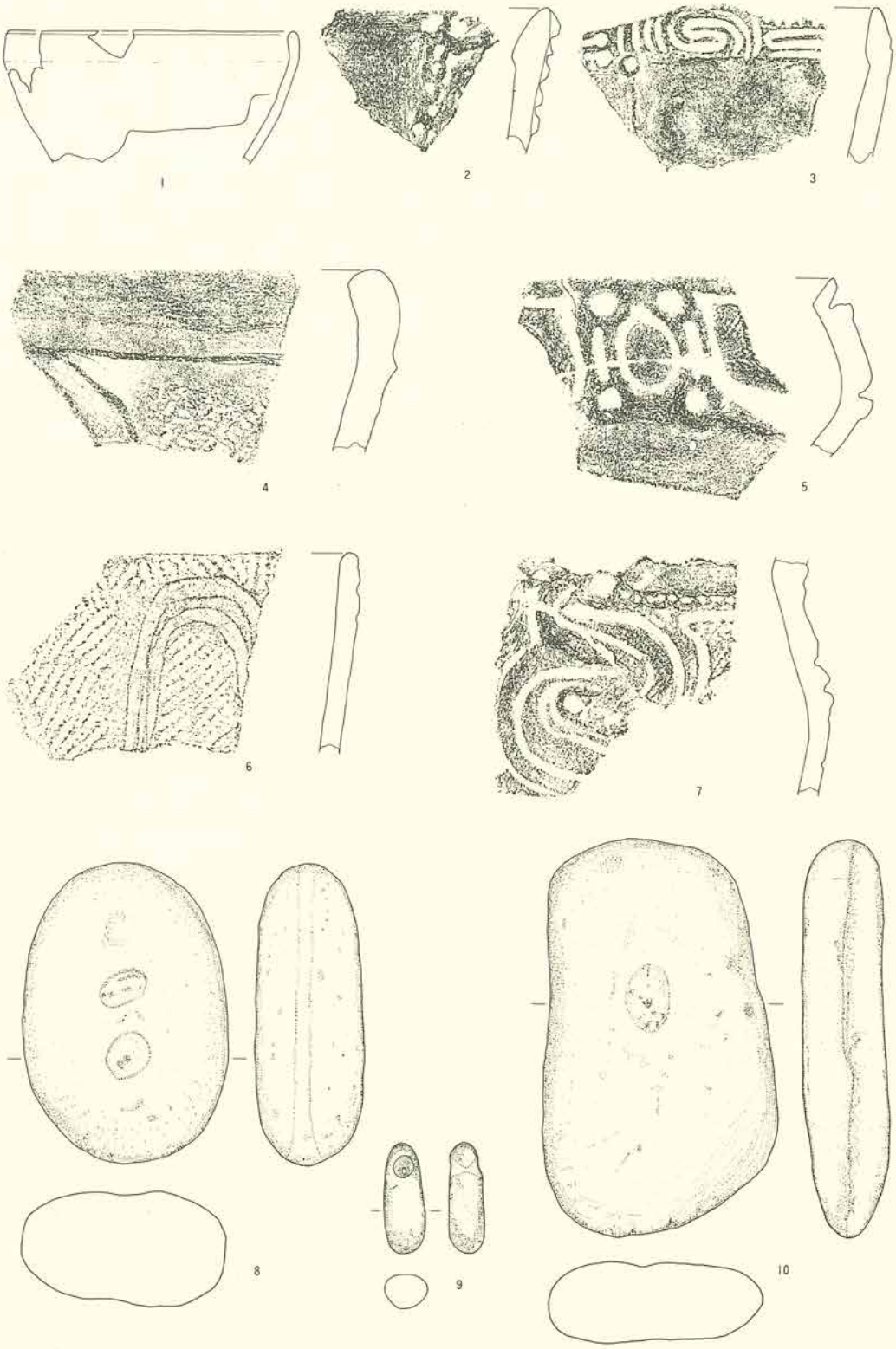
7号住居址

G－4・5グリッドに位置し、9・10号土坑と重複するが新旧関係は不明である。平面形は、北西側で確認された浅い壁から円形状を呈していたと推定される。

床面はほぼ平坦で東側に傾斜していたが明確にはし得なかった。柱穴は7本検出されたが主柱



第23図　7号住居址（$\frac{1}{60}$）



第24図　7号住居址出土遺物（$\frac{1}{3}$）

穴はP_1～P_5と判断でき深さは、30cm～36cmを測る。炉は他にいくつかの礫を使用するものの、基本的には4枚の大型の河原石を組んで構築している。遺物は削平が床面付近にまで及んでいる部分が多かったためまばらにしか確認できなかった。

7号住居址出土遺物

1は口縁部がやや内湾した浅鉢の破片である。内外面とも良く磨かれている。

2・3は口縁内側にくびれをもつ破片である。2の口縁は内削状を呈し、口唇部には円形刺突の施された∞状の隆帯が貼り付けられその下側には鎖状の隆帯が連なる。3は口縁上部がやや内湾し、その部分は沈線による曲線文や円形刺突文によって構成され、胴部には口縁部から微隆起による懸垂文が垂下される。

4は口縁部が肥厚しやや内湾する深鉢の口縁部片である。口縁上部は無文でその下に微隆起による区画がなされている。地文は縦位の縄文ＲＬである。

5はキャリパー状を呈する深鉢の口縁部片である。口唇部は平縁で、隆帯と沈線により円形あるいは方形に区画され、擂鉢状の円形刺突文が施される。区画内には無節縄文Ｌが施される。

6はやや直立した深鉢の口縁部片でアーチ状懸垂文を施す。地文は口縁上部では原体ＲＬを横位にそれ以下では縦位に施す。

7は深鉢の胴部片である。頸部には一部刺突による列点が施され、胴部には沈線による曲線文が描かれ円形刺突文を有する。

8は磨石である。両平坦面は研磨されており、中央付近には浅い敲打痕が認められる。

9は石製垂飾りである。長さ5cmで両端が丸みをもつ円筒状を呈し、断面形は不整楕円形である。上端側に、両方向から擂鉢状に突孔が施されている。

10は凹石である。片側平坦面に浅い打痕が施されている。

出土遺物は少なかったが、土器は加曽利Ｅ4式、堀ノ内1式併行期の土器が多くを占めた。

8号住居址

Ｆ－5・6、Ｇ－5・6グリッドに位置し、8・9、11～14号土坑と重複している。切り合い関係や出土遺物の比較から本住居は、以上の土坑より古いと判断されたが、9号土坑との関係については新旧関係を明確にすることができなかった。平面形は長軸5m58cmの楕円形を呈すると考えられるが東半分については壁を確認できなかったため詳細は不明である。壁高は西壁で30cmを測りやや外傾して立ち上がる。床面は炉から柱穴の付近までは堅く良好であったが周辺部は軟弱であった。ピットは14個検出され、深さは8cm～32cmを測るが規模および配置からP_1～P_8が主柱穴と考えられる。

炉は住居ほぼ中央に検出されたが南側は11号土坑に切られていた。形態は、やや小ぶりの河原石を長方形に列べて構築していたと推定できるが調査時には半数以上が抜かれていた。炉中央には径28cmのピットが存在したことから、この部分に小型の鉢が埋設されていたことが他の住居の

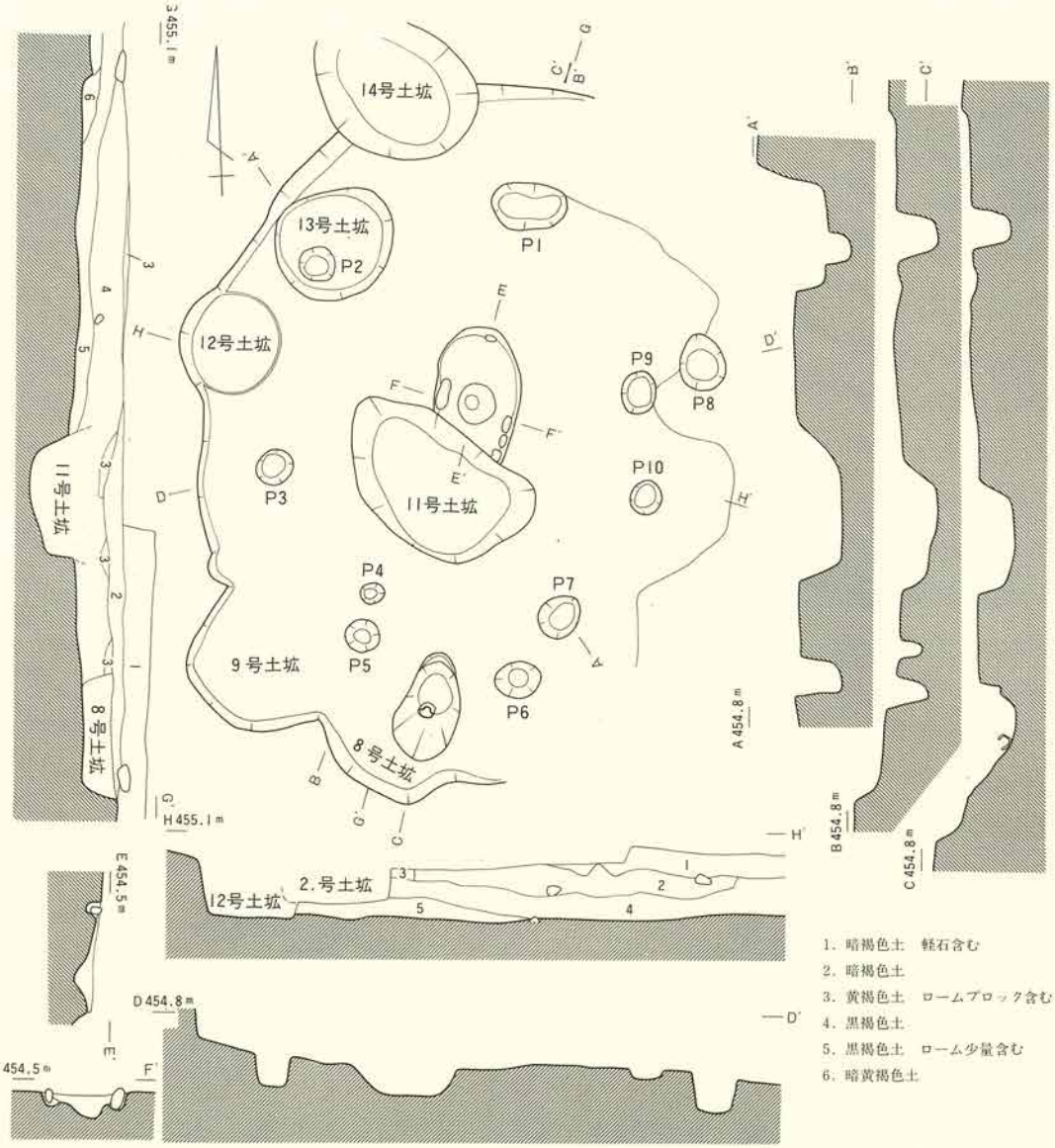
例から推察できる。

住居南側部分には、楕円状の変形ピットが確認され、この中からはほぼ床直状態で小型の鉢が検出された。遺物は床面からやや浮いた状態で出土した。

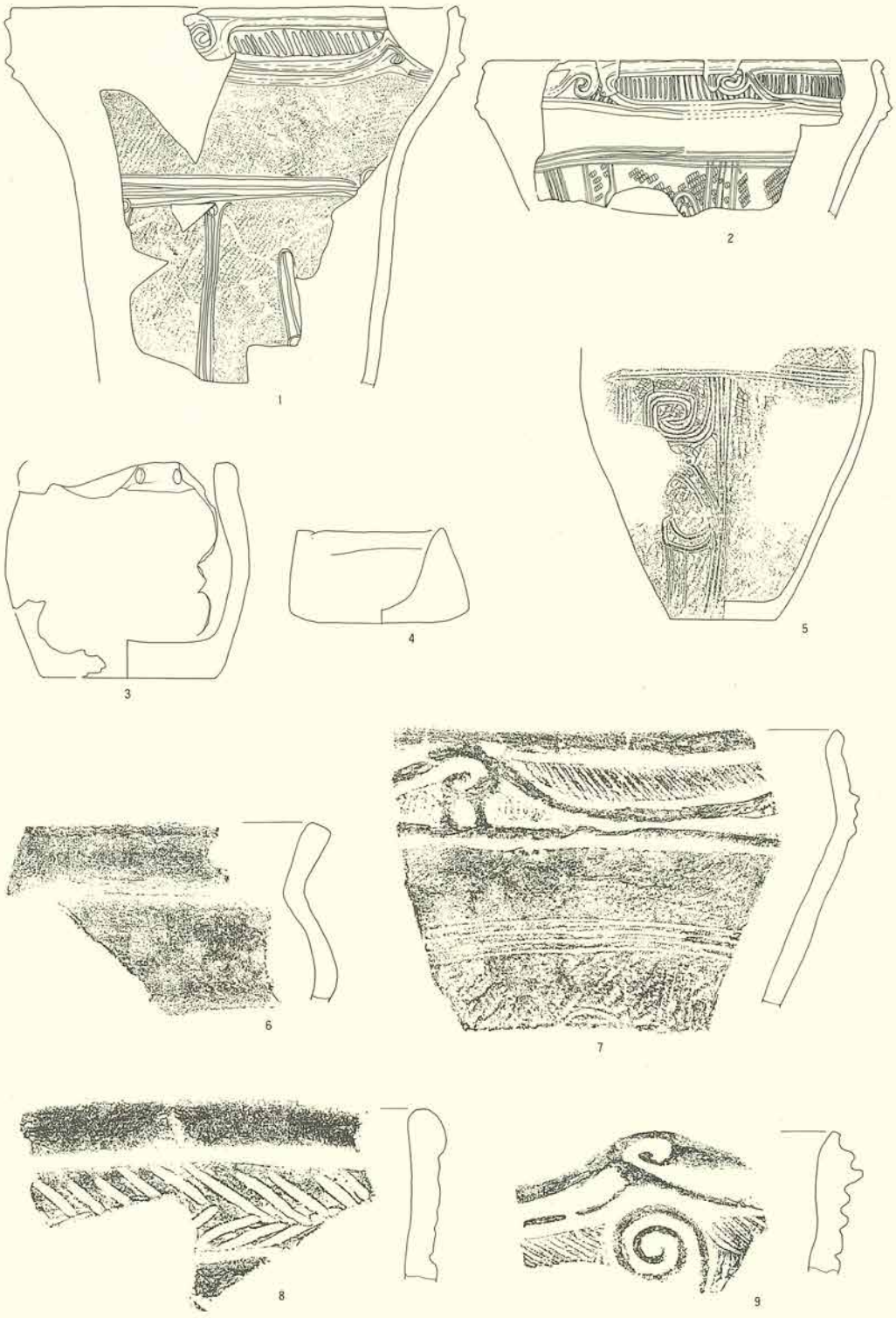
8号住居址出土遺物

1はキャリパー状を呈する深鉢の大形破片である。口縁部は横に巡る隆帯や渦巻文によって区画され、中には斜行沈線が充塡される。頸部には3条の沈線が巡り胴部と区画されている。胴部には沈線による懸垂文が垂下される。地文は縄文LRである。

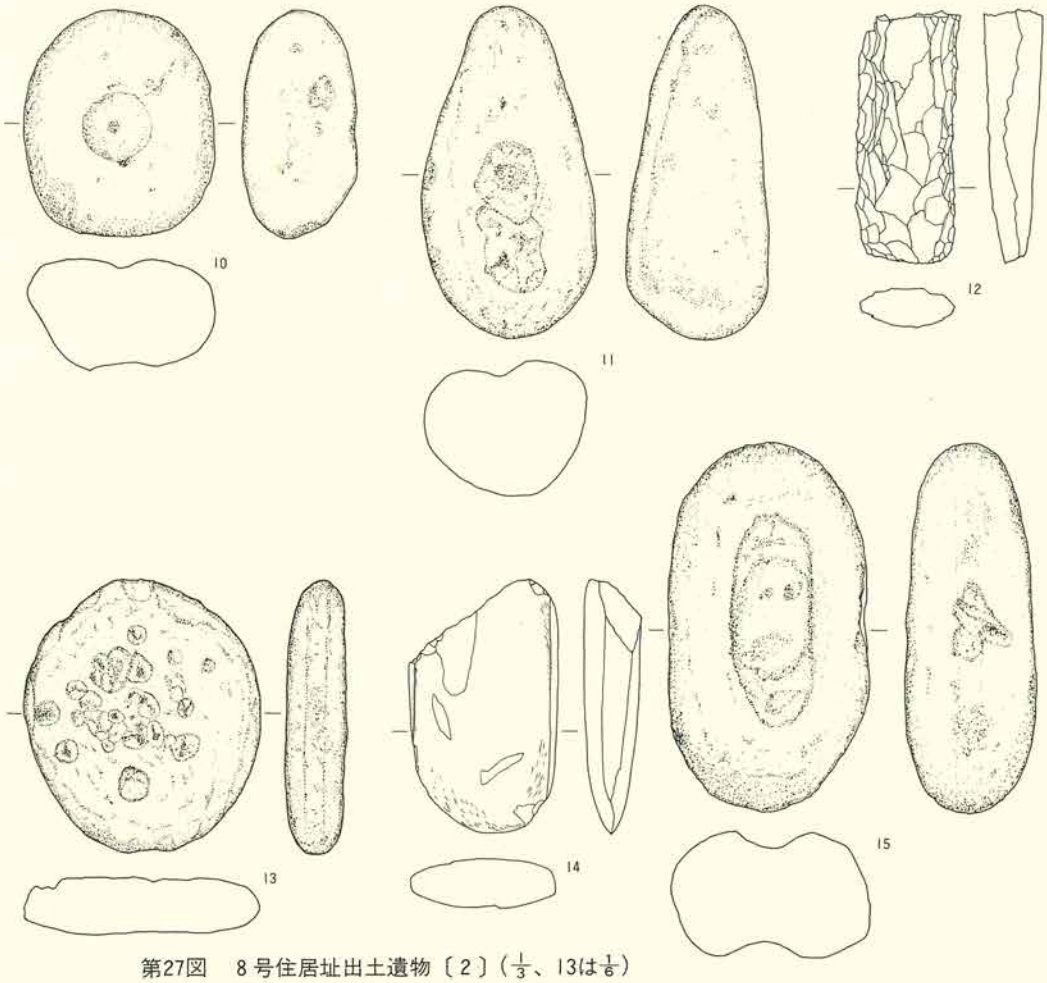
2は1よりやや小ぶりのキャリパー状深鉢の破片である。1と同様に口縁部は横の隆帯や渦巻文によって区画され、中には縦の沈線が充塡される。頸部は横に巡した沈線によって上下に区画



第25図　8号住居址（$\frac{1}{60}$）



第26図　8号住居址出土遺物〔1〕（$\frac{1}{3}$、1・2・5は$\frac{1}{6}$）



第27図　8号住居址出土遺物〔2〕（$\frac{1}{3}$、13は$\frac{1}{6}$）

され、上は無文帯となっている。下側は、半截竹管を使用した平行沈線による懸垂文や楕円文・蕨手文が施される。地文は縄文ＲＬである。

3は南端のピットより検出された小型の鉢である。胴部の一部から口縁部の大部分を欠損している。胴部は丸味をもち、隆帯を巡らした直立した短い口縁を有する。隆帯上には指頭によると思われる刻目を有する。内外面とも磨かれており赤彩痕が認められる。

4は軽石を利用した器である。底部が広く胴および口縁部がやや内湾した浅鉢状を呈する。口縁上部には、隆帯状の弱い張り出しが認められる。

5は深鉢の胴部から底部にかけての破片である。胴上部には半截竹管による平行沈線と波状文がめぐる。その下側には沈線による懸垂文や蕨手文が施される。地文は縦位の縄文ＲＬである。

6は浅鉢形土器の破片である。胴上部が強く張り、口縁部はくの字に外反する。内外面とも磨かれており赤彩痕が認められる。

7はゆるいキャリパー状を呈する深鉢の破片である。口縁部は横に巡る隆帯と蕨手文によって区画され、中には縦あるいは斜方向の細い沈線が充塡される。胴上部は横に巡る沈線によって頸

部の無文帯と区画されその下側には懸垂文が施される。地文は縦位縄文ＲＬである。

８は深鉢形土器の口縁部片で、横に巡る沈線による区画内に逆くの字状の沈線が充塡される。

９も深鉢形土器の口縁部片である。隆帯による渦巻文がなされ中に斜行する沈線が充塡される。

10・11・15は凹石である。11は片面に打痕が認められる。10・15は両面に集合打痕が有り、後者には両側面についても認められる。

12は短冊形の打製石斧で基部及び刃部先端部を欠損している。

13は円盤状の河原石を利用した多孔石である。擂鉢状の凹みが片面に多く穿たれている。

14は基部を欠損した磨製石斧である。

以上出土遺物の代表的なものを概観をしてきたが、土器については、第１文様帯が縄文から沈線に変換していることや、頸部の無文帯を意識した構成をしていることから、加曽利Ｅ２段階に比定することができよう。

９号住居址

Ｉ－６・７グリッドに位置し、調査地区内では東向の斜面の西端にあり、最も高いレベルに存在する。平面形は南北で６m10cmを測り円形を呈すると考えられるが東側が削平されているため詳細は不明である。壁は北西側で14cmを測り外傾して立ち上がるが不明瞭であった。床面はやや凹凸があり硬質な面は確認できなかった。ピットは８本検出されたが主柱穴はP_1～P_6であろう。深さは18cm～32cmを測る。炉は住居のほぼ中央に４個の大型河原石を利用した石囲い炉である。尚、本住居には３ケ所に土器の埋設が確認された。１基は石囲い炉の南東に近接して胴部以下を欠いて埋設しており東および西側に小ぶりの河原石を多く添えている。底面の土は焼けており炉として使用されたと推定できる。削平や攪乱が底面付近まで及んでいたため、遺物は少量が検出されたのみである。

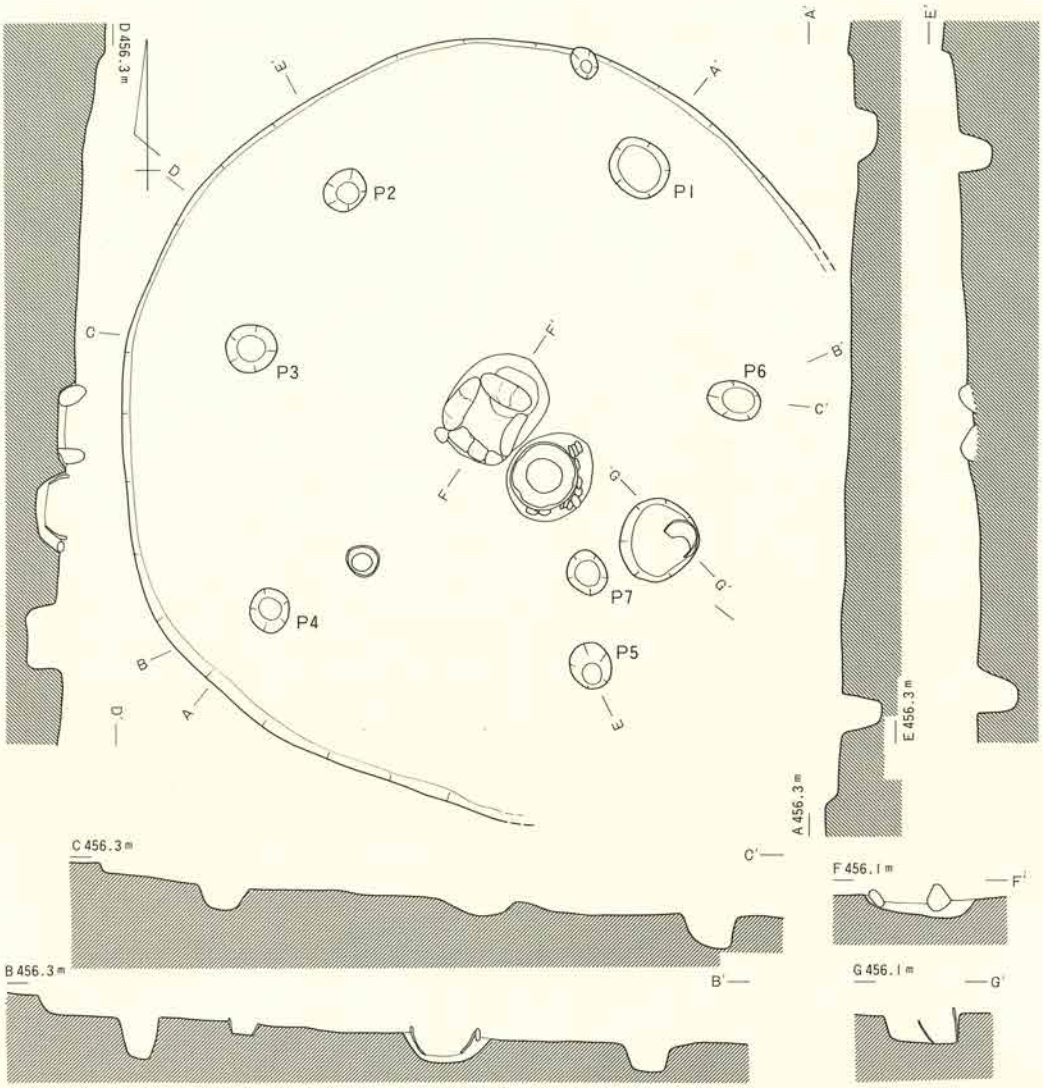
９号住居址出土遺物

１は炉の南西側に検出された埋設土器である。胴下部のみの破片で、沈線による懸垂区画により幅広い磨消し部を有する。地文はやや乱れているが、縦位の無節縄文Ｌを基本とする。

２は上記のとおり石囲い炉の南東に近接した大型の埋設土器で胴中部以下を欠損する。器形はゆるいキャリパー状を呈し、口縁部の第１文様帯がくずれ沈線による楕円文に変化している。口縁上端は５つの小波状を呈す。頸部以下は幅の広い磨消し部をもつ、磨消し縄文である。地文は原体ＲＬを使用し不規則に施されている。

３は炉の南東側に埋設されていた深鉢胴部の破片である。胴上部は沈線による同心円文が施されるが以下は沈線による懸垂文によって区画され、幅広い磨消し部を構成している。地文は、縦位の無節縄文Ｌである。

４は深鉢の胴部破片で、櫛描による縦方向の波状文が全面に施されている。

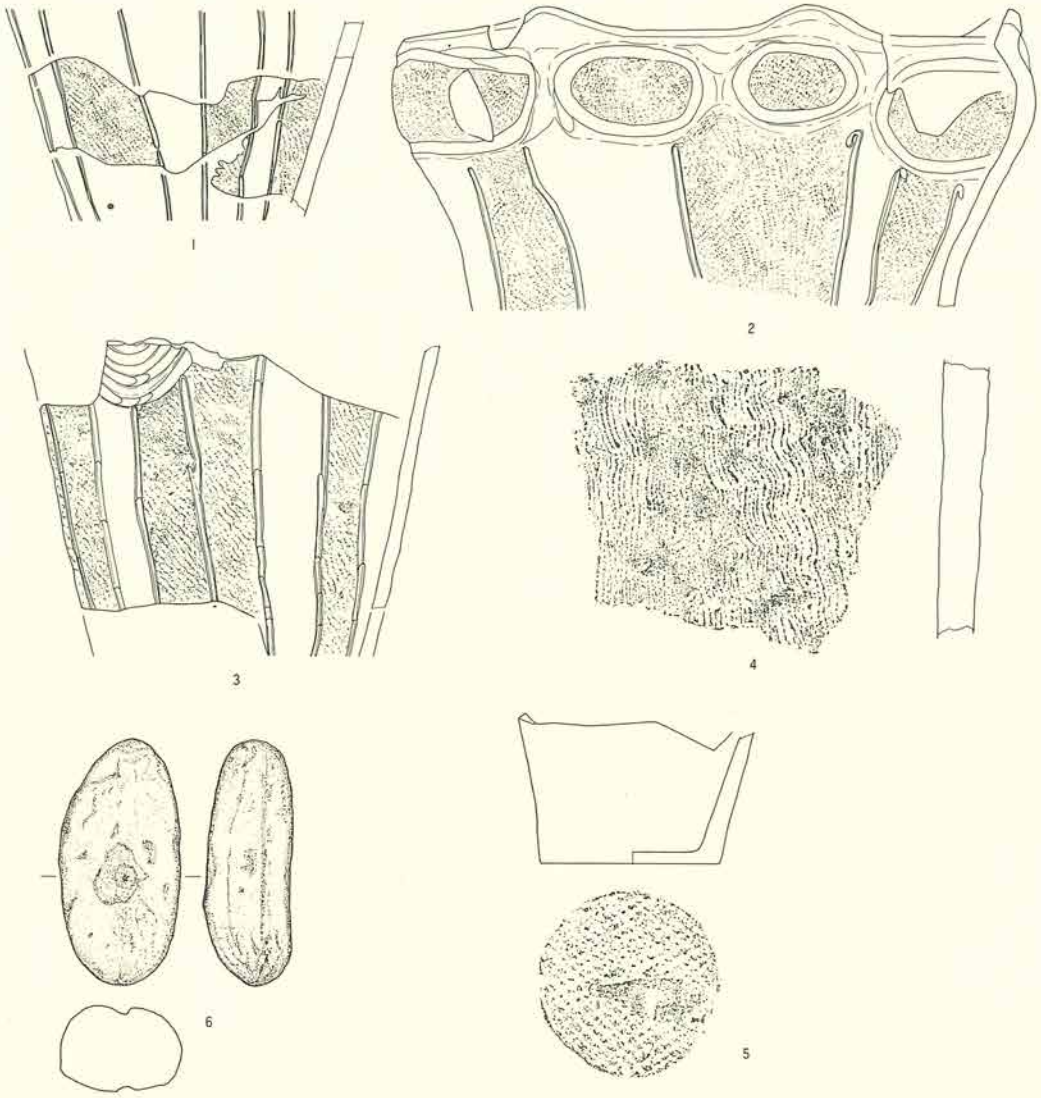


第28図　9号住居址($\frac{1}{60}$)

5は小型の深鉢の胴下部から底部にかけての破片である。器壁は良く磨かれており底部には網代痕を有する。

6は凹石である両面中央部に集合打痕を有する。

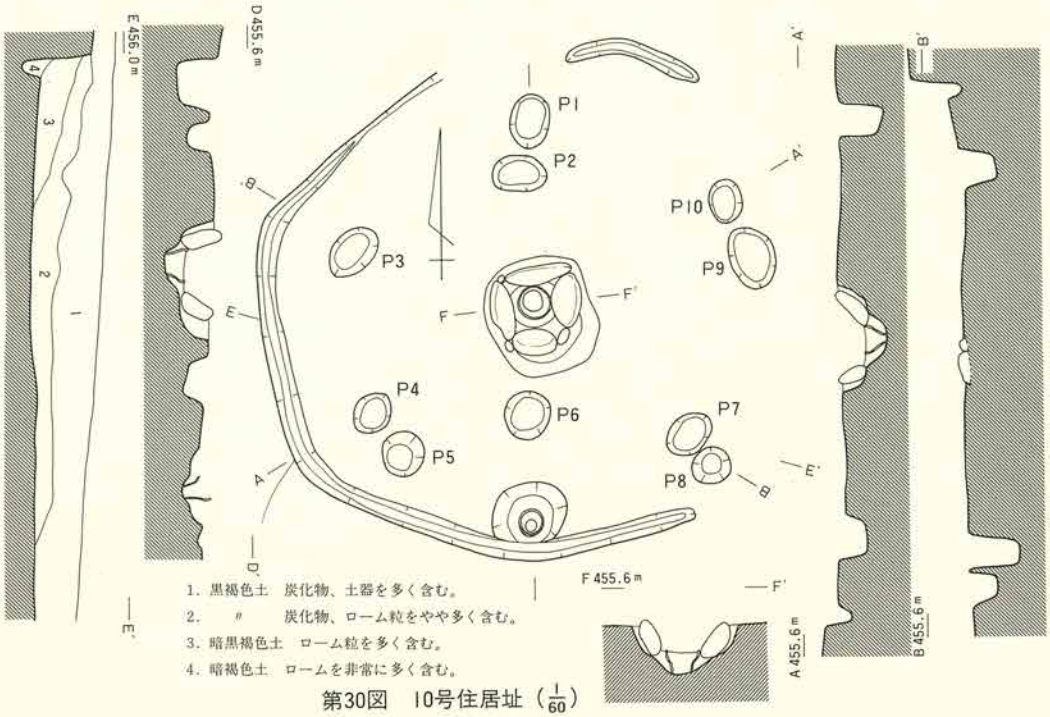
以上本住居の遺物を概観してきたが、土器における口縁部の第1文様帯のくずれや、懸垂文間の磨消し部が広いことなどから、1部を除いては加曽利E3の新しい段階からE4の古い段階に比定されよう。



第29図　9号住居址出土遺物（$\frac{1}{6}$、4・5は$\frac{1}{3}$）

10号住居址

H－10・11グリッドに位置し、11号住を切って構築している。平面形は、北側および東側が削平されていたため明確ではないが、残存部から隅丸六角形状を呈していたと推定される。壁は西壁のみ検出され残りの良い部分で40cmを測り垂直ぎみに立ち上がる。北側の一部と西および南側には壁周溝が認められ、南側部分は11号住居址の炉を切っている。床面はほぼ平坦で良く踏み固められていたが東側部分については明確にできなかった。柱穴と思われるピットは10本検出されたが同時に使用されたのは5本であり、2本が近接しているのは立替えの為と推定できる。柱穴の深さは16cm～40cmを測る。炉はほぼ住居の中央から検出された。大ぶりの4枚の河原石を基本



第30図　10号住居址（$\frac{1}{60}$）

に組んだ石囲い埋甕炉で、下焼面は埋甕上端の面であった。壁周溝に接した南側の部分では、底の浅いやや大きめのピットを検出し、中には底の欠損した深鉢が埋設されていた。遺物は床面からやや浮いた状態で出土したが大形の破片が多く認められた。

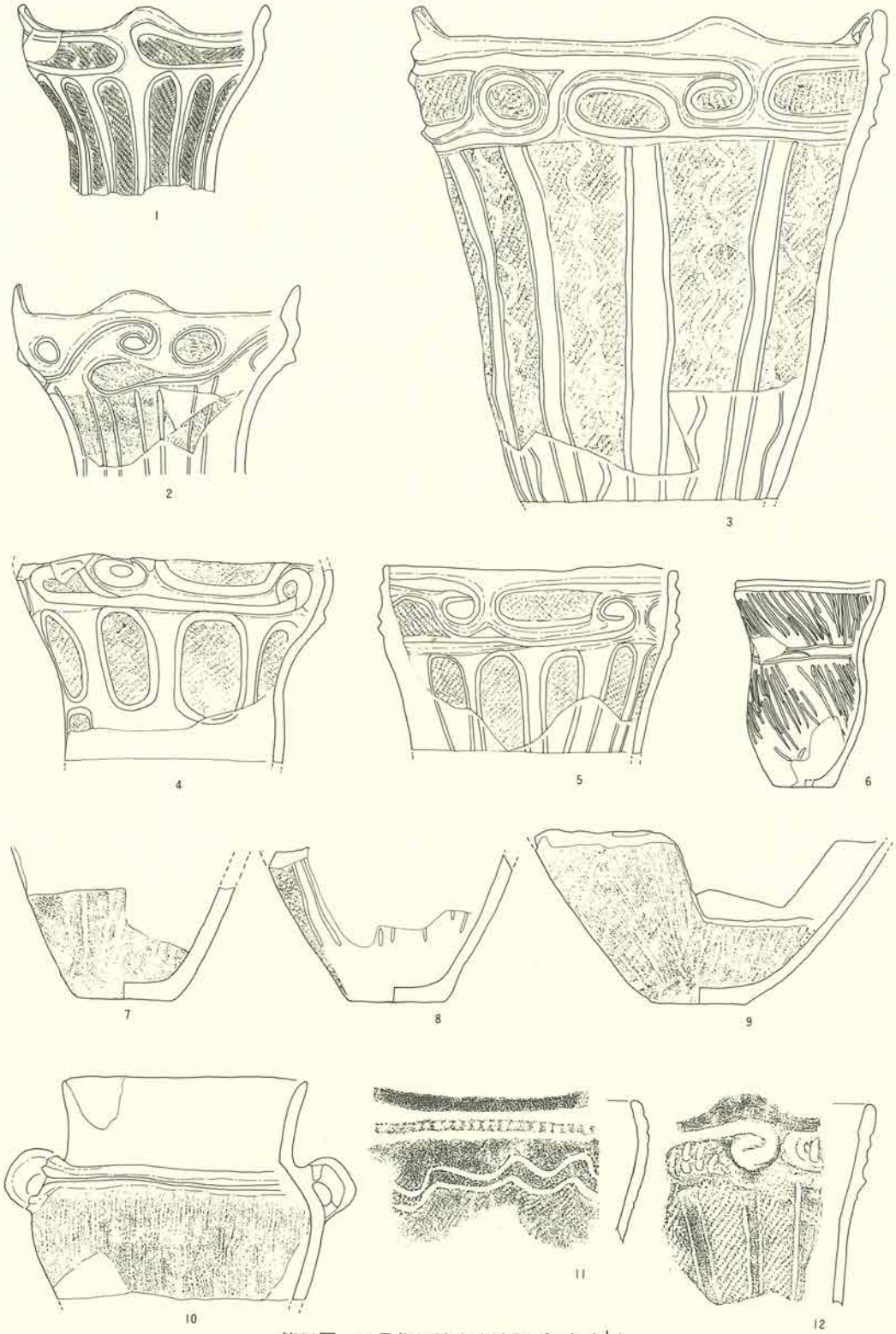
10号住居址出土遺物

1は住居南側のピットより検出したゆるいキャリパー状を呈する深鉢で、胴下半を欠損する。口縁部には山形の突起が4つ付けられ、その下側には、沈線による4単位の長楕円文が施される。頸部以下はアーチ状懸垂文によって区画される。口縁および胴部の区画内には縄文ＬＲが施される。

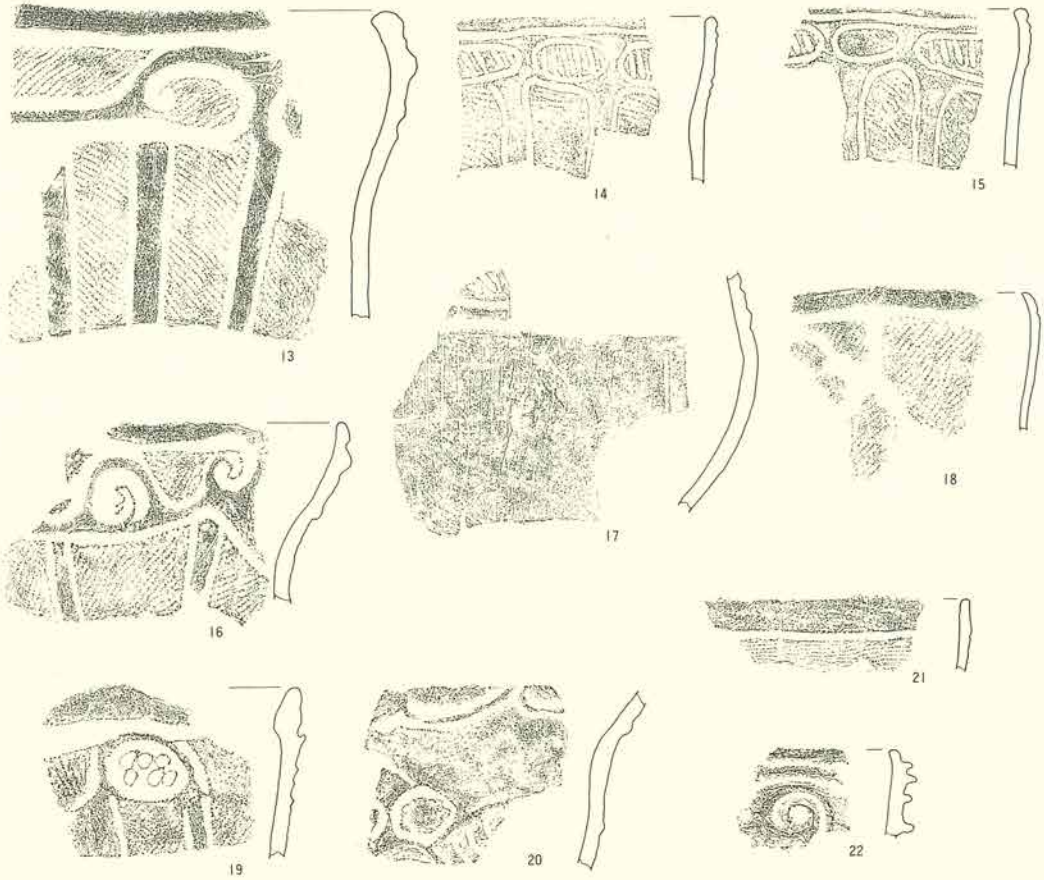
2は1と同形の深鉢形土器である。口縁部は渦巻文が円文・楕円文によって構成されるが胴部は沈線による懸垂文によって区画され磨消し部をもつ。縄文はＬＲである。

3は口径48cm現存高48.5cmの大型土器で胴下半を欠損している。器形は口縁部が僅かに内湾しながら開き胴上位が若干括れる深鉢形を呈する。口縁上端には内側に沈線による渦巻文を有する山形の突起が4つ付けられる。口縁部は隆帯と沈線による円文・楕円文により5単位に構成される。頸部以下は沈線による2本1組の直線的な懸垂文と波状の懸垂文が交互に施され、前者の懸垂文間は磨消されている。縄文はＲＬの縦位を多用している。

4は石囲い炉に埋設されていたキャリパー状を呈する深鉢で、口唇部と胴下半を欠損する。口縁部は沈線による円文と楕円区画文が交互に配され6単位で構成されている。頸部から胴部にかけては、括れを境に上半に縦位の楕円区画文を、下半にはアーチ状の懸垂区画文を垂下する。縄文は縦位のＲＬが施される。



第31図　10号住居址出土遺物〔1〕($\frac{1}{6}$)



第32図　10号住居址出土遺物〔２〕（$\frac{1}{6}$）

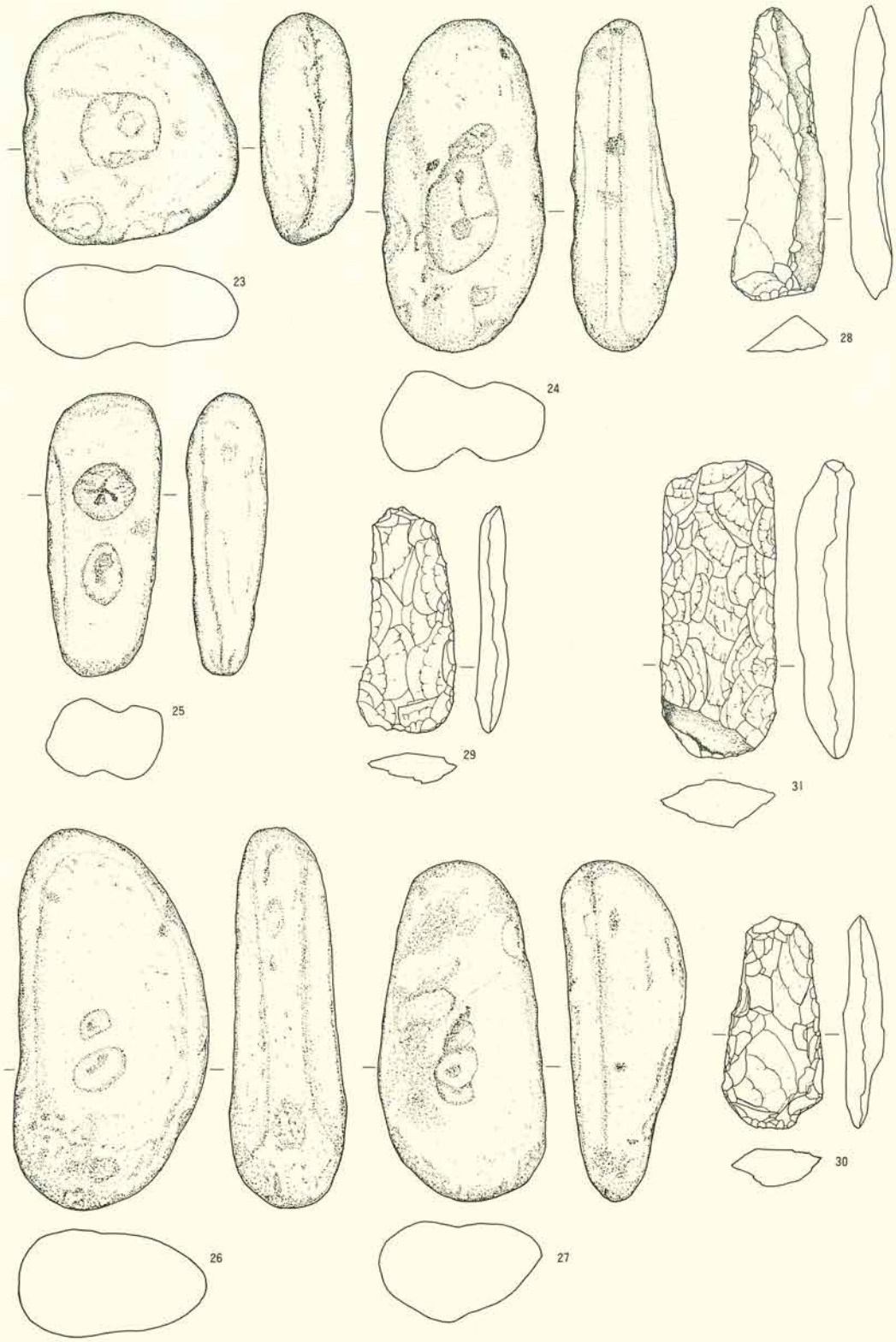
５は口縁部がほぼ直立し胴上位で若干括れる深鉢形土器の破片である。口縁部は隆帯と沈線による円文と楕円区画文により構成され、胴部には沈線によるアーチ状懸垂文が施される。楕円区画および胴部の区画内には縦位の縄文ＲＬが充塡される。

６は頸部で括れ、やや内湾しながら口縁部が開く小型の深鉢形土器で、頸部および胴部を部分的に欠損する。口縁上部と頸部には沈線が巡り、口縁・胴部には斜行する沈線が施される。所謂、重弧文の系譜に連なる土器であるが、すでに片流れ沈線に変化している。大型のものが一般的であるこの時期の重弧文土器としては、小型はめずらしい。

７～９は深鉢の胴下部から底部にかけての破片である。７・８は沈線による懸垂文の区画により磨消部を持つ。縄文は前者が縦位のＲＬ、後者は不明である。９は器壁が薄く胴部が張る器形である。文様は細い縦位の沈線が全面に施される。

10は長い無文の口縁部がやや外反して立ち上がり、胴部が張る把手付の甕形土器である。口縁部の一部と片側の把手および胴下部を欠損する。肩部には一条の隆帯を施し、それ以下は条線文を縦位に施す。把手は橋状把手の祖型である。

11はゆるいキャリパー状を呈する深鉢である。口縁上部には２本の平行沈線が巡り、中には



第33図　10号住居址出土遺物〔3〕($\frac{1}{3}$)

列点文が施される。胴上部には、間を磨り消した２本の平行波状沈線が施され地文の縄文は縦位のＲＬである。連弧文の最終段階に位置する可能性のある土器である。

12は口縁部がやや外反し、山形の突起をもつ深鉢形土器の破片である。口縁部は沈線により、くずれた渦巻状の円文や楕円区画文によって構成される。区画文の中には幅の広い縦の沈線が施される。頸部以下は２本１組の沈線による懸垂文により区画され、磨消部を有する。縄文は縦位のＲＬである。

13はゆるいキャリパー状を呈す大型の深鉢形土器の破片である。口縁部は沈線を中心にした円文や楕円区画文によって構成され、頸部以下は沈線の懸垂による幅広い磨消部をもつ。縄文は口縁部が横位の頸部以下が縦位のＬＲである。

14・15は口縁がやや内湾ぎみに立ち上がる深鉢形土器の破片である。いずれも口縁上端に１条の沈線が巡り、その下側には楕円区画文が施され、14にはすべてに、15には１つ置きに縦位の沈線が充填される。頸部以下にはアーチ状懸垂文が施され、区画内には縄文ＬＲが施文される。

16はゆるいキャリパー状を呈する深鉢の破片である。口縁部には欠損しているが山形の突起をもち、その部分については頸部の区画についても山形状を呈する。口縁部の文様は、沈線および隆帯によるくずれた渦巻状を呈する。頸部以下には沈線による懸垂文の区画による磨消し部をもつ。縄文は縦位のＲＬである。

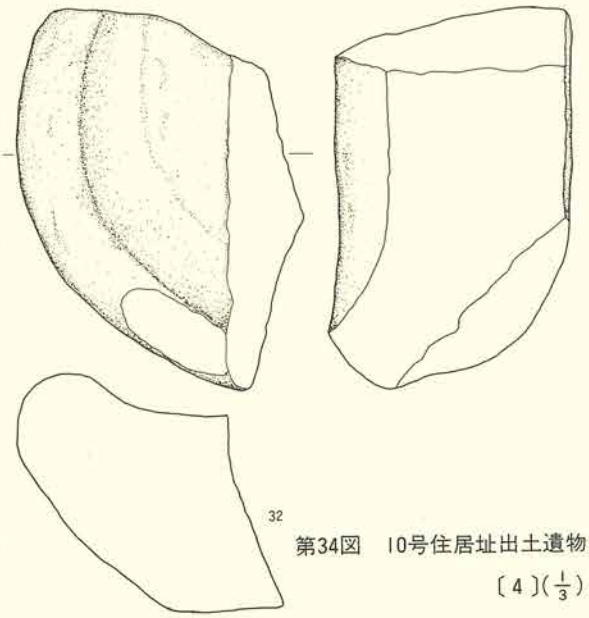
17は胴部がやや張る深鉢形土器の破片である。肩部には１条の隆帯が巡り、その上部には幅広の斜向する沈線が、下部には櫛状工具による縦位の沈線が施される。

18は口唇部が内湾する小型の深鉢形土器である。口縁上部には一条の沈線が巡り、それ以下には縦位の縄文ＲＬが施される。

21はやや直立した口縁をもつ深鉢の破片である。口縁上部は１条の沈線が巡り、その下側には斜位の縄文ＲＬが施される。

19は開きながら口縁上部がやや内湾する深鉢形土器である。口縁端部には山形の突起が付く。口縁部文様は、上端に１条の沈線が巡りその下側に隆帯と沈線による円文・楕円文が施され、円文内に楕円形の刺突文が充填される。口縁区画以下には、中を磨り消した２本の懸垂文が垂下される。縄文はＲＬである。

20は胴部が若干括れる深鉢形土器の破片である。括れ部分は無文であるが上部には楕円区画文が施され、中には縄文が施される。下部には沈線による円文、隆帯による



第34図　10号住居址出土遺物
〔４〕（$\frac{1}{3}$）

楕円区画文が施され、区画内には幅広の沈線が充塡される。

22は口唇部が内湾する深鉢形土器の口縁部で、断面三角形の高い隆帯による渦巻文が施される。

23～27は凹石である。23～26は両面に、27は片面に集合する打痕を有する。

28～31は打製石斧である。28～30は撥形を呈し28、29は片面に自然面を残す。

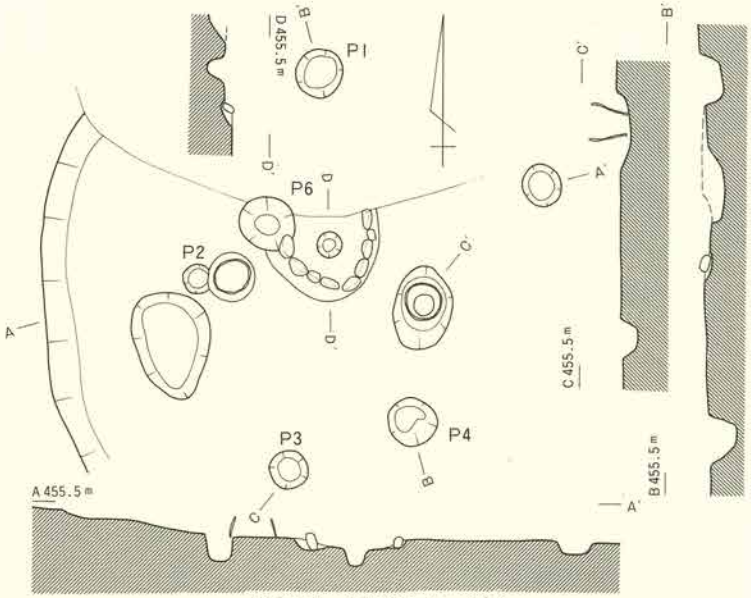
31は短冊形を呈し片面に自然面を残す。

32は石皿の破片で使用面はよく研磨されている。

以上本住居の遺物を概観してきたが、土器は大型破片が多いことが特徴的である。一般的な傾向としては第１文様帯の渦巻文が消失し、胴部に幅広の懸垂文が施される。加曽利Ｅ３の新しい段階から加曽利Ｅ４の古い段階に比定される。

11号住居址

Ｈ－９・10グリッドに位置し、北側を10号住に切られる。西側においてわずかに壁を検出したが明瞭なものではなく、平面形は不明である。床面は炉の付近ではほぼ平坦でわずかに硬質であったが周辺部は軟弱で不明確であった。柱穴と思われるピットは６本確認された。深さは11cm～22cmを測りP_1～P_5が主柱穴と考えられる。炉は北側が10号住によって切られていたが、南側にはやや小ぶりの河原石を９個列べてあり、中央には土器を埋設したと推定される小ピットが検出された。



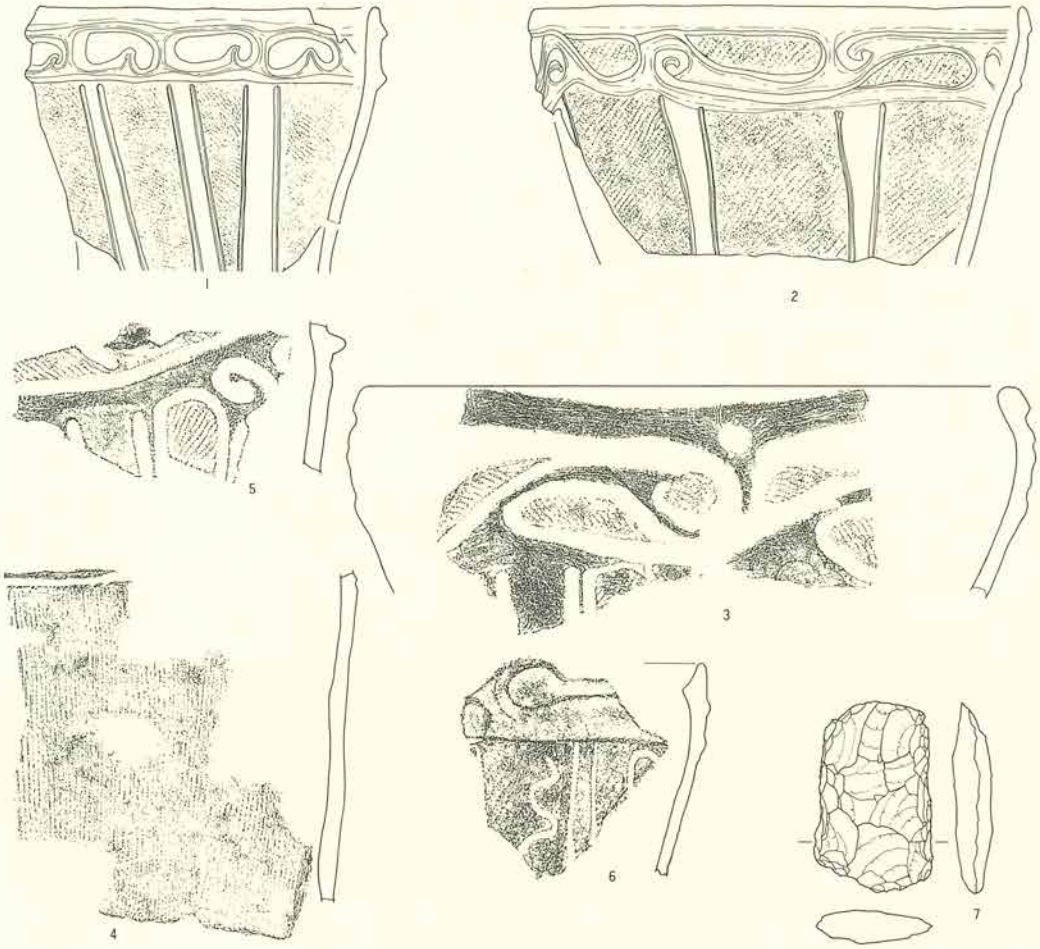
第35図　11号住居址（$\frac{1}{60}$）

遺物の出土量は全体的に少なかったが、炉の西側には床面倒置土器が、東側には皿状のピットに胴下部を欠損した深鉢が置かれていた。

11号住居址出土遺物

１は皿状のピットから検出した深鉢形土器で胴下半部を欠損する。口縁部はやや内湾ぎみに直立し、横位の蕨手状の隆帯を連結して施す。胴部には沈線間を磨り消した２本１組の懸垂文が９単位垂下される。縄文は縦位のＬＲである。

２は床面に倒置されていた深鉢形土器で、胴中部以下を欠損する。口縁部は隆帯による渦巻文と楕円区画文が交互に配される。胴部には沈線間を磨り消した２本１組の懸垂文が８単位垂下される。縄文は縦位のＲＬである。



第36図　11号住居址出土遺物（$\frac{1}{6}$、7は$\frac{1}{3}$）

3はゆるいキャリパー状を呈する深鉢の破片である。口唇部は肥厚しやや内湾する。口縁部は沈線を主に隆帯を加えて円文や楕円区画文によって構成される。胴部はアーチ状懸垂文が施される。縄文は区画内に複節ＲＬＲを口縁部は横位に胴部は縦位に施す。

4は胴部が外反して立ち上がる深鉢形土器の胴部片である。胴上部には１条の沈線が巡り、区画以下には縦位の条線文が施される。

5は3と同一個体と考えられる深鉢形土器の破片である。口縁と胴部は横に巡る沈線によって区画され、胴部には沈線によるアーチ状懸垂文や、蕨手文が施される。縄文は複節ＲＬＲを口縁部は横位に胴部は縦位に施文する。

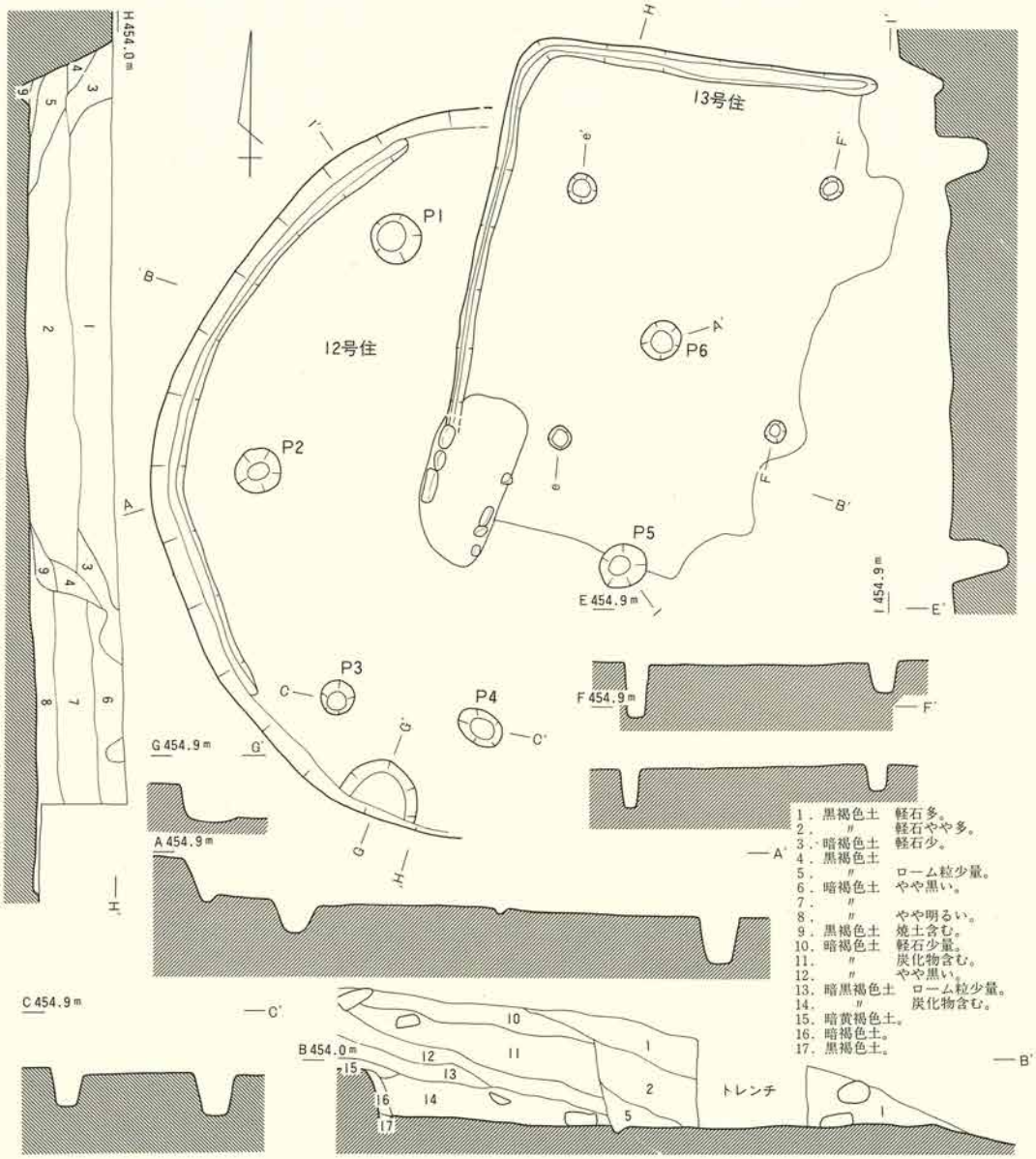
6は口縁上部が内湾する深鉢形土器である。口縁は上端部に山形の突起をもち、微隆起状の隆帯によって構成される。胴部には沈線によるアーチ状懸垂文や直線および波状の懸垂文が施される。胴部には縦位の複節ＲＬＲが施される。7は打製石斧の破片である。

以上11号住の遺物を観察してきたが、全体としては10号住居の遺物とほぼ同じ時期であろう。

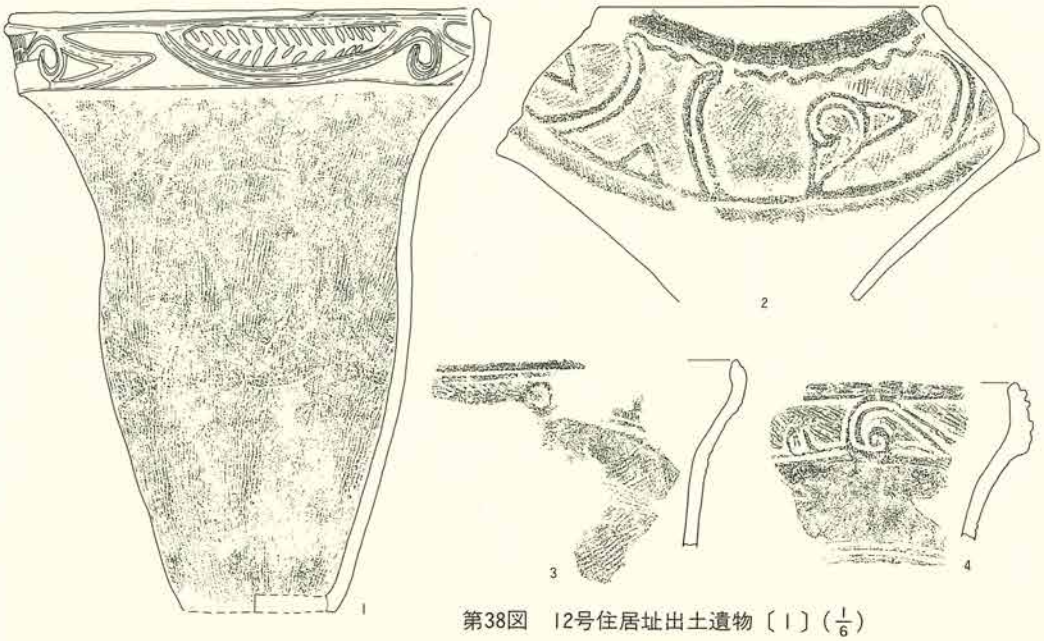
しかし、床直土器にみられるように、第１文様帯がしっかりしていることや、懸垂文は幅広になるがアーチ状を呈しないことなど、古い様相をもち、加曽利Ｅ３式の新しい段階とすることができよう。

12号住居址

Ｇ－８・９グリッドに位置し、北東側を13号住に切られている。平面形は壁が残存している西半分と柱穴の配置から、ほぼ円形を呈すると考えられる。西壁は床面から高さ38cmを測りやや外傾して立ち上がり周溝をもつ。床面は平坦で良く踏み固められていたが、南東側は軟弱で不明瞭



第37図　12・13号住居址（$\frac{1}{60}$）



第38図　12号住居址出土遺物〔1〕($\frac{1}{6}$)

であった。柱穴はP_1～P_6の6本で炉を囲むように配置されており深さは22cm～48cmを測る。炉は住居のほぼ中央に検出されたが、上部の北半分は13住に切られていた。形態はやや長い小ぶりの河原石を、南側を除いて方形に配置したものと推定される。住居南側には壁に接して皿状のピットが検出された。遺物は比較的少かなったが、炉の南側にて大型土器の破片が一部床直上に検出された。

12号住居址出土遺物

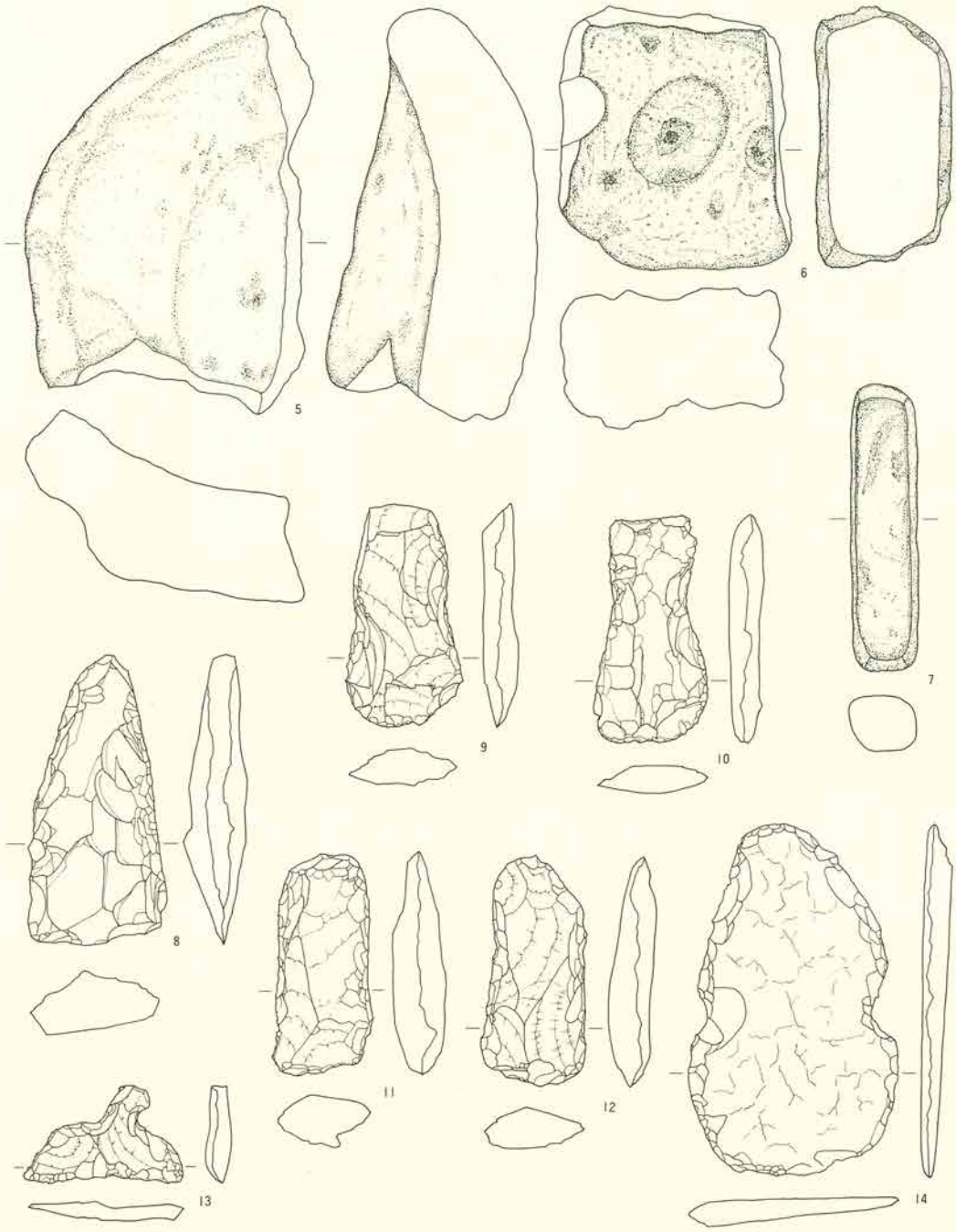
1はキャリパー状を呈する大型の深鉢形土器で底部と胴部を部分的に欠損する。口縁部文様帯には隆帯による渦巻文が右側に剣先状の隆帯を伴って5単位付く、しかし製作上の最終単位は幅が狭くなったため1部省略してむりやり5単位にしている。三日月形の区画には綾杉状の沈線が充填される。頸部以下の地文は縦位の撚糸Rである。

2は浅鉢形土器の大破片で重みがある。器形はそろばん玉状を呈し下半部は無文である。

口縁部は隆帯により長楕円状に区画され、中には1と同様のモチーフである剣先状隆帯の付く渦巻文が施される。口縁部と胴部を区画する隆帯上には、櫛状工具による沈線が斜に充填される。口縁部の地文は縦位の縄文RLで隆帯貼り付け以前に施されている。

3・4はキャリパー状を呈する深鉢形土器の破片である。いずれも口縁部は隆帯による渦巻文によって区画され、前者は綾杉状沈線が、後者には縄文が施される。両者とも胴上部には沈線が巡り、後者は頸部に無文帯を作り出している。前者の地文は縦位の縄文RLである。

5は石皿の破片である。6は凹石の破片で両平坦面に集合打痕を有する。7は四角柱状の石製品で各面は磨滅している。8～12は打製石斧であり、8～10は撥形、11・12は短冊形を呈する。13は横長の石匙で刃部には両面に剝離調整が施されている。



第39図　12・13号住居址出土遺物〔2〕($\frac{1}{3}$)

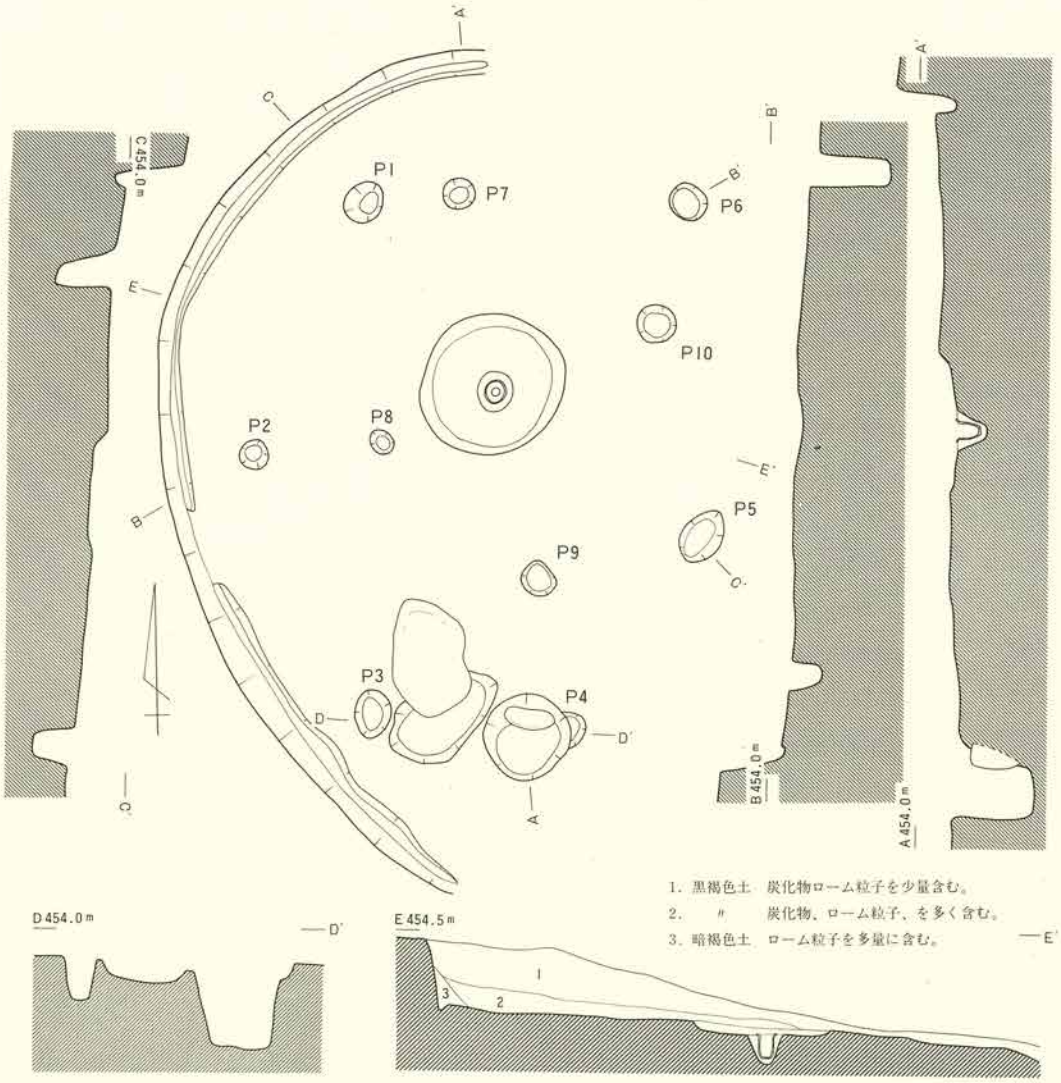
以上12号住の遺物について概観してきたが、土器は第1文様帯の区画がはっきりしていることや胴部が頸部無文帯を意識した構成していることから、加曽利E2式段階に比定されよう。

13号住居址

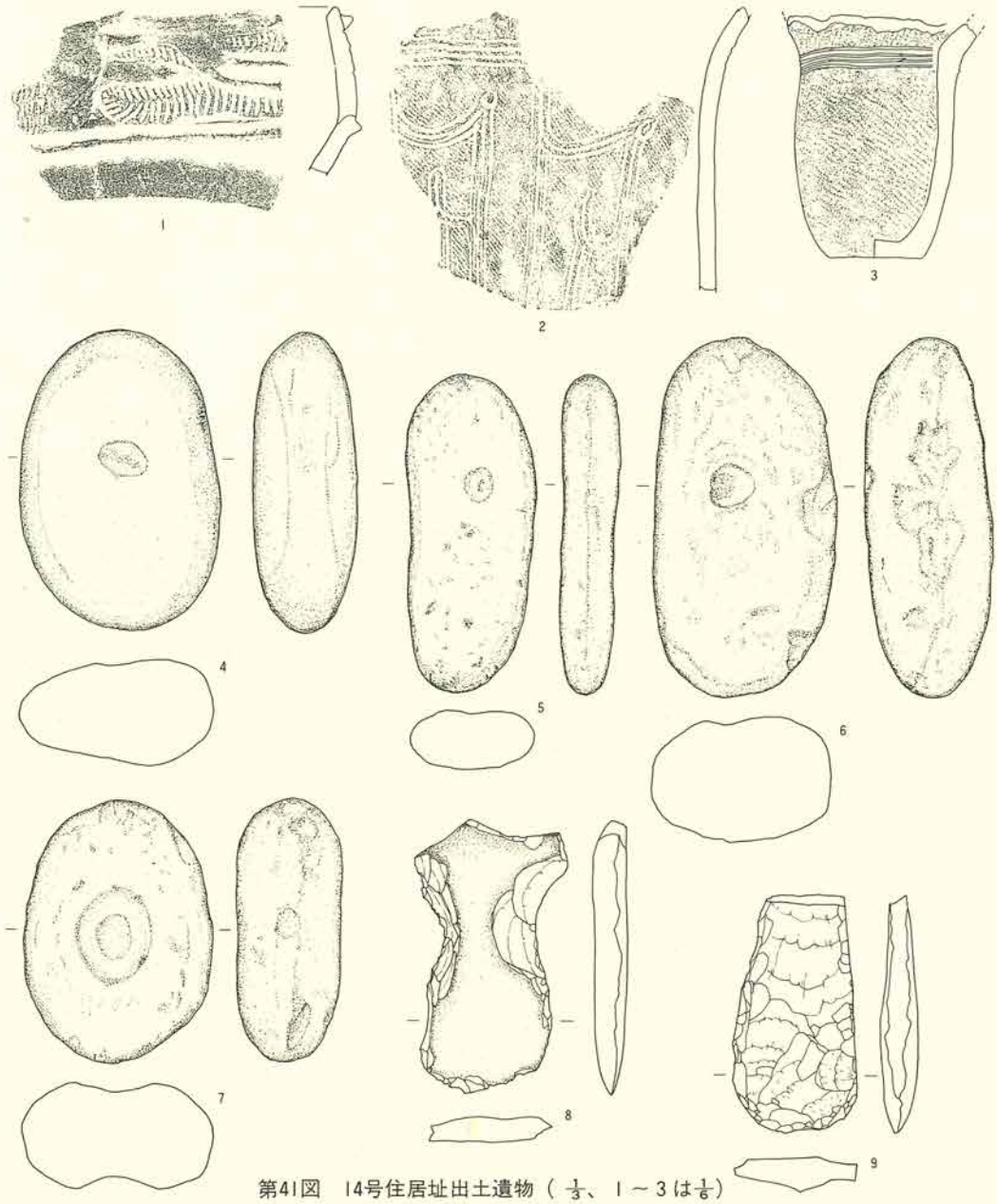
F・G－9グリッドに位置し、12号住を切っている。平面形は北および西の周溝から、隅丸方形を呈していたと推定される。西壁はセクションから72cmはあったと推定され、やや外傾して立ち上がる。床面はほぼ平坦で硬質である。径の小さい柱穴が4本検出され深さは22cm～46cmを測る。炉は検出されなかった。遺物は少なかったが南東側柱穴付近に床直上で14の石斧を確認した。扁平で中央両側に抉れが入る弥生時代の石斧であり、本住居の年代も同時期の可能性がある。

14号住居址

E－9・10、F－9・10グリッドに位置する。平面形は西壁から推定して、楕円形を呈していたと推定される。壁は西側で52cmを測り垂直ぎみに立ち上がるが上側でやや外傾する。西壁側に



第40図　14号住居址（$\frac{1}{60}$）



第41図　14号住居址出土遺物（$\frac{1}{3}$、1～3は$\frac{1}{6}$）

は1ケ所とぎれるが周溝が確認された。床面はほぼ平坦で硬質であるが西側にやや傾斜しており西側は削平されていた。柱穴と考えられるピットは10本検出されたが主柱穴はP_1～P_6で深さは14cm～64cmを測る。炉は住居の中央やや北側に検出された。炉石は確認されず皿状の浅いピットのほぼ中央に土器が埋設されていた。住居南側の柱穴間には皿状の土坑と深さ68cmを測る土坑が検出された。遺物の出土量は全体的に少なく、床面より浮いた状態で検出された。

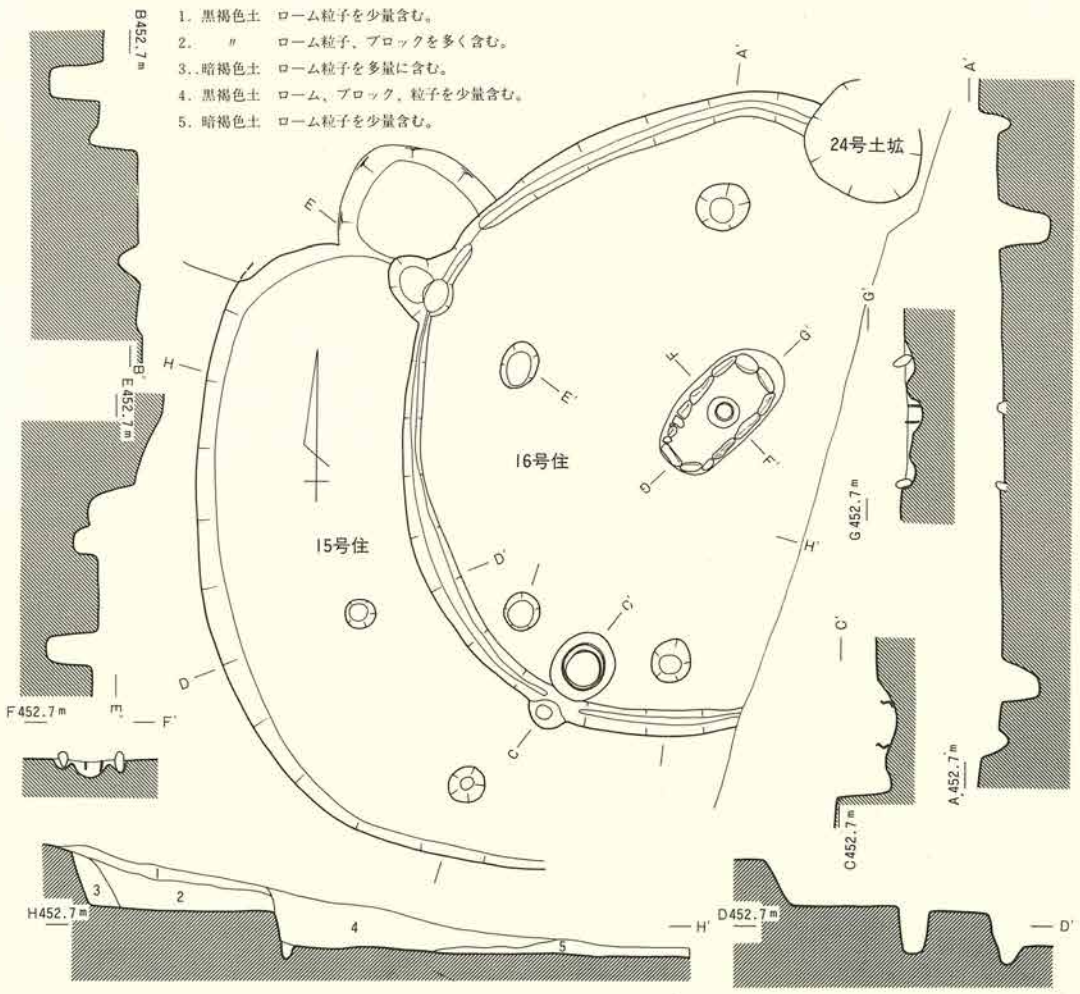
14号住居址出土遺物

1はキャリパー状を呈する深鉢形土器の破片である。口縁部は断面三角形の隆帯と沈線によっ

て区画がなされ、中には沈線が充填される。頸部は無文である。２は頸部が外反する深鉢形土器の破片である。胴上部には半截竹管による平行沈線が巡り、無文の頸部と区画される。胴部には３本１組の沈線により懸垂文やＪ字状文が施される。地文は縦位の無節Ｌである。３は炉に使用されていた深鉢形土器で口縁部を欠損する。頸部には半截竹管を使用した平行沈線が巡る。地文は縦位の縄文ＲＬである。４・５は磨石で、片面にわずかに敲打痕を有する。６・７は凹石で６には片面に、７には両面に深く集合打痕が認められる。８・９は打製石斧である。８は両側に抉れが入り片面に自然面を残す。９は撥形を呈する。本住居出土土器は３より１・２がやや後出的であるがいずれも加曽利Ｅ１段階に比定されるであろう。

15号・16号住居址

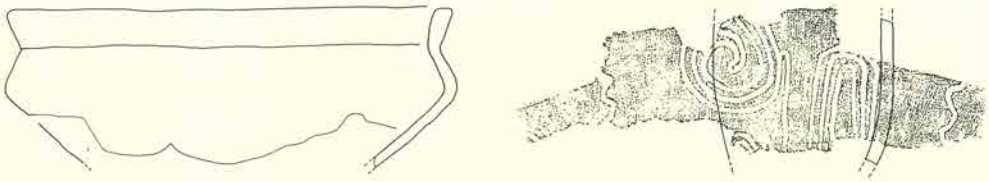
15号住は、Ｄ－11グリッドに位置し中央から東側を16号住に切られる。平面形は不正円形を呈すると考えられるが詳細は不明である。床面はほぼ平坦で、壁は西側で42cmを測り外傾して立ち



第42図　15・16号住居址（$\frac{1}{60}$）

上がる。柱穴は５本検出され深さは16cm～42cmを測る。遺物は検出されなかった。

16号住は、D―11・12グリッドに位置し、15号住を切って構築している。26号土坑との関係は不明である。平面形はほぼ円形を呈するが東側が調査区域外にかかるため詳細は不明である。周溝はとぎれる箇所もあるが調査区内ではほぼ確認された。壁高は西側で26cmを測りやや外傾して立ち上がる。床面は平坦で良く踏み固められていた。柱穴は４本検出され深さは30cm～40cmを測るが、調査区域外に２本あり、６本主柱であったと推定される。炉は住居のほぼ中央に検出され細長い河原石を長方形に列べて構築されていた。中央部には深鉢の胴部が埋設されているのを確認した。南側の柱穴間の壁ぎわには浅いピットが有り底の欠損した深鉢が埋設されていた。遺物は覆土中から少量検出されたのみで他は上記の土器のみである。



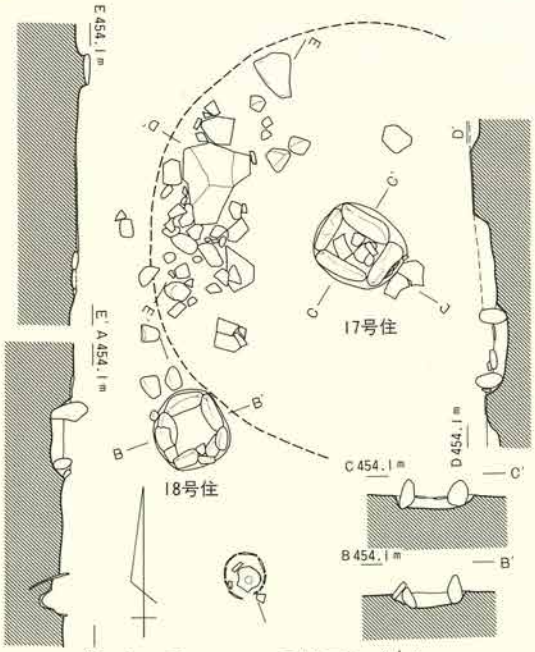
第43図　15・16号住居址出土遺物（$\frac{1}{3}$）

16号住居址出土遺物

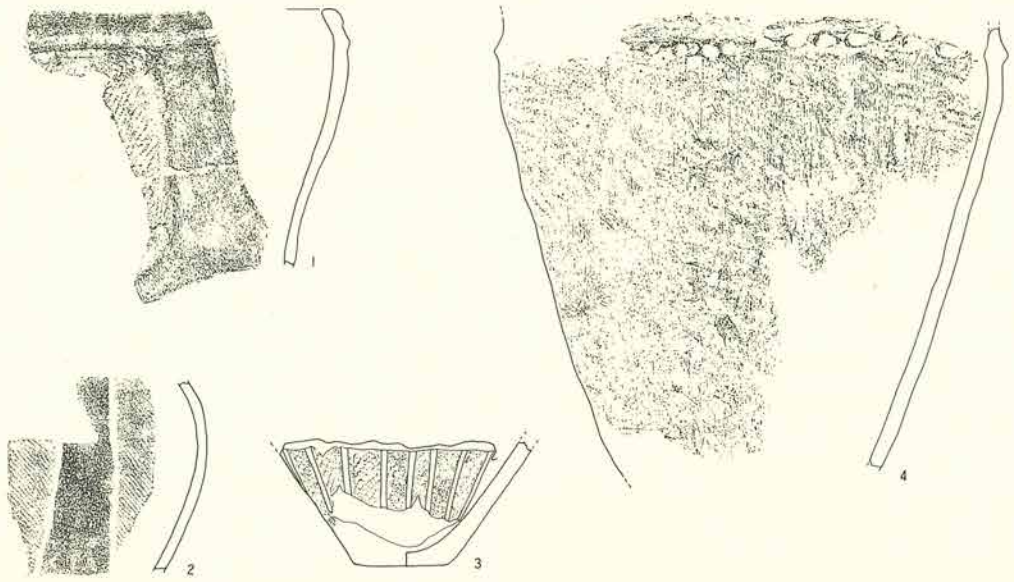
１は南側のピットより検出された浅鉢形土器で胴下半分を欠損する。肩部が張り口縁部がくの字に屈曲する器形で、口唇部は平坦で厚い。内外面に赤彩痕あり。２は炉体土器で深鉢の胴部のみの破片である。棒状工具により渦巻文や縦の波状文・アーチ状沈線文が施される。地文は縦位の撚糸Ｌである。以上の土器は加曽利Ｅ１式段階に比定されよう。

17号住居址

Ｇ―６グリッドに位置し、18号住を切り、８号住の上に存在した。壁が検出されなかったため平面形は確認できなかったが、本住居に伴うと考えられる西側の敷石範囲と18号住との炉の位置関係から直径３m40cm程の小型住居であったと推定される。床面が存在したと思われる高さには、炉に接した東側と、西側に敷石が検出され、大破片には板状のものが目立った。炉は大ぶりの河原石４石を利用した石囲い炉で中には石および土器片が検出された。柱穴は確認できなかった。遺物は床面よりやや浮いた状態で出土した。



第44図　17・18号住居址（$\frac{1}{60}$）



第45図　17・18号住居址出土遺物（$\frac{1}{6}$）

17号住居址出土遺物

1・2は炉の中から検出された土器である。1は口縁上部がやや内湾した深鉢形土器の破片で微隆起による縦位の区画内に縦の縄文ＲＬが施される。2は深鉢形土器の胴部片で、間を広く磨り消した2本1組の沈線によって区画され、縦位の縄文ＬＲが施される。以上の土器は加曽利Ｅ4式段階に比定されるだろう。

18号住居址

Ｇ－6グリッドに位置し、8号住の上に存在し、17号住に切られている。壁・床面・柱穴は検出できず、炉と南側の埋甕のみを確認した。炉は河原石を方形に組み合せた石囲い炉である。埋甕は大型の深鉢の胴部で中に他の個体の底部が埋設されていた。

18号住居址出土遺物

3は4の深鉢の中に検出された深鉢形土器の底部で沈線による懸垂文が施される。

4は深鉢形土器の胴部片である。胴上部には指頭による押圧を施した隆帯が巡り下側には条線文が施文される。以上の土器は口縁部が欠損しているため明確ではないが加曽利Ｅ4段階に比定されるであろう。

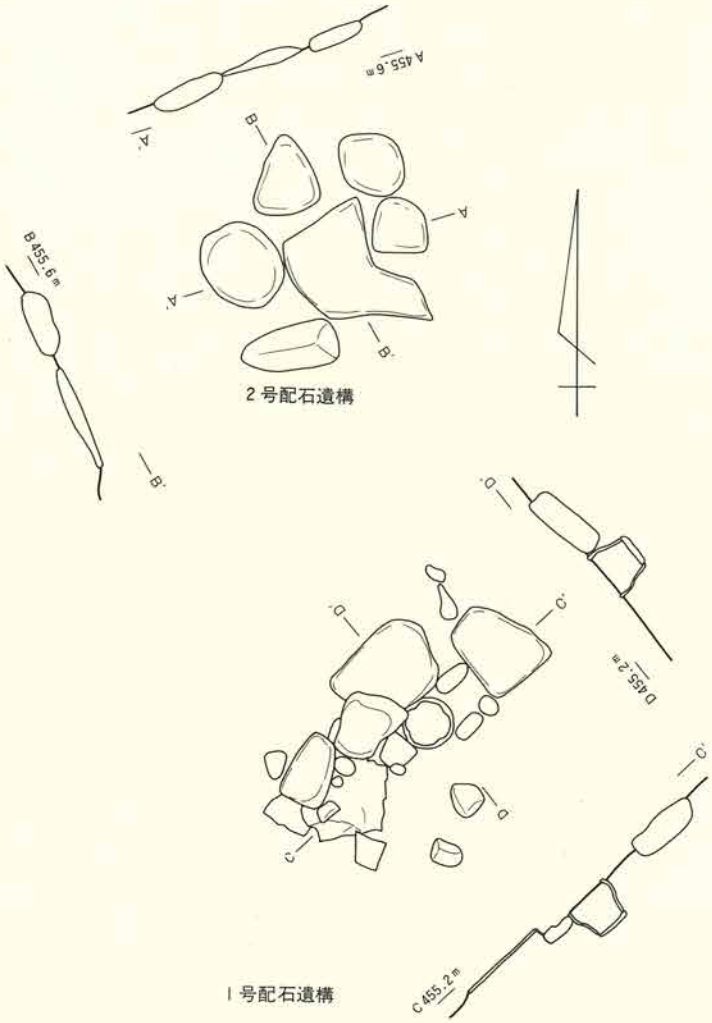
2. 配 石 遺 構

1号配石遺構

G－7グリッド南側に位置し2号配石遺構と近接する。胴下半部を欠損した埋甕を中心に平坦面を持つやや大ぶりの石で北および西側を囲んでいた。土器は胴の径とほぼ同大の扁平な河原石の上に置かれていた。堀り方については確認できなかった。

配石遺構出土遺物

1は埋甕の土器で口縁部が内湾し4単位の小山形突起を有する。口縁上部には1条の沈線が巡り下側には縦位の縄文ＬＲが施される。

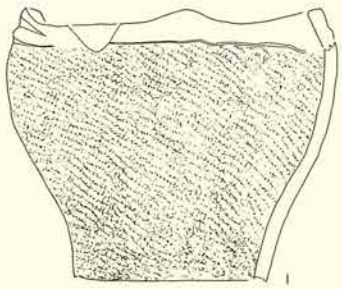


第46図　1・2号配石遺構（$\frac{1}{40}$）

2号配石遺構

G－7グリッドやや北側に位置する。大形で板状の石を中心に大ぶりの河原石で周りを囲む。掘り方等の検出されなかった。

1号配石遺構と近接する。



第47図　1号配石遺構出土遺物（$\frac{1}{6}$）

3. 土　　坑

1号土坑

D－4グリッド北東コーナーに位置する。平面形は不整円形を呈し、深さは50cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。出土遺物は礫1点のみである。

2号土坑

E－4グリッド西側に位置し3号土坑に近接する。東側は堀りすぎにより確認できなかったが平面形はほぼ円形を呈すると推定される。深さは26cmを測り壁は外反して立ち上がる。底部付近から石皿の破片が出土した。

3号土坑

E－4グリッド南西コーナーに位置する。平面形はほぼ円形を呈し、深さは38cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。遺物は石が覆土上層に多く確認された。

4号土坑

F－3・4グリッドにかけて位置する。平面形はほぼ円形を呈し、深さは28cmを測る。壁は外傾して立ち上がる。遺物は覆土上層から検出された。

5号土坑

F－4グリッド東側に位置する。平面形はほぼ円形を呈し、深さは40cmを測る。壁はやや外傾して立ち上がる。遺物は62点が覆土上層から下層まで認められたが、土器は小破片が多かった。

6号土坑

F－5グリッド南側に位置する。平面形はほぼ円形を呈し、深さは29cmを測る。壁はやや外傾して立ち上がる。遺物は28点が覆土上層から下層まで検出されたが、土器片は少量であった。

7号土坑

E－6グリッド西側に位置し上面は8号住によって切られる。平面形はほぼ円形を呈し断面形は袋状を呈する。壁の上半部は崩落により外傾して立ち上がる。出土遺物は検出されなかった。

8号土坑

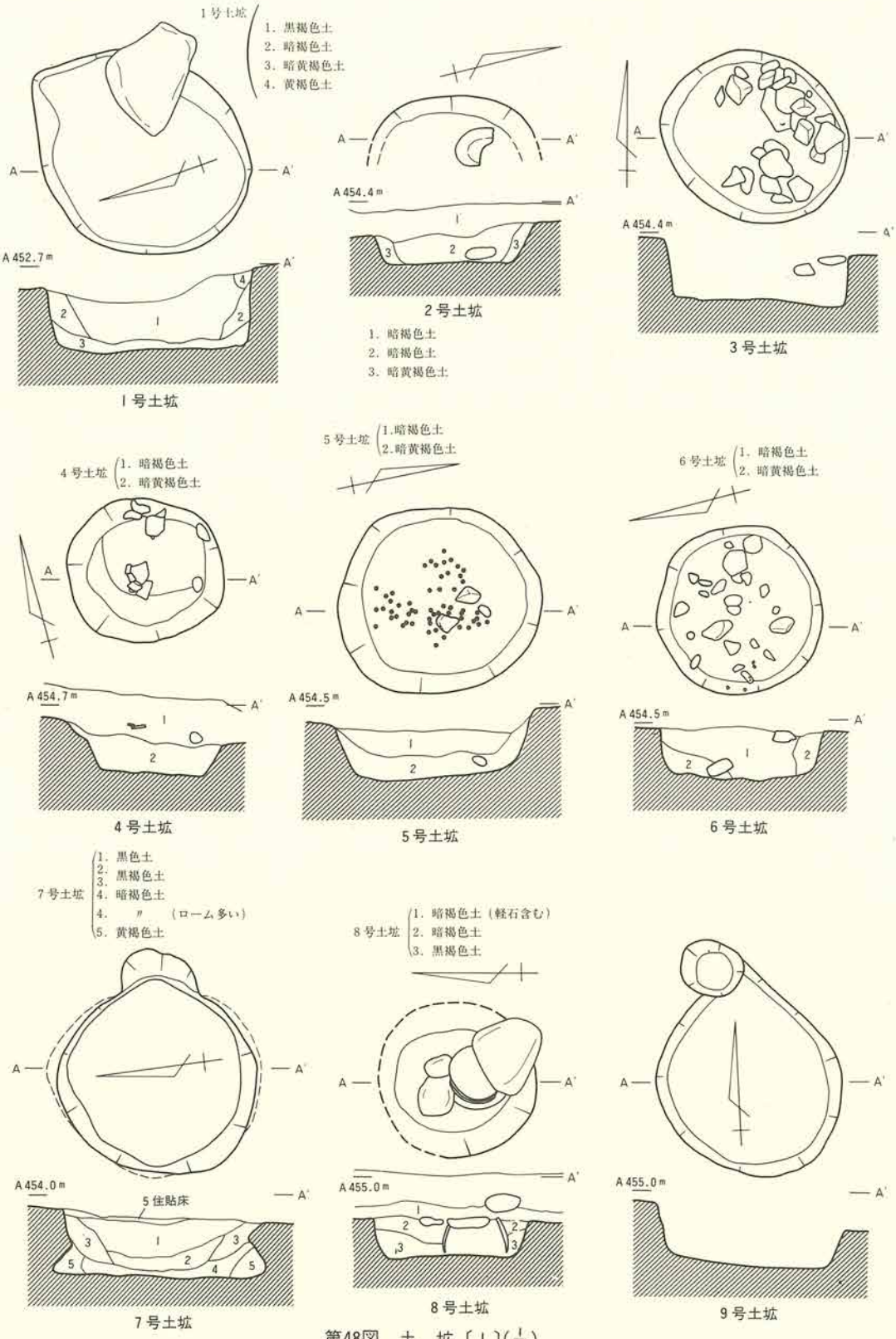
F・G－5グリッドにかけて位置し8号住を切っている。北側は8号住調査時に掘り過ぎてしまったが平面形はほぼ円形を呈すると考えられる。壁はやや外傾して立ち上がり深さは24cmを測る。遺物は、胴下半部を欠損した深鉢形土器が倒置されており、上およびそのまわりにやや大ぶりの河原石が乗せられていた。

9号土坑

G－5グリッドに位置し8号住と重複していたが新旧関係は不明である。平面形はほぼ円形を呈し深さは32cmを測る。壁はやや外傾して立ち上がる。遺物は検出されなかった。

10号土坑

G－4グリッド北側に位置する。平面形はほぼ円形を呈し深さは36cmを測る。壁はやや外傾し



第48図　土　坑〔1〕($\frac{1}{40}$)

て立ち上がる。覆土中に深鉢形土器の胴部がやや横転した状態で検出された。

11号土坑

F・G－6グリッドに位置し8号住を切っている。平面形は不正楕円形を呈し深さは32cmを測る。壁は北西側ではゆるやかに立ち上がるが、他はやや外傾し急激に立ち上がる。遺物は22点検出され、内1点は床面からやや浮いた状態で出土した小型の深鉢形土器であった。

12号土坑

G－5・6グリッドにかけて位置し8号住を切っている。平面形はほぼ円形を呈し、深さは44cmを測る。壁はやや外傾して立ち上がる。遺物は底面付近からまとまって検出された。

13号土坑

G－6グリッドに位置し8号住を切っている。平面形はほぼ円形を呈し深さは30cmを測る。遺物は底面より浮いた状態で出土した。小型の深鉢形土器は潰れた状態で検出された。

14号土坑

G－6グリッド東寄りに位置し8号住を切っている。平面形は不整楕円形を呈し深さは36cmを測る。長軸の断面形は中央部の下った舟底形を呈する。底面から浮いた状態で凹石と深鉢形土器の大型破片が検出された。

15号土坑

G－6グリッド南側に位置する。平面形はほぼ円形を呈し深さは46cmを測る。壁はやや外傾して立ち上がる。覆土上層から鉢形土器の口縁部片が底面から礫が検出された。

16号土坑

G・H－5グリッドにかけて位置する。平面形は不整円形を呈し深さは76cmを測る。壁は北側では垂直状に南側ではやや袋状に立ち上がる。遺物は中位から底までの間で検出された。

17号土坑

H－6グリッド東側に位置する。平面形は不整円形を呈し深さは51cmを測る。壁はやや外傾して立ち上がる。遺物は検出されなかった。

18号土坑

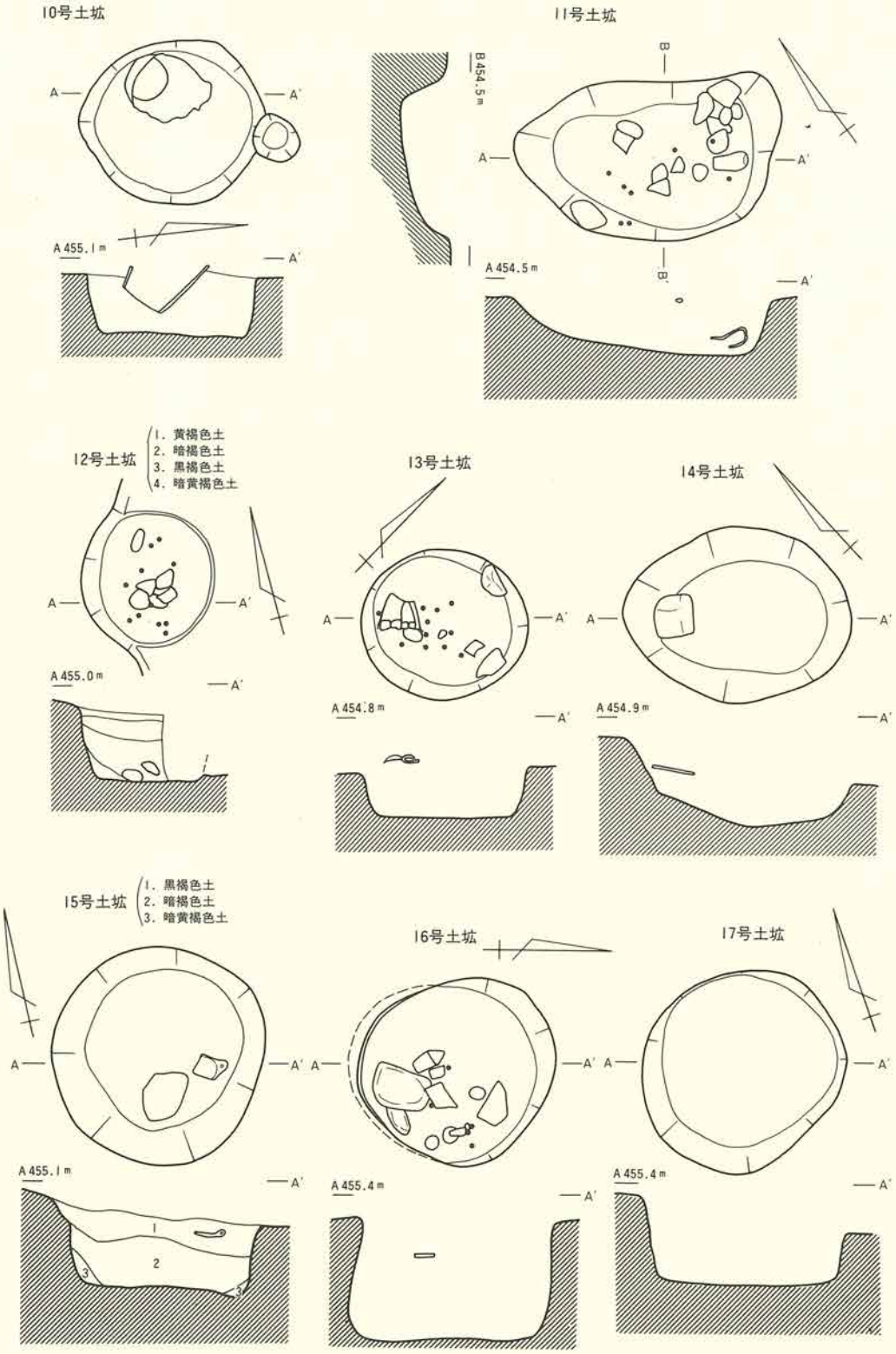
H－6グリッドのほぼ中央に位置する。平面形はほぼ円形を呈し深さは17cmで浅い。壁はやや外傾して立ち上がる。遺物は検出されなかった。

19・20号土坑

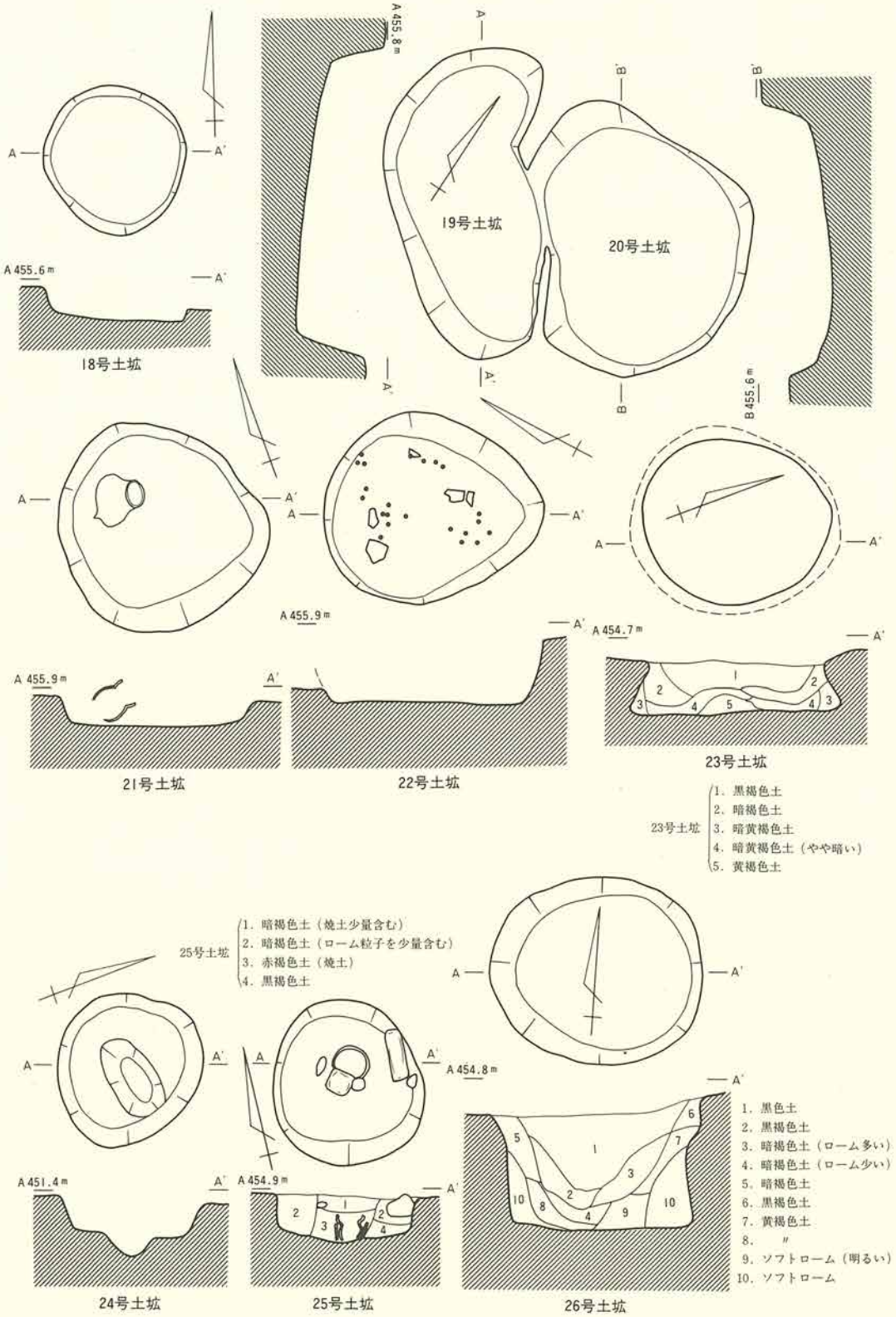
H－6グリッドやや北側に接して位置する。平面形は19号が不整長楕円、20号が不整楕円形を呈する。壁はいずれも外傾して立ち上がり深さは19号が44cm・20号が32cmを測る。出土遺物は検出されなかった。

21号土坑

I－7グリッド北東側に位置する。平面形は不整円形を呈し、深さは18cmを測る。壁は外傾して立ち上がる。北西寄りに胴下半を欠損した深鉢形土器が口縁部をやや下側に横転した状態で検



第49図　土　坑〔2〕($\frac{1}{40}$)



第50図　土　坑〔3〕（$\frac{1}{40}$）

出された。

22号土坑

H－7グリッド北西側に位置する。平面形は不整楕円形を呈し深さは40cmを測る。壁は外傾して立ち上がる。遺物は検出されなかった。

23号土坑

G－10グリッド東側に位置する。平面形は不整円形を呈し、断面形は袋状を呈する。壁高は34cmを測る。遺物は底面付近に礫が1石検出されたのみである。

24号土坑

C・D－12グリッドにかけて位置する。16号住と重複するが新旧関係は不明である。平面形は不整円形を程し深さは21cmを測る。壁は外傾して立ち上がる。床面には楕円形を呈する深さ12cmのピットを検出した。覆土中から、三角柱状の土製品を検出した。

25号土坑

G－5・6グリッドにかけて位置し、8号住、12号土坑を切って構築している。平面形は不整円形を呈し深さは28cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。しかし堀り方については、黒色土中に掘り込まれていたためにやや明確さを欠く。中央やや北側には、深鉢の胴部の中にやや径の小さい胴下半部を欠損した深鉢がはめ込まれ埋設されていた。土器の周囲の土は焼土化していた。

26号土坑

G－7グリッド南側に位置する。平面形は楕円形を呈し、深さは80cmを測る。壁はほぼ垂直ぎみに立ち上がるが上方でやや外傾する。遺物は検出されなかった。

土坑出土遺物

1は2号土坑出土の石皿で約半分を欠損する。表面にも部分的に擂鉢状の凹が認められるが裏面には全面に施され多孔石として使用されている。

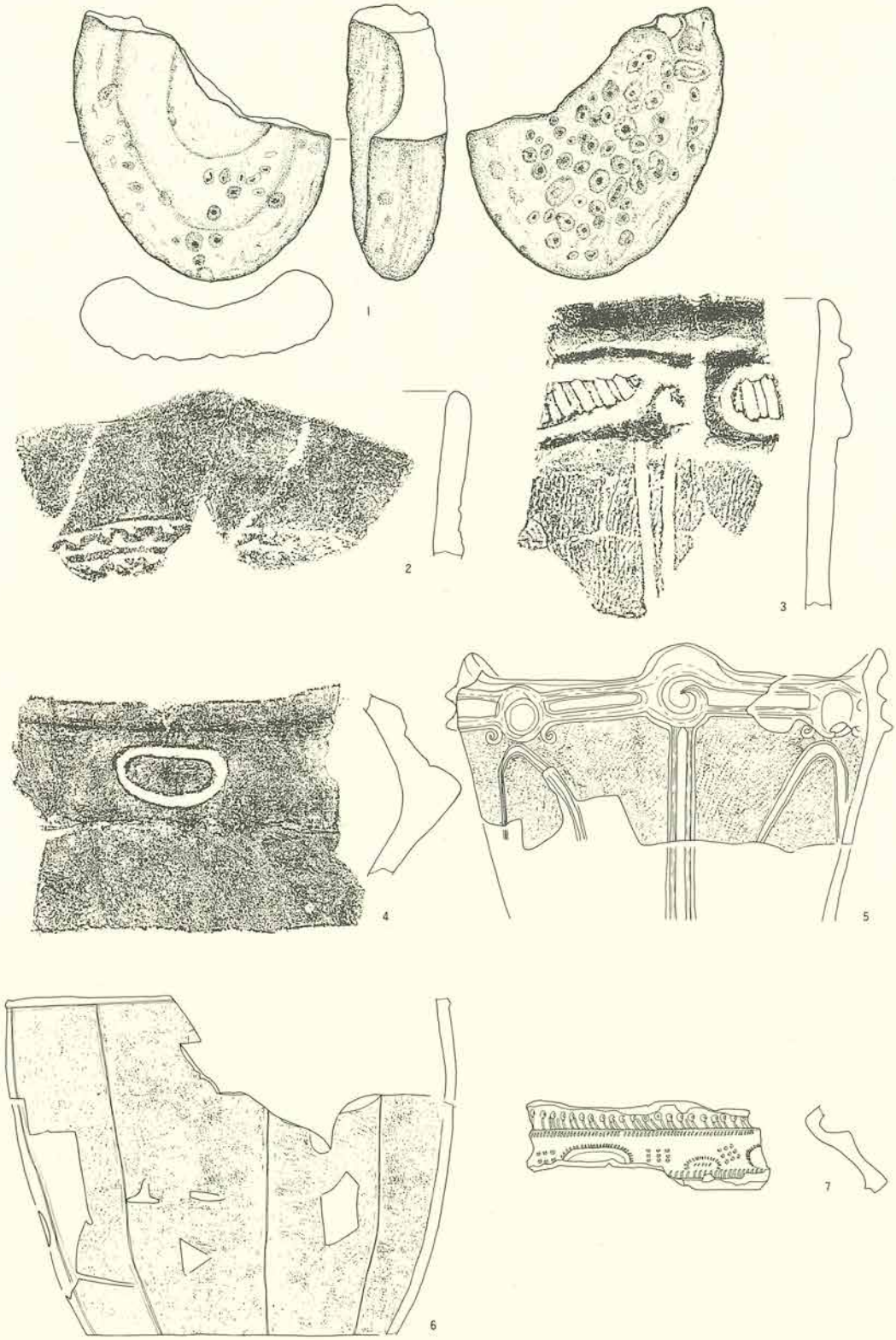
2は4号土坑出土のやや山形を呈する深鉢の口縁部破片である。下側には沈線が4条めぐり交互刺突文が施される。

3は5号土坑出土の深鉢の破片である。口縁部は隆帯と沈線により横位に区画され中には斜方向の沈線が充塡される。胴部には沈線による懸垂文が施される。地文は撚糸L。

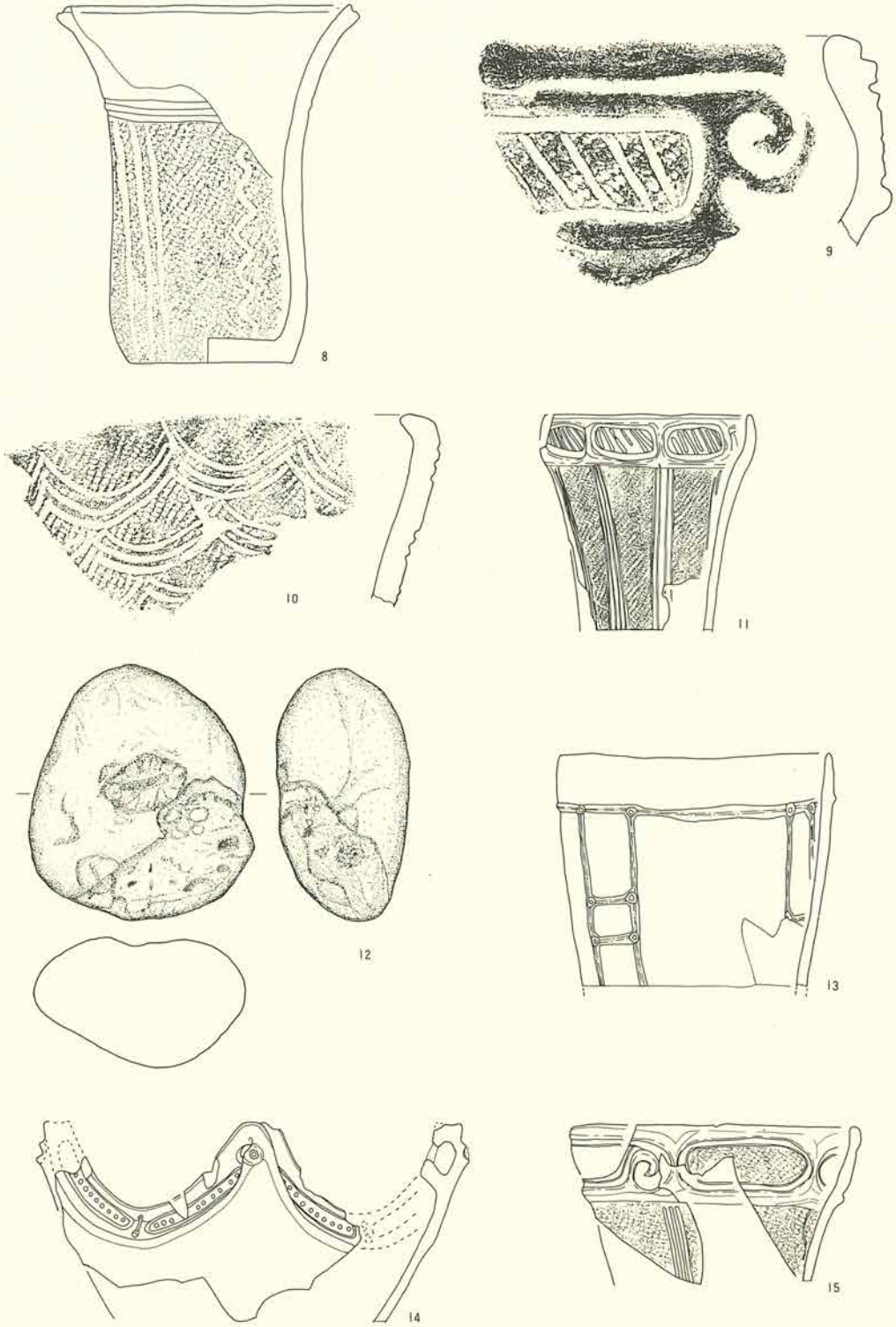
4は6号土坑出土の鉢の破片である。胴上部でくの字に屈曲し上方で更に内湾する。上部の文様は沈線による楕円文である。加曽利E2～3式段階に比定されるであろう。

5は8号土坑出土の深鉢形土器で、胴下半部を欠損する。口縁上端には4単位の山形突起をもつ。口縁部文様は隆帯を基本とし突起下には渦巻文がその間には円文が施される。胴部には上部に蕨手状の沈線が巡り渦巻文下には隆帯による懸垂文が垂下される。懸垂文間には逆U字状の沈線が施される。地文は縦位を基本とした縄文RLである。加曽利E2式段階に比定されよう。

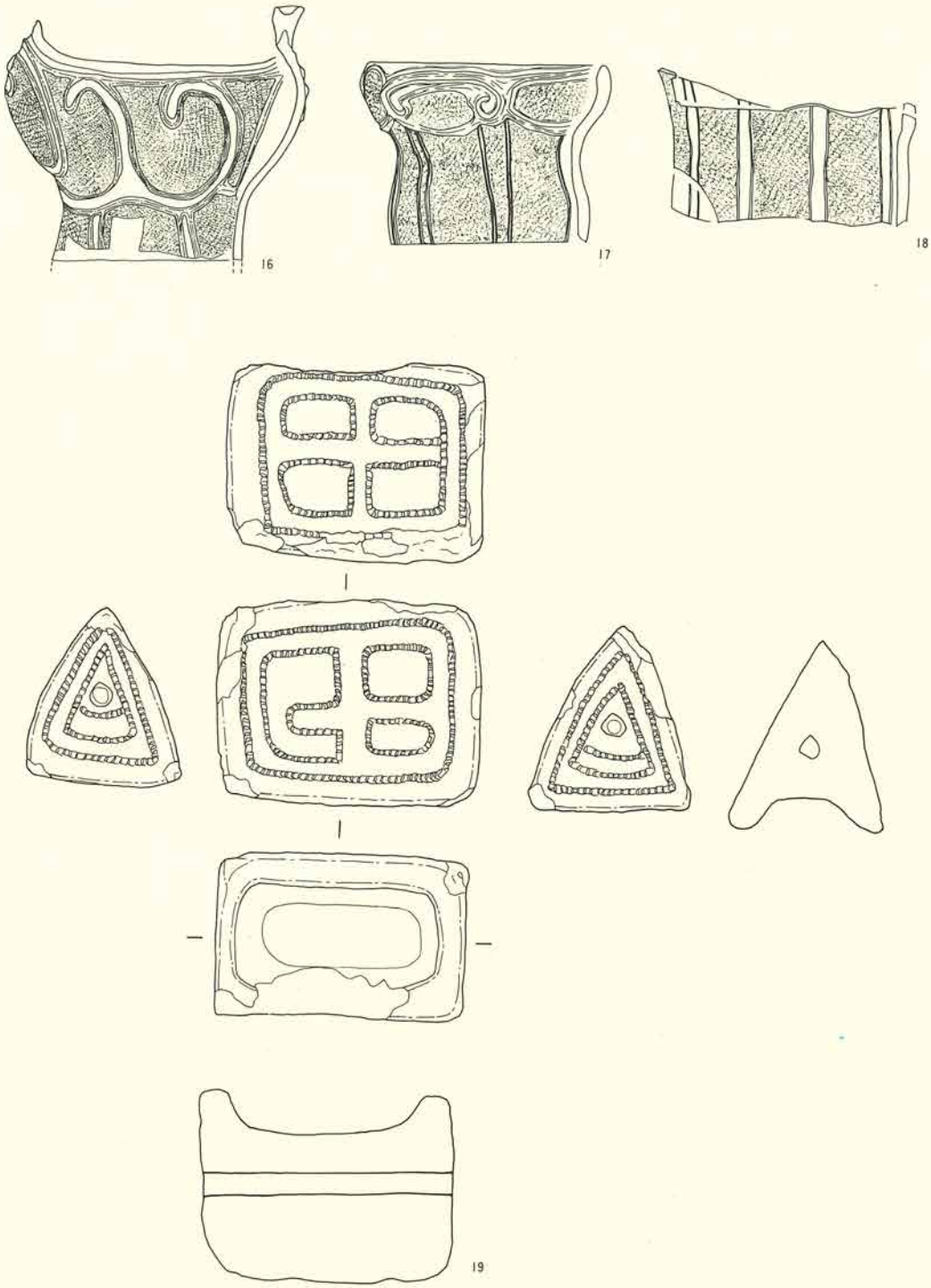
6は10号土坑から検出された深鉢形土器の胴部である。上部に断面3角形の微隆起が巡り、その下にも同様の微隆起が垂下される。加曽利E4式段階に比定されよう。



第51図　土坑出土遺物〔1〕（$\frac{1}{6}$、2～4は$\frac{1}{3}$）



第52図　土坑出土遺物〔2〕（$\frac{1}{6}$、9・10・12は$\frac{1}{3}$）



第53図　土坑出土遺物（$\frac{1}{4}$、19は$\frac{1}{2}$）

7も10号土坑出土の鉢形土器の破片で胴上部がそろばん玉状に強く張り口縁部がくの字に外反する器形を呈する。円形刺突文と連続刺突による楕円区画文が施される。加曽利Ｅ２段階相当。

8は11号土坑から検出された小型の深鉢形土器で口縁の大部分を欠損する。外反する口縁部は無文で口唇部には１条の沈線が巡る。胴上部には２本の沈線が巡りその下側には、直線状と波状の懸垂文が交互に垂下される。加曽利Ｅ２式段階に比定される土器であろう。

9は12号土坑出土の深鉢形土器の口縁部片である。隆帯と沈線により渦巻文と楕円区画文が施される。区画内には縦位の縄文ＲＬが充塡されその上に斜向する沈線が施される。加Ｅ３段階。

10は13号土坑から検出された深鉢形土器の口縁部片で口唇部が強く内湾する。地文である縦位の縄文ＲＬの上に３条１組の沈線による連孤文が施される。

11も13号土坑出土の小型でゆるいキャリパー状を呈する深鉢の破片である。口縁部は隆帯と沈線による楕円区画文が施され、中には斜向する沈線が充塡される。胴部には口縁部から４条１組の懸垂文が垂下される。地文は縦位の縄文ＲＬである。加曽利Ｅ３式段階に相当しよう。

12は14号土坑出土の凹石である。片面に楕円状の集合打痕を有する。

13も14号土坑出土の深鉢形土器の破片である。断面三角形の微隆起により口縁と胴部は区画されその下に２本１組の微隆起の懸垂文が下がる。懸垂間には２本の連結部があり、各微隆起の連結部には指頭状の圧痕が認められる。加曽利Ｅ４式段階に相当するであろう。

14は15号土坑から出土した鉢形土器で口縁は大きな波状を呈する。口縁部は強く内湾し沈線による長楕円の区画があり中には円形の刺突文が施される。波頂部は立体化する。称名寺式相当。

15は16号土坑から出土した深鉢形土器の破片である。口縁部は隆帯と沈線による渦巻文や楕円区画文によって構成される。口縁部下は沈線による波状および直線状の懸垂文が下がる。地文は縦位の縄文ＲＬである。加曽利Ｅ２式段階に比定されるであろう。

16は21号土坑出土の深鉢形土器で胴下半分を欠損する。口縁部が大きく内湾し胴中位が強く括れる器形で口縁部は２対の波状を呈し片側に突起を施す。文様は上半部が２本１組による隆線により蕨手状の区画文を施し、その下側には同様の隆線による懸垂文が６単位垂下する。隆線間およびその両側はなぞりが施されている。区画内には縄文ＲＬが施されるが、方向は不規則である。加曽利Ｅ４式段階に比定されよう。

17は25号土坑より出土したキャリパー状を呈する深鉢で、胴下半を欠損する。口縁部は隆帯と沈線による渦巻文と楕円区画文によって構成される。その下側には２条１組の沈線による懸垂文が９単位垂下される。地文は縦位の縄文ＲＬである。

18も25号土坑より出土した深鉢形土器の胴部で17が中にはめ込まれていた。中を磨り消した２条１組の懸垂文が下がる。地文は縦位の縄文ＲＬである。いずれも加曽利Ｅ３式段階相当。

19は24号土坑出土の三角柱形土製品で長軸方向中央部に貫通孔を有する。４面に細い角頭状の竹管状工具を使用し、各面に合わせて方形あるいは三角形状に押引文が施されている。他の１面は方形の凹を有する。

4. 遺構外出土土器

第1群土器（1～7）

鵜ケ島台式併行土器を一括した。いずれも若干の繊維を含む。1・2・4・5・7は口縁部片で内削状、平縁状の口唇部をもち、1・2は内側に刻目を施す。文様は竹管による円形刺突文や連続刺突文を基本とし、微隆起や沈線が施される。1・7を除いて裏面には条痕がみられる。1は表裏ともに文様が施される。

第2群土器（8～20）

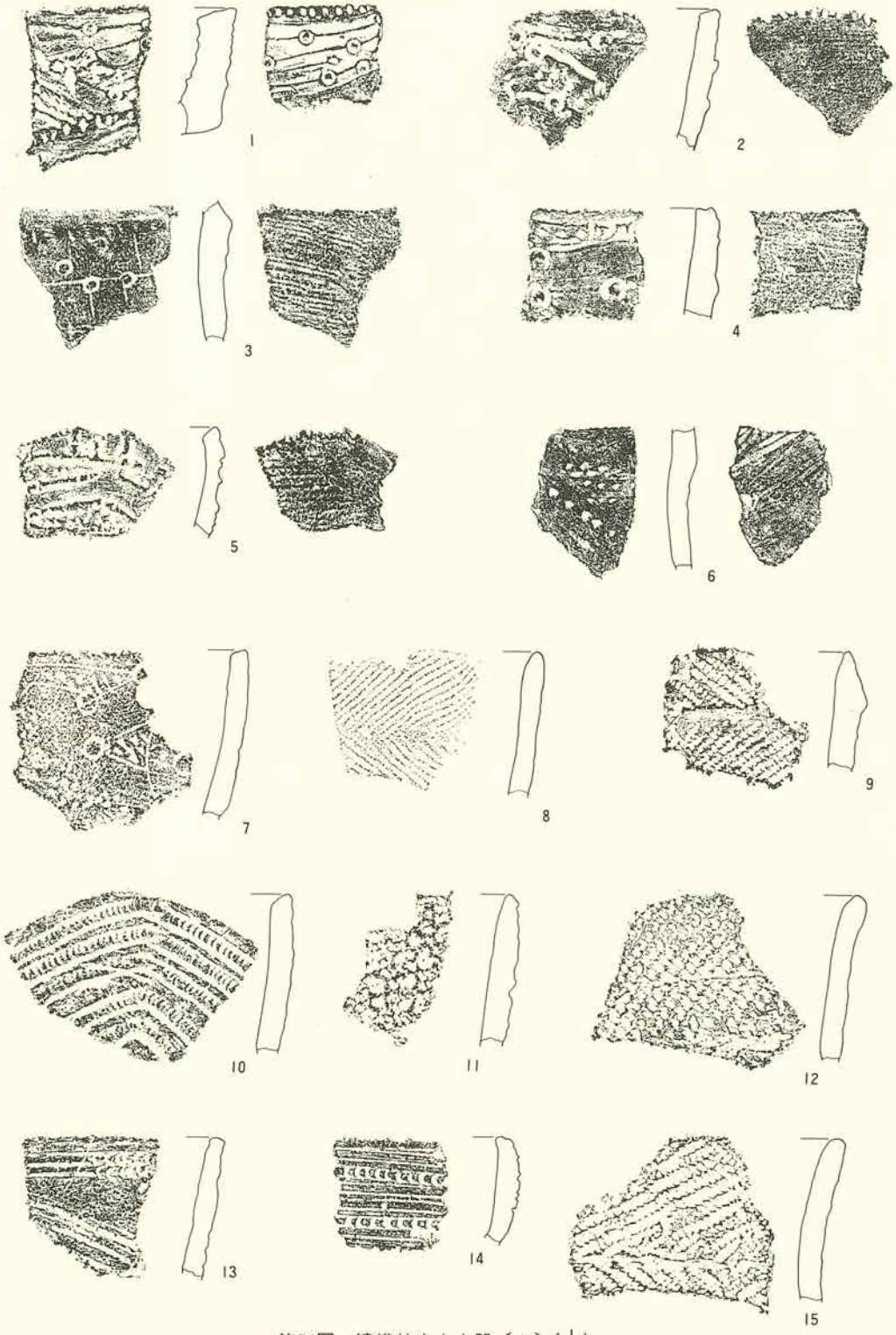
黒浜式土器を一括した。いずれも繊維を多く含む。8～18は口縁部片で9は外面に段を有し10・18は波状を呈する。縄文を施す個体は、羽状縄文を基本として単節（0段多条も含む）の個体が多いが無節（8）も見られた。0段多条の中には反撚のものも存在する。17・20はループ文を有する。竹管工具を利用するものは、平行沈線や爪型文が施されるが11は円形竹管による刺突文が施される。13・16は列点状の刺突文が施される。19は尖底の深鉢形土器で上部を欠損する。0段多条の縄文ＲＬ・ＬＲを羽状に施し、部分的に菱目を構成している。

第3群土器（21～26）

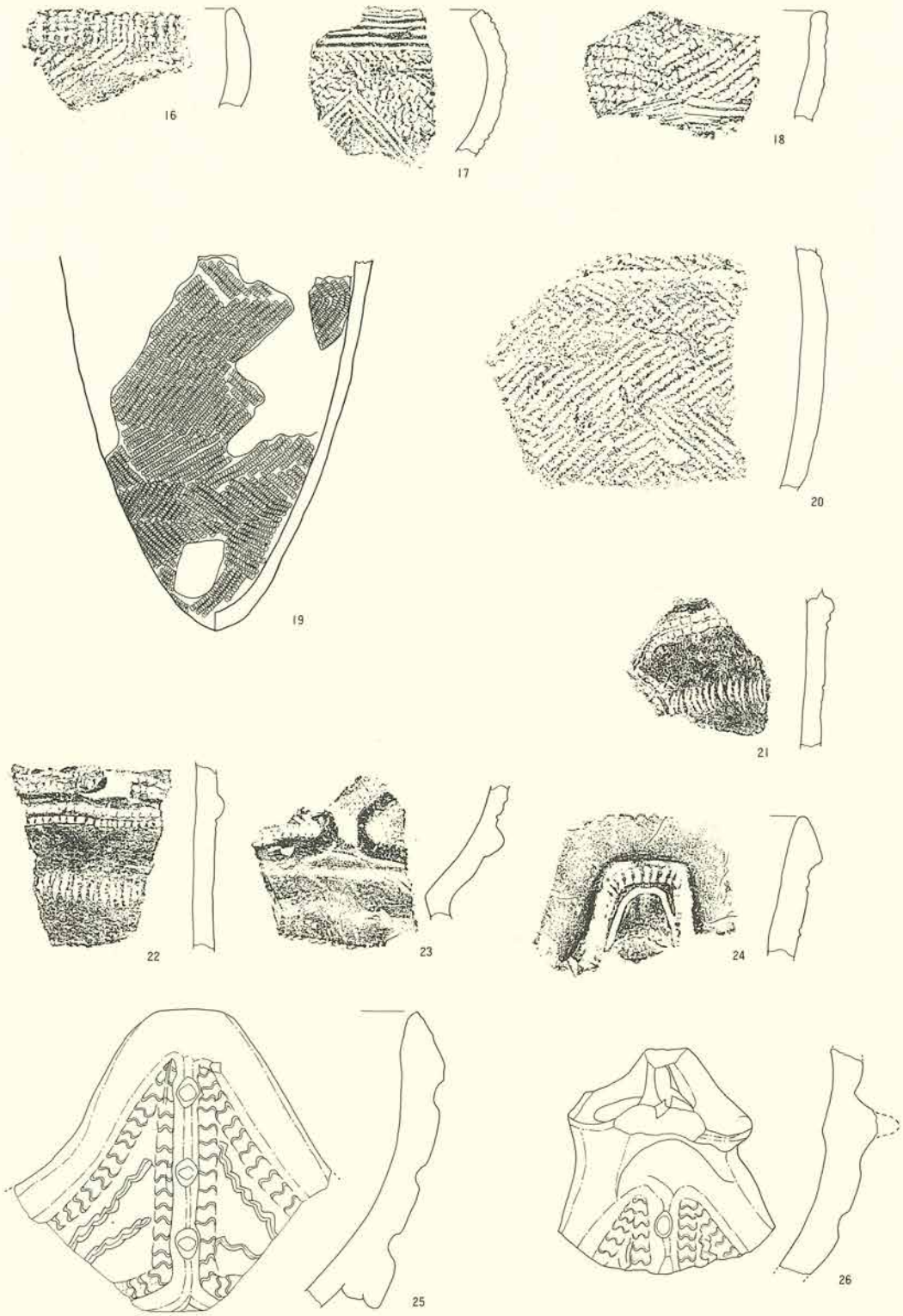
阿玉台式土器を一括した。21～23は阿玉台II式である。いずれも胴部片で、隆帯に沿って2列の押引文が施される。21・23には爪形状の刻みが施され胎土に金雲母を多く含む。24～26は阿玉台III式である。いずれも山形の把手の破片で区画に沿って幅広の押引文が、その内側には沈線が施される。24は胎土に金雲母を多く含む。

第4群土器（27～39）

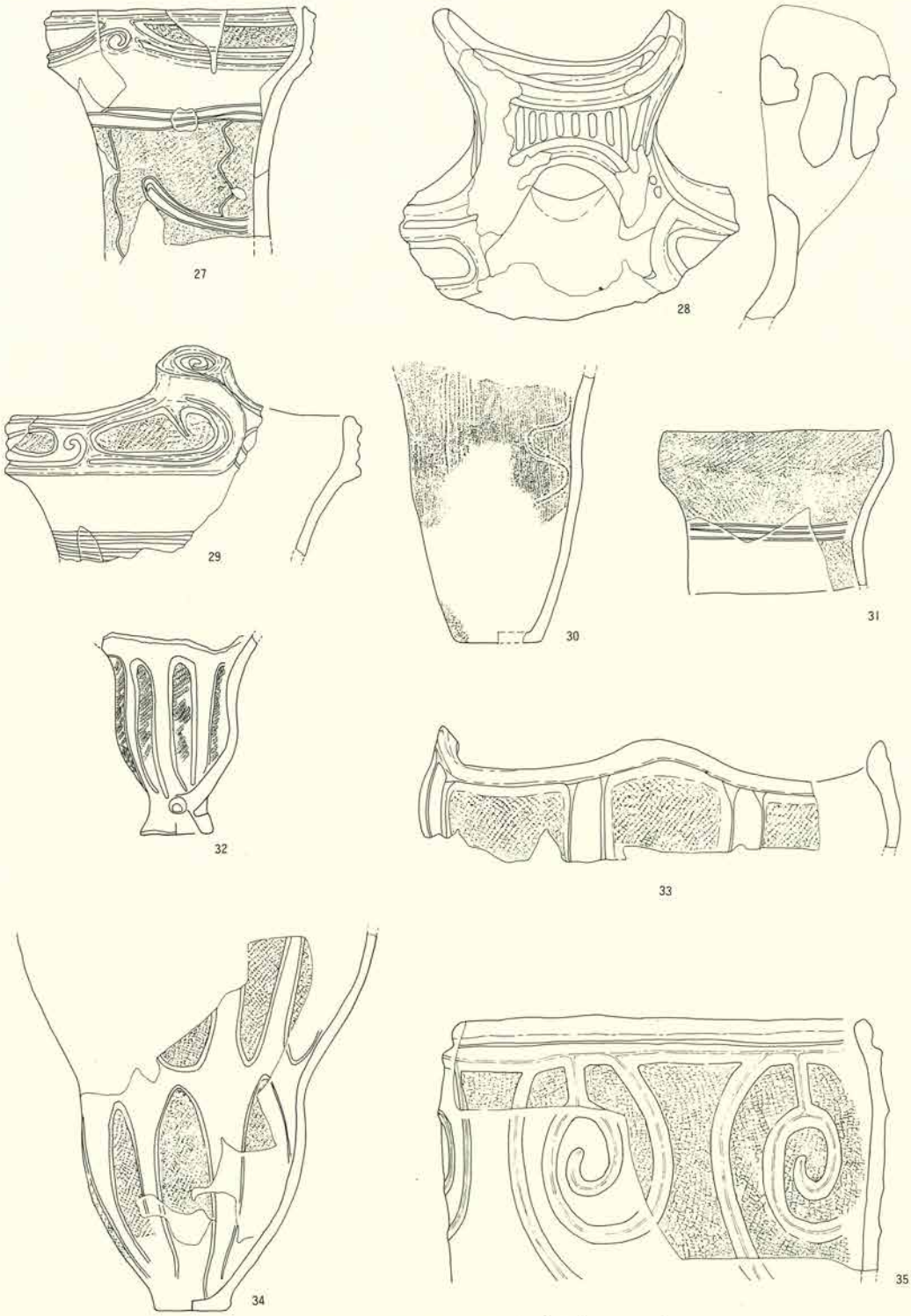
加曽利Ｅ式土器を一括した。27はキャリパー状を呈する深鉢形土器である。口縁部は沈線と隆帯による渦巻文を主に区画される。無文の頸部と胴部は横に巡る沈線によって区画され、胴部にはＪ字状の沈線や波状の懸垂文が下がる。地文は縦位の縄文ＲＬである。28は箱状把手を持つ深鉢形土器の破片で、把手は沈線による区画がなされている。29は、渦巻の施された把手を持つキャリパー状を呈する土器で口縁部は、隆帯と沈線による渦巻文と楕円区画文によって構成される。胴上部には沈線が巡り無文の頸部と区画されている。30は深鉢形土器の底部から胴部にかけての破片である。地文は条線文でその上に半截竹管による直線的な懸垂文と大きな波状の懸垂文が下がる。31はキャリパー状の深鉢形土器の破片である。胴上部には浅い沈線が巡りその下側は沈線による懸垂文が下がる。地文は縄文ＬＲを口縁部には横位に胴部では縦位に施す。頸部の上側は縄文が磨り消されている。32は台付の深鉢形土器で胴上半を欠損する。台部には4単位の円孔が穿たれている。アーチ状区画による沈線の懸垂文が8単位垂下され中には縄文が施される。33は4単位の波状口縁をもつ深鉢の口縁部片で断面三角形の微隆起により区画がなされその両側はなぞりが施されている。地文は縄文ＲＬで上端では横位にそれ以下では縦位に施す。34は胴中位が括れる深鉢形土器で、上部には沈線による縦位の楕円区画が、下部にはアーチ状懸垂文が施され



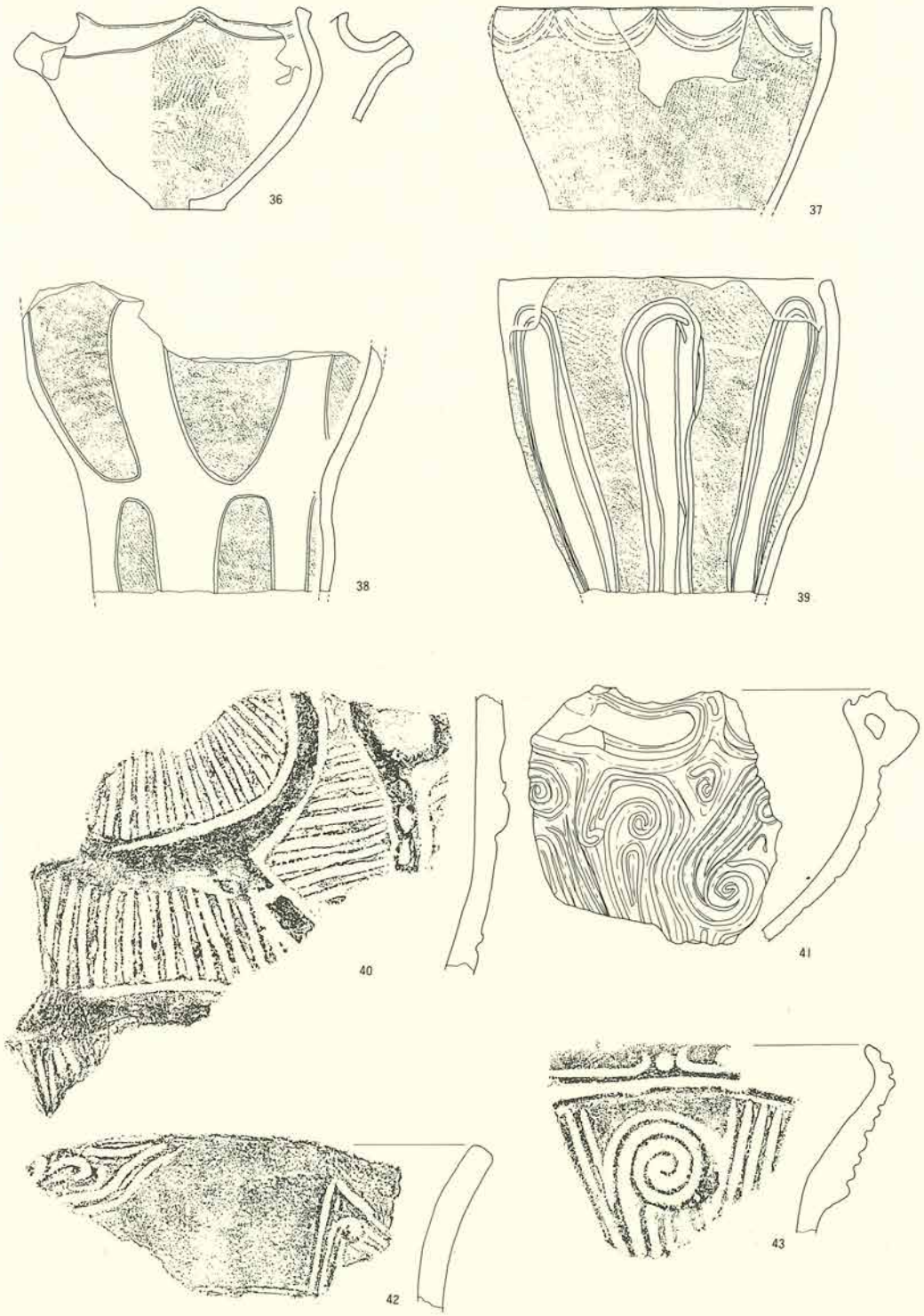
第54図　遺構外出土土器〔Ⅰ〕($\frac{1}{3}$)



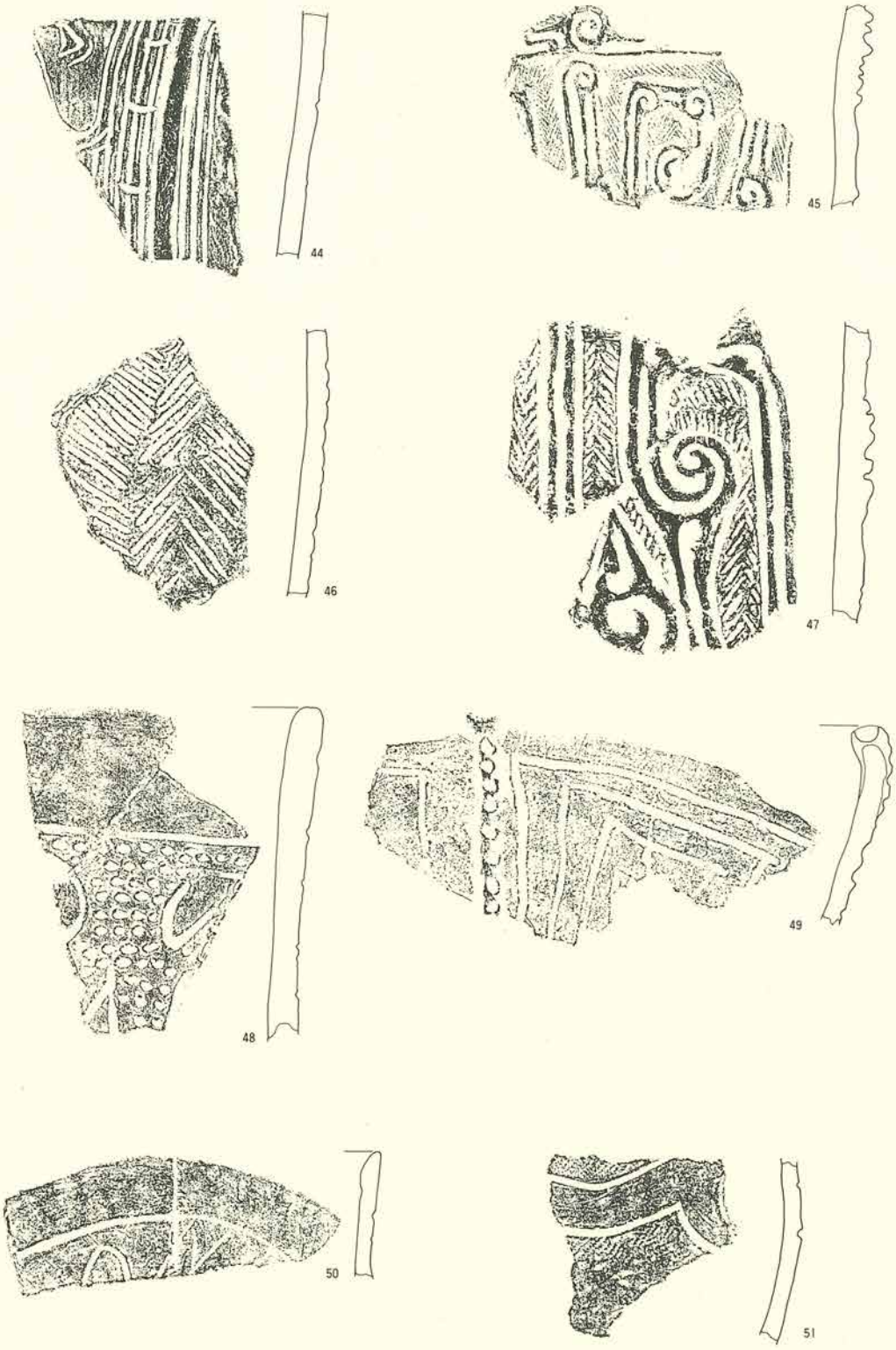
第55図　遺構外出土土器〔2〕$\frac{1}{3}$（No.19－$\frac{1}{4}$）



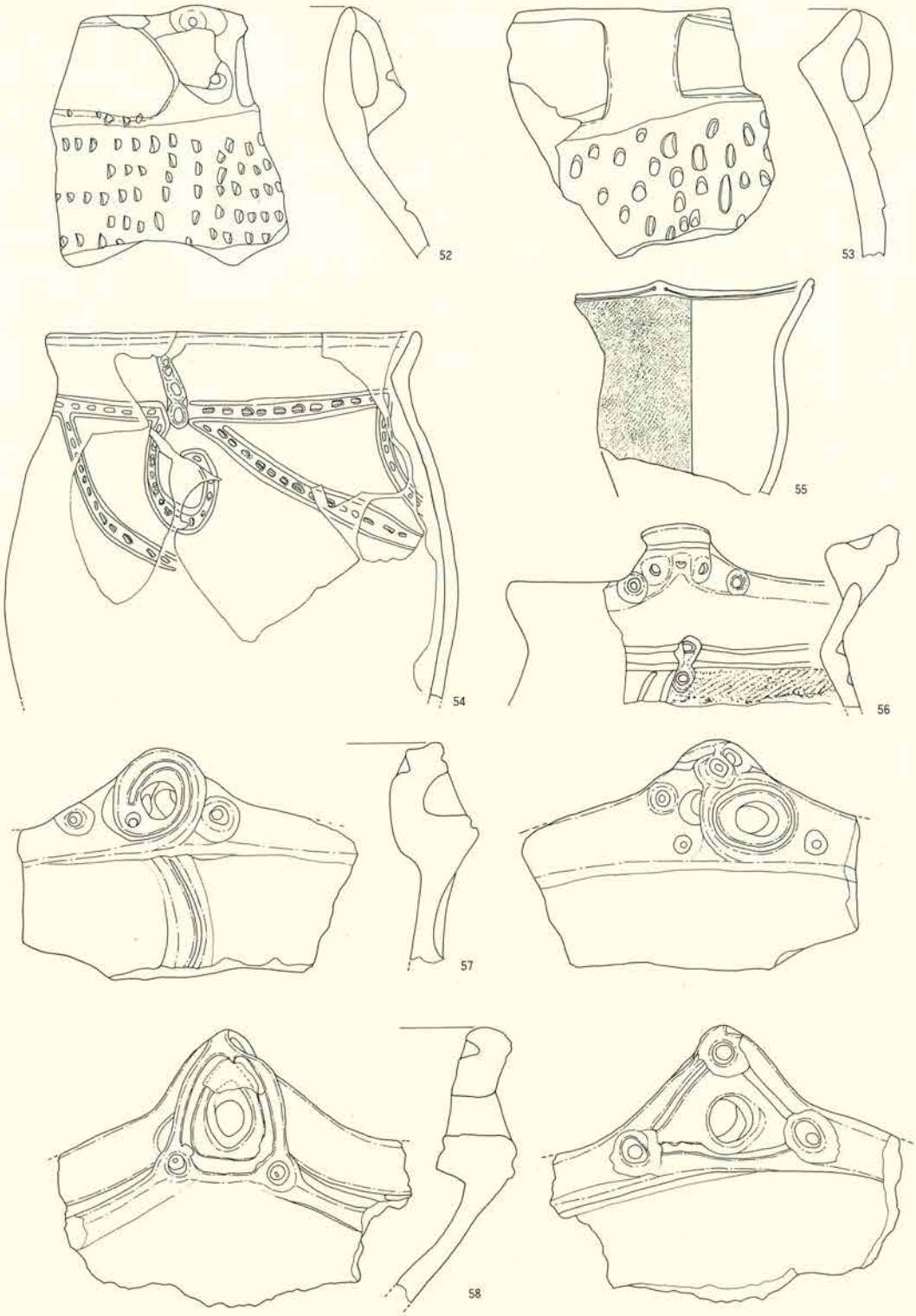
第56図　遺構外出土土器〔3〕（$\frac{1}{6}$、28は$\frac{1}{3}$）



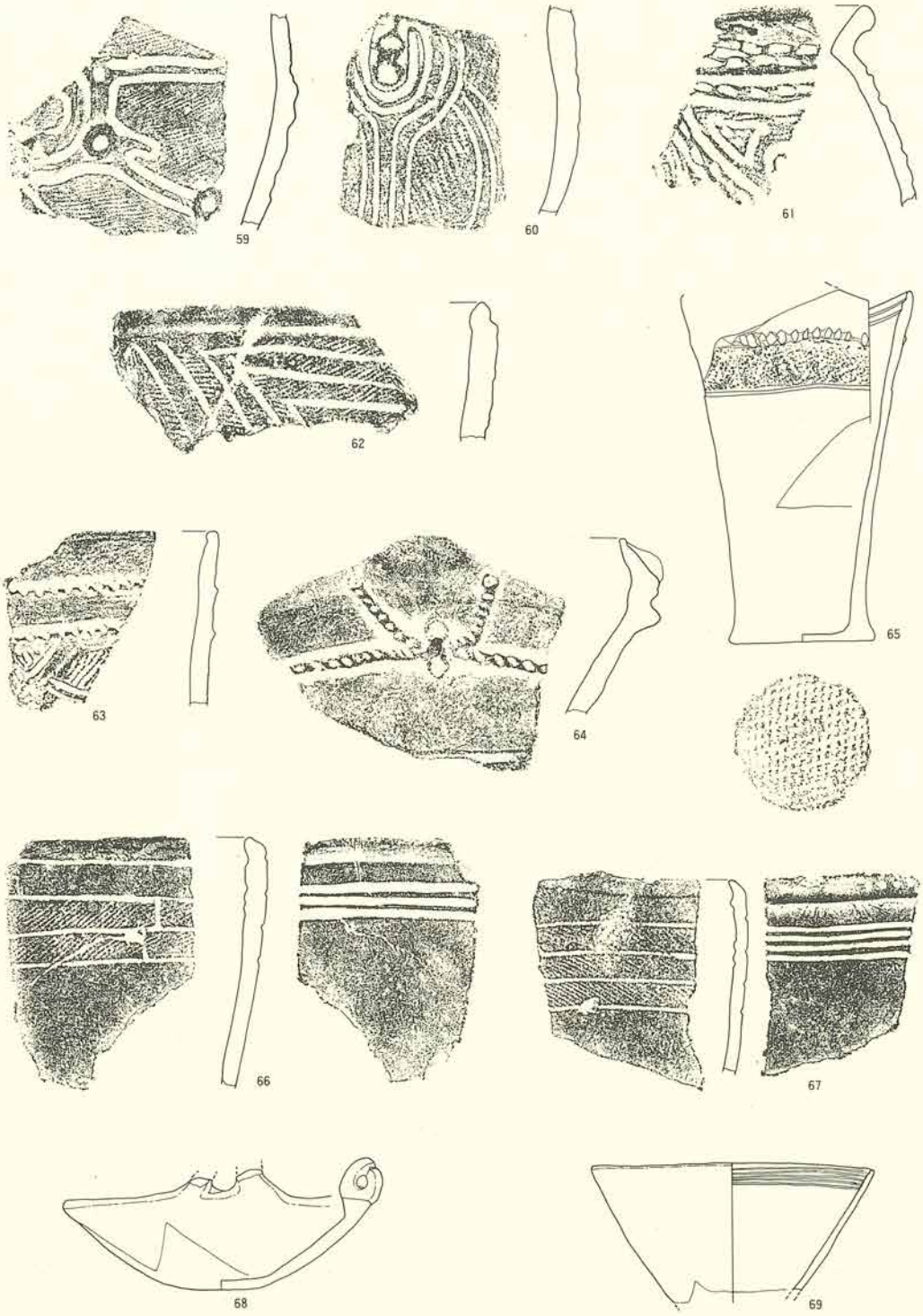
第57図　遺構外出土土器〔4〕（$\frac{1}{6}$、40～43は$\frac{1}{3}$）



第58図　遺構外出土土器〔５〕（$\frac{1}{3}$）



第59図　遺構外出土土器〔6〕（$\frac{1}{3}$、54・55は$\frac{1}{6}$）



第60図　遺構外出土土器〔7〕（$\frac{1}{3}$、69は$\frac{1}{6}$）

る。区画内には、縦位の縄文ＲＬが施される。35は口縁上部がやや内湾する深鉢の大形破片である。口縁上部に断面三角形の微隆起状の隆帯が巡り、その下に同様の隆帯による大柄な渦巻文が施される。隆帯の両側にはなぞりが施される。縄文ＲＬが施文されるが方向は不規則である。36は注口付土器で口縁部は内湾し４単位の波状をなす。口縁上部には沈線が巡りその下側には、縄文ＬＲが不規則に施される。37は口縁部が内湾ぎみに立ち上がる深鉢形土器で口縁部に弧状の隆帯が６単位巡らされる。胴部は条線文が施される。38は胴中位が括れる深鉢形土器で上半部には沈線による縦位の楕円区画文、下半部には沈線によるアーチ状懸垂文が施される。区画内には縄文が充塡される。39は口縁部から胴半部にかけて２条の沈線によるアーチ状懸垂文が施される。区画内は無文であるが外には縦の無節縄文Ｌが施文される。27～31は加曽利Ｅ２式段階に32～39は同４式段階にそれぞれ比定されるであろう。

第５群土器（40～47）

加曽利Ｅ式併行の土器を一括した。40、42、44、46は隆帯と沈線による渦巻文を構成し44、46には綾杉状の沈線が施され、40には橋状把手が付く。39は隆帯による区画をなし、中に沈線が充塡される。41、43、45は沈線を基本文様とし、41には剣先状区画内に蕨手文が43には半截竹管による平行沈線が、45には綾杉状の沈線が施される。39・45は曽利III式、他は上越の山間部に分布する加曽利Ｅ１式併行土器であろう。

第６群土器（48～51）

称名寺式土器を一括した。いずれも沈線により区画され、48には刺突文が、51には縄文が充塡される。49は口縁上端に小突起をもちその下に刺突を施した隆帯が垂下される。51は称名寺１式に他はII式に比定されよう。

第７群土器（52～53）

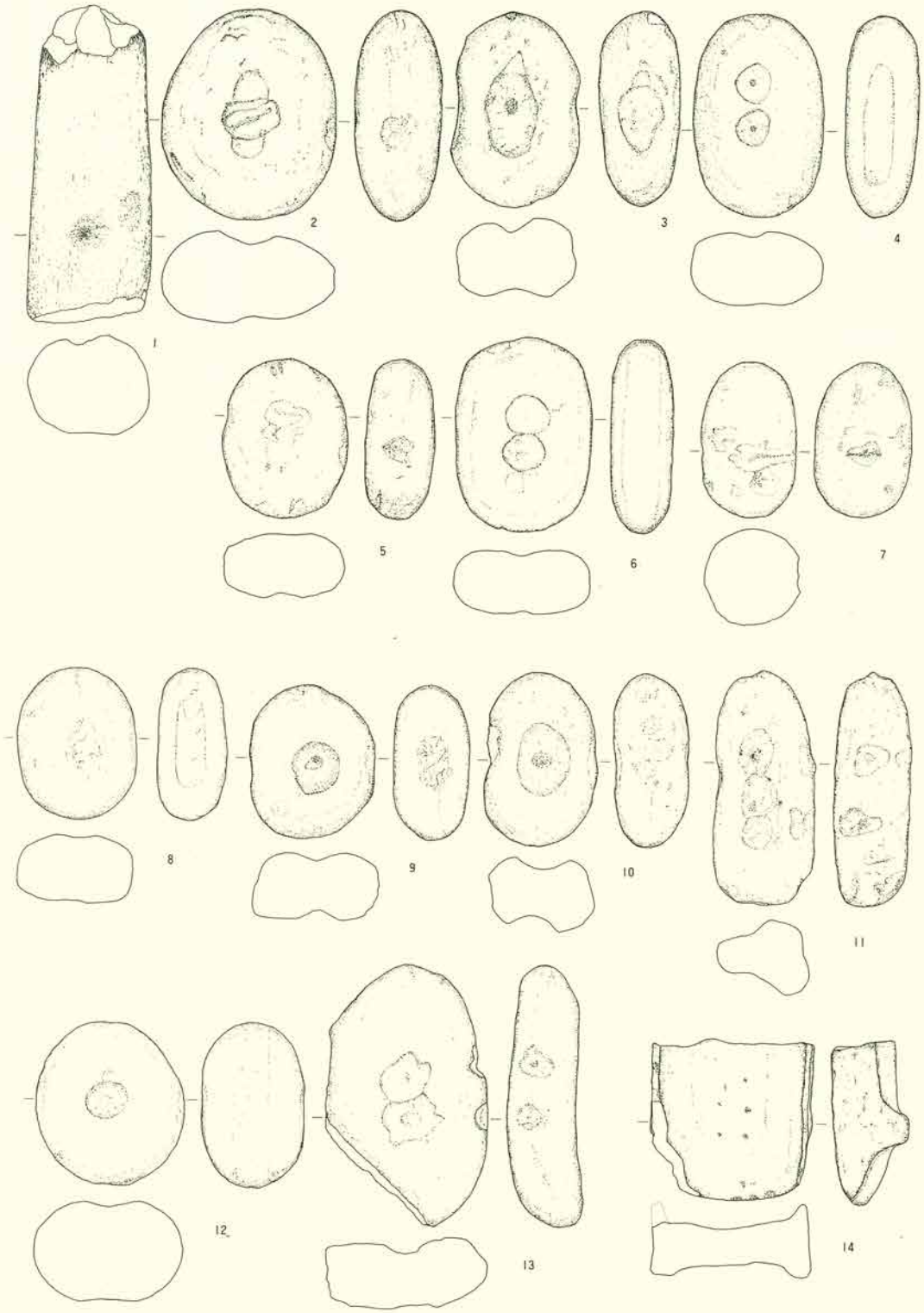
三十稲場系土器を一括した。いずれも口縁部は無文でくの字に外反し、橋状把手が付く。胴部には刺突文が充塡される。

第８群土器（54～61）

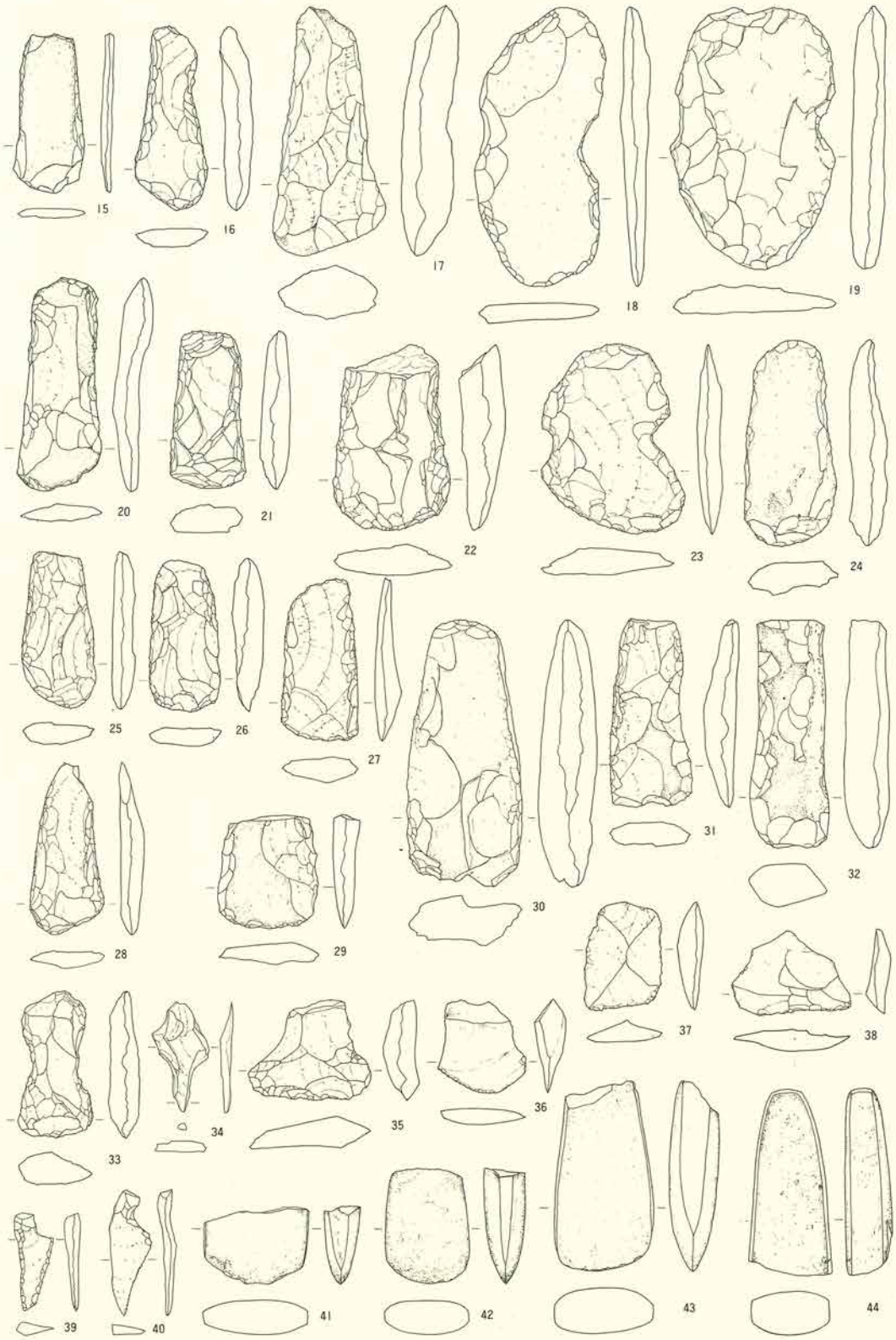
堀ノ内１式土器を一括した。54は無文の口縁部が外反する深鉢形土器である。指頭状の刺突を施した隆帯が口縁部に垂下し胴部には沈線間に一列の刺突文を施す区画で構成され、一部で逆Ｊ字状を呈する。55も口縁部が外反するやや小型の深鉢形土器で３単位の小突起を有する。突起には２つの円形刺突が有り、それらを連結するように口唇部に沈線が巡る。地文は縦位の縄文ＲＬである。56～60は円形刺突文と沈線区画を基本文様とし、57・58は山形の把手が付され、56・60には８字状の貼付文が添付される。56・59・60には縄文が施される。61は無文の口縁がくの字に外反する土器で、胴部には沈線による区画内に刺突文・縄文が施される。

第９群土器（62～65）

堀ノ内２式土器を一括した。62は沈線によって区画される土器で縄文が施され、口縁内側には段を有する。63、64は刻みを付した隆帯が施される。63の内面上端には１条の沈線が巡り、64には



第61図　遺構外出土石器〔1〕（$\frac{1}{4}$、14は$\frac{1}{8}$）



第62図　遺構外出土石器〔2〕($\frac{1}{4}$)

隆帯の接点に8字状の貼付文が添付される。65は口縁が波状を呈する小型の深鉢形土器で口縁内側に沈線を巡らす。胴上部の文様帯は上が刻みを施した隆帯に下が沈線によって区画され中に縄文が施される。底面には綱代痕を有する。

第10群土器（66～69）

加曽利ＢⅠ式土器を一括した。66・67は外削状の口縁を持ち内外面に沈線を巡らす。外面には区画内に極めて細い縄文が施され66には一部縦の沈線が入る。67は内外面とも良く磨かれ口縁上部には円形の刺突文が施される。68は小型の浅鉢で口唇部は平縁で幅広であるが、円形刺突を施した把手が付く。69は口縁内側に櫛状工具を利用した沈線を5重に巡らした薄手の浅鉢形土器である。口唇部には綾杉状の刻みが施される。

5. 遺構外出土石器

1～13は凹石と磨石類である。1は結晶片岩による石棒の破片を転用したもので中央部に集合打痕が認められる。2は両面に凹が認められるが片面中央部に楕円形の強い打痕を有する。3・9・10は両平坦面と両側面に顕著な集合打痕を持ち平坦面には研磨痕も認められる4～6・8・12は両平坦面がよく研磨されており、両平坦面に打痕による凹を持つ。またいずれも側面に研磨痕あるいは打痕を有す。7はやや長い卵状を呈し中央部に強い打痕が認められる。11・13は凹石で平坦面と側面に顕著な集合打痕を持つ。14は足を持った石皿の破片で使用面は良く研磨されている。15～33・35は打製石斧類である。片面に自然面を残す例が多い。15～17・20～22・24～32は短冊形あるいは撥形を呈するが中間的な形態が多くを占める。18・19・23・33・35は側縁中央部に抉れが入り分銅形を呈する。しかし従来の分銅形の範疇に入るのは35のみで、33はやや撥形に近い。18・19・23は大きさに比べ扁平で抉れも小さく弥生時代の製品であろう。34は石錐である。36～38は剝片石器で比較的薄手の剝片の一辺に細かな調整剝離を施し鋭利な刃部を作り出している。41～44は磨製石斧の破片で所謂定角式である。41～43は装着部側を欠損し（44は刃部側を欠損している。39・40は縦長の石匙である。39は両辺に40は1辺に細かな調整剝離を施している。40は鋭利な先端部を持つ。

遺構外出土土製品・石製品・石鏃類

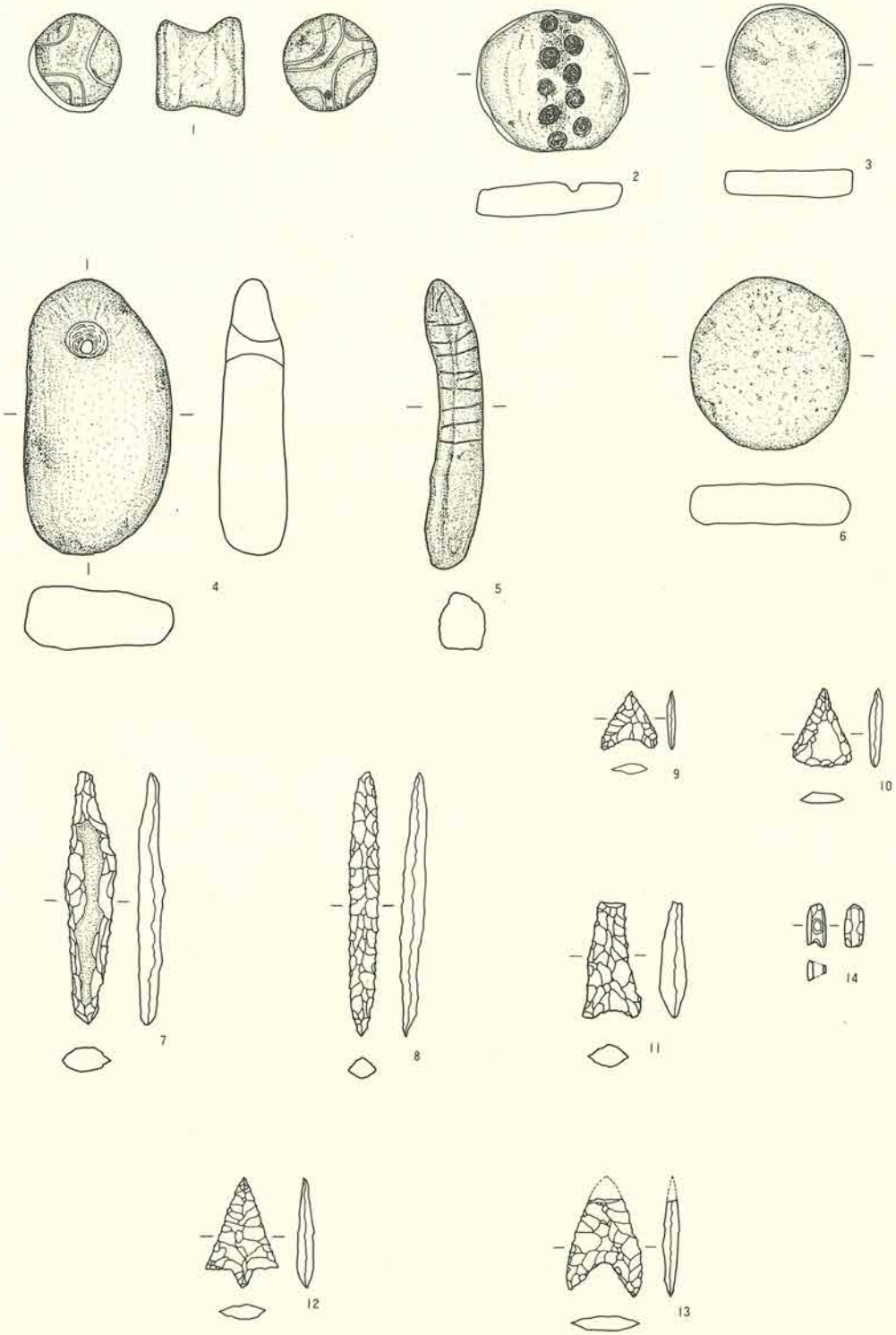
1は鼓状を呈した小型耳飾りである。円形を呈する平坦面には弧状の線文が施される。

2は土器破片を利用した土製円盤である。3、6は石製円盤である。

4は大珠状の石製装飾品で長軸端側の平坦面に両面から穿孔した穴を有する。

5は小型の石棒状の石製品である。中央から頭部にかけて線刻を巡らし、頭部には線刻が先端部に向って施される。7・8は石錐でいずれも断面形は菱形状を呈し、縁辺に細かな調整刻離が施されている。7は先端部を欠損している。

9～13は石鏃である。9～11・13は無茎で9・11には浅い抉れが、13には深い抉れが入る。12は有茎である。14は穿孔をした小型の石製装飾品で一部を欠損している。



第63図　遺構外出土遺物（$\frac{1}{2}$）

Ⅳ　ま　と　め

今回の調査では前述のように縄文中期加曽利Ｅ式段階に比定される土器群を中心として多量の遺物と住居址等の遺構が検出され、この地域においては重要な新資料が提供されることとなった。以下これらの資料を若干整理してその概要を述べてみたい。

1．住　居　址

加曽利Ｅ１式段階　　１号～３号・14号・16号住居址が本段階に比定される。14号住居址を除いて他の住居址は調査区の東側に分布する。炉は２号・16号住居址において良好な状態で検出され、いずれもやや長い小ぶりの河原石を長方形に組んだ石囲い埋甕炉である。

加曽利Ｅ２式段階　　５号・６号・８号・12号住居址が本段階に比定される。いずれも調査区の中央に分布する。炉は前段階に似た形態を呈すが、南側の焚口側は炉石を有しないのが一般的であろう。６号住居址の炉は埋甕を有する。

加曽利Ｅ３式段階以降　　４号・７号・９号～11号住居址が本段階に比定される。４号住居址を除いて調査区域中央から西側にかけて分布する。炉は11号住居址を除いて大ぶりの河原石を方形に組んだ石囲いで炉で、10号住居址は埋甕を有する。

以上の様に住居址の分布は時期が下るにつれて東側から西側へ、炉の形態も長方形の石囲い炉から方形のそれへと変化する相様が認められる。

2．出　土　遺　物

出土遺物の概要については前述したので、特に注目すべき遺物について若干触れてみたい。

Ｉ－８グリッド出土の尖底土器（第55図№19）は、その形態や縄文を持つことなどから早期末～前期初頭的様相を呈するが、すでに縄文が菱目を構成することや該期の土器は認められず検出された前期の土器はすべて黒浜式であることから本資料も一応黒浜式の範疇に入れておきたい。

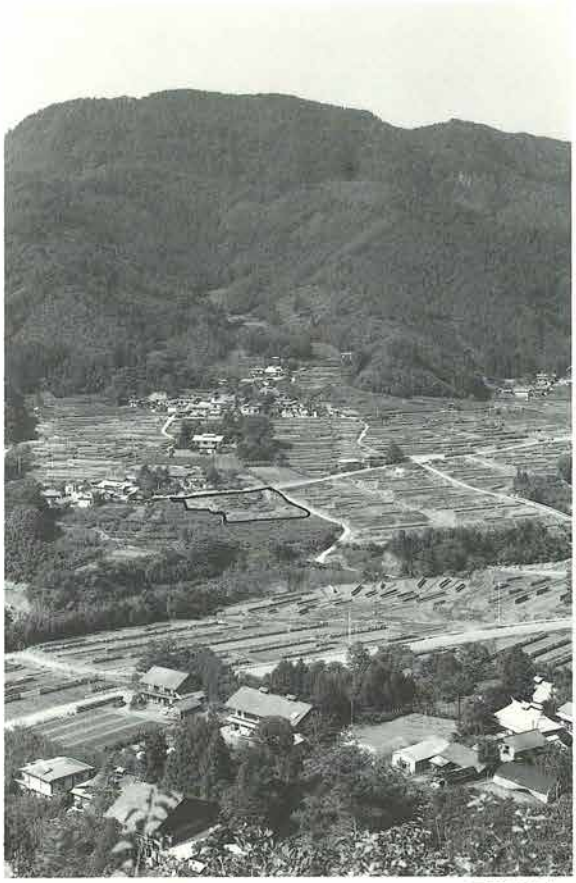
24号土坑出土の三角柱形土製品は希な資料である。陰、陽を意識させる形態であることや、焼成前による貫通孔を有することから祭祀的、装飾的要素の強い資料であると推定できるが、他の類例との比較検討が必要であろう。

本遺跡の出土土器は関東的様相を呈す土器が主流を占めるが、三国山脈を越えた新潟や中部山岳地域との交流を示す（第５、７群土器）も検出している。特に信濃川、魚野川上流域と利根川上流域に分布する土器（第５群土器）は本地域の特徴とすることができるであろう。

この他にも言及しなければならない点が多々存在するが今後の検討課題としておきたい。

註(1)　土器の分類は能登健氏の御助言によるところが大きい。文末であるが記して感謝の意を表したい。
(2)　三角柱形土製品は立体土製品の一形態で、縄文時代中期以降東北地方を中心につくられたとされている。長野県貝鳥貝塚に類例がある。

写　真　図　版



周辺地形

1号住(全景)

2号住(全景)

2号住遺物(全体)

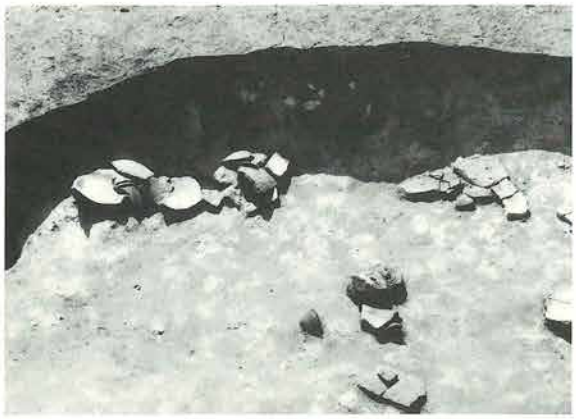
2号住炉

2号住遺物出土状態(細部)

2号住遺物出土状態(細部)

3 住(全景)

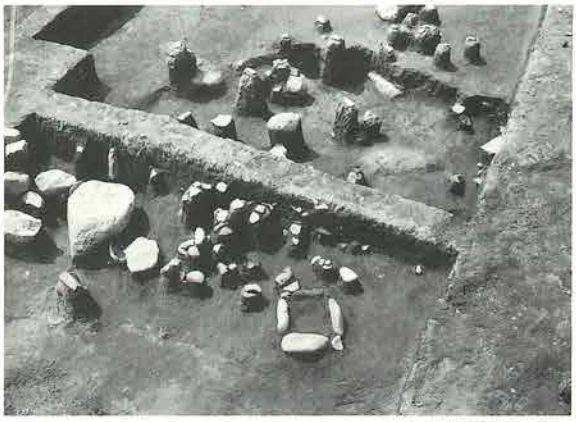
3 号住遺物全体



3 号住遺物(床直)

3 号住遺物(細部)

4 号住(全景)



4 号住遺物全体

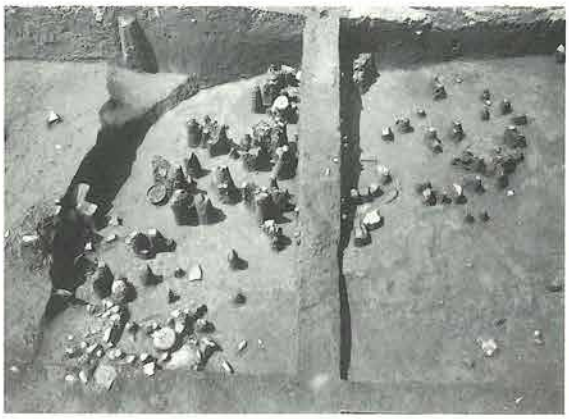
4 号住炉(No. 1)

4 号住炉(No. 2)

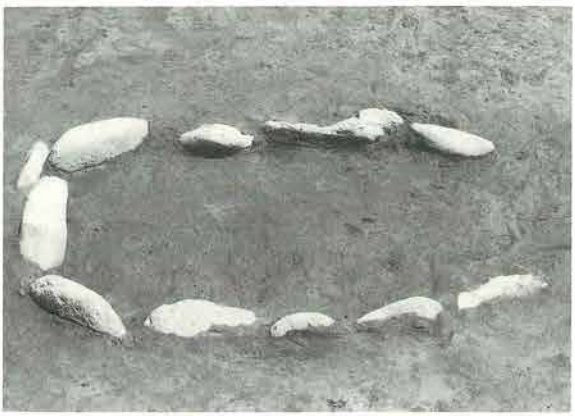
作業風景

4号住遺物出土状態

5号住全景



5号住遺物全体

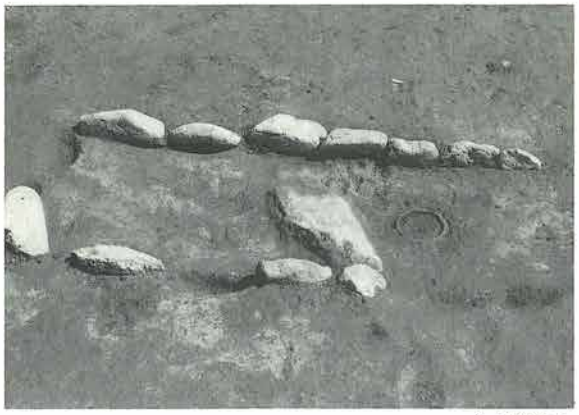


5号住炉

5号住遺物出土状態

6号住全景

6号住遺物出土状態



6 号住炉

6 号住遺物出土状態

7 号住全景

7 号住炉

8 号住全景

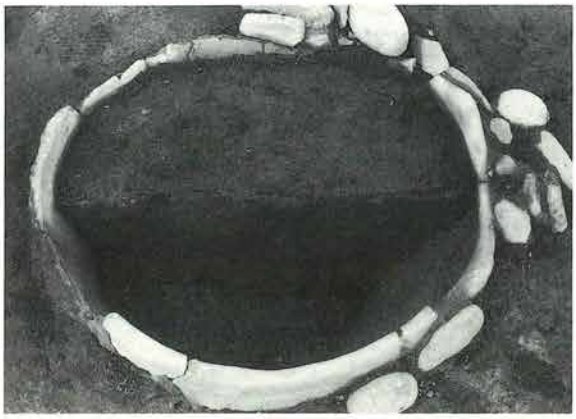
8 号住遺物

8 号住遺物出土状態

9 号住全景

9号住遺物全体

9号住炉



9号住遺物出土状態

10・11号住全景

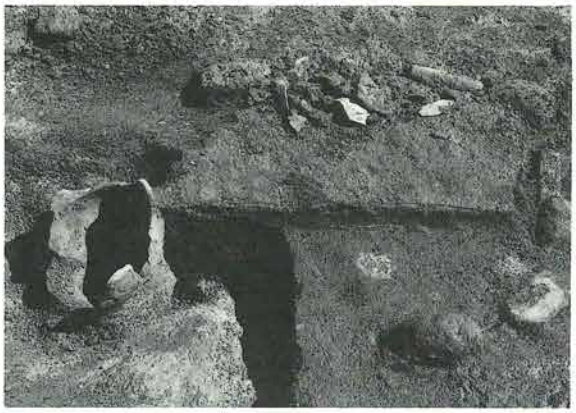
10・11号住遺物

10号住炉

10号住遺物出土状態

10号住遺物出土状態

10号住遺物出土状態



10号住遺物・11号住炉

11号住炉

11号住遺物出土状態

11号住遺物出土状態

12・13号住全景

12号住遺物全体

12・13号住土層

12号住炉

12号住遺物出土状態

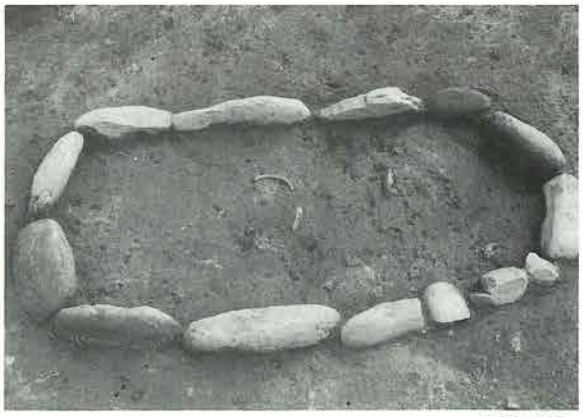
14号住全景

14号住炉内遺物出土状態

14号住遺物出土状態

15・16号住全景

16号住



16号住炉

16号住遺物出土状態

作業風景

17・18号住全景

17号住炉

18号住炉

18号住遺物

遺構外遺物

遺構外遺物

遺構外遺物

遺構外遺物

遺構外遺物

遺構外遺物

遺構外遺物

2号配石遺構

1号配石遺構

1号配石遺構遺物

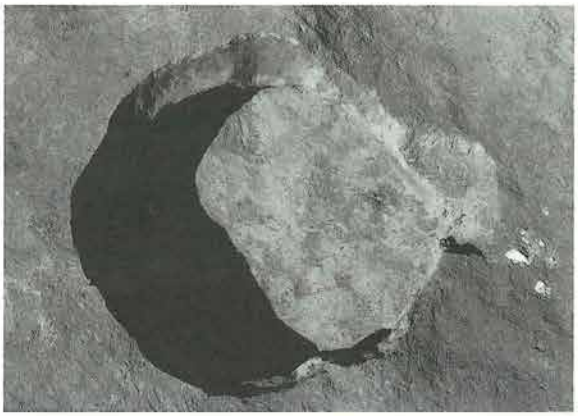
1 号土坑

2 号土坑遺物出土状態

3 号土坑遺物出土状態

4 号土坑遺物出土状態

6 号土坑遺物出土状態



7 号土坑(袋状土坑)

8 号土坑遺物出土状態

10号土坑遺物出土状態

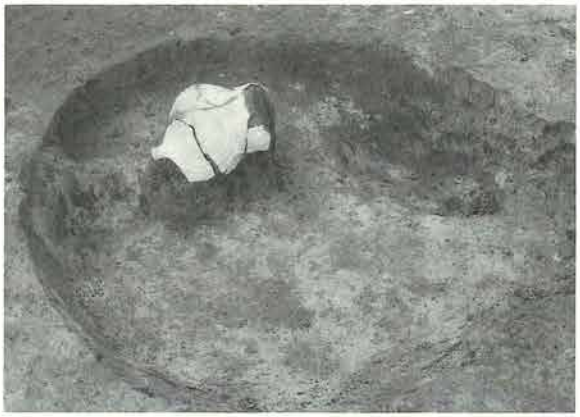
11号土坑遺物出土状態

12号土坑遺物出土状態

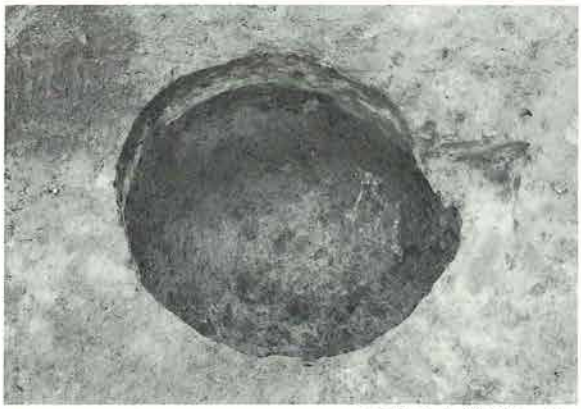
13号土坑遺物出土状態

14号土坑遺物出土状態

16号土坑遺物出土状態



21号土坑遺物出土状態



23号土坑(袋状土坑)

25号土坑遺物出土状態

2号住

2号住

2号住炉

2号住

2号住

3号住

3号住

3号住

4号住炉

5号住

5号住

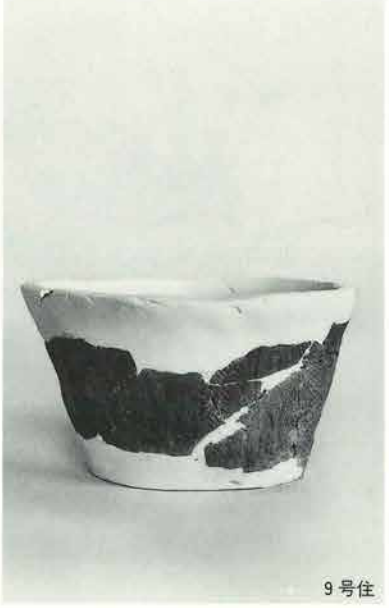
6号住

6号住

8号住

8号住

9号住


9号住

9号住

10号住

10号住

10号住

10号住

10号住

10住炉内

10号住

10号住

10号住

11号住

11号住

14号住炉

12号住

16号住

18号住

18号住

8号土坑

10号土坑

14号土坑

16号土坑

11号土坑

13号土坑

25号土坑

21号土坑

25号土坑

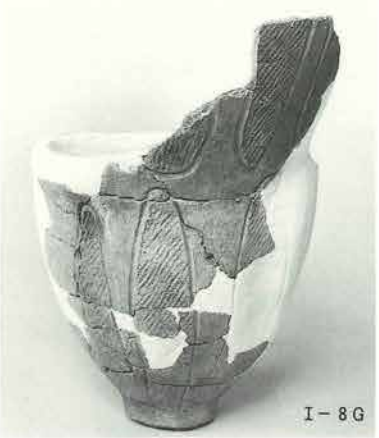
I号配石遺構

I－8G

G－9G

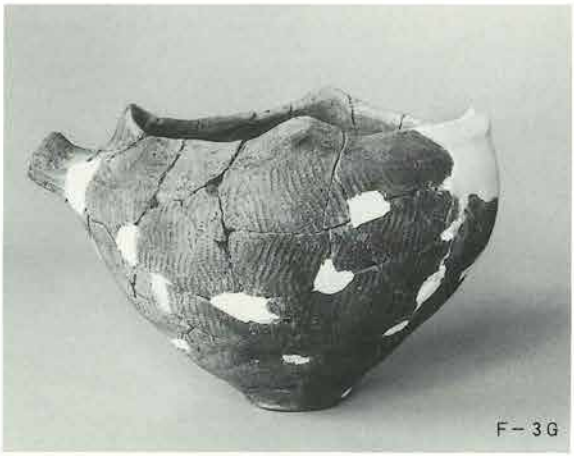
H－8G

G－10G


I－8G

G－6G

I－8G


F－3G

G－10G

I－8G

G－7G

G－6G

G－7G

H－5G

G－7G

G－7G

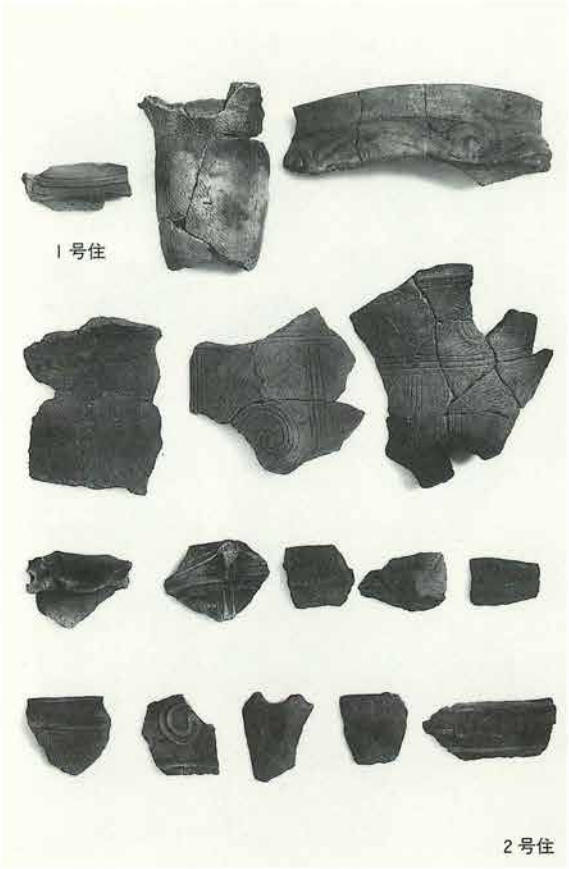
24号土坑(1)

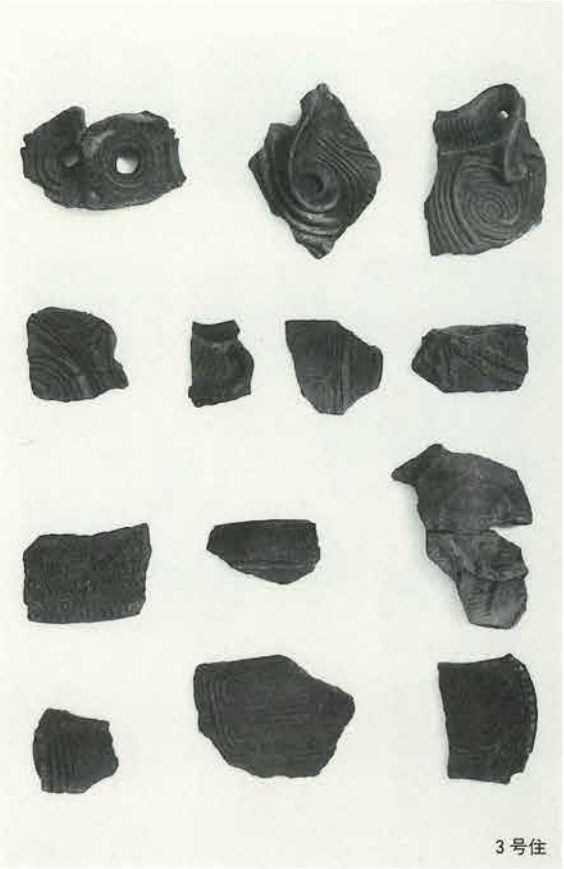
(2)

G－7G

(3)

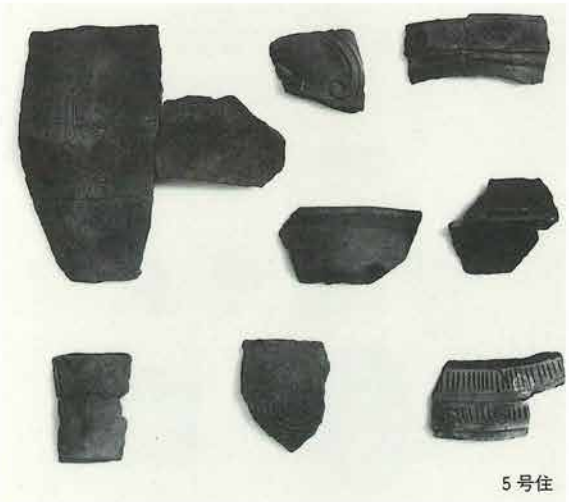
(4)

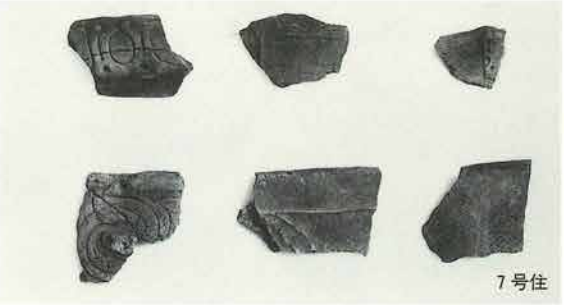

1号住
2号住


3号住

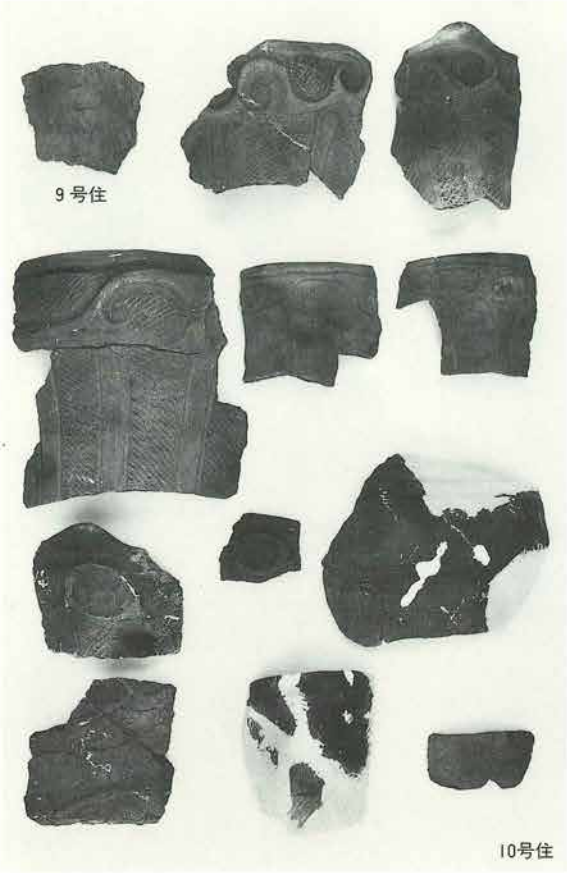
4号住

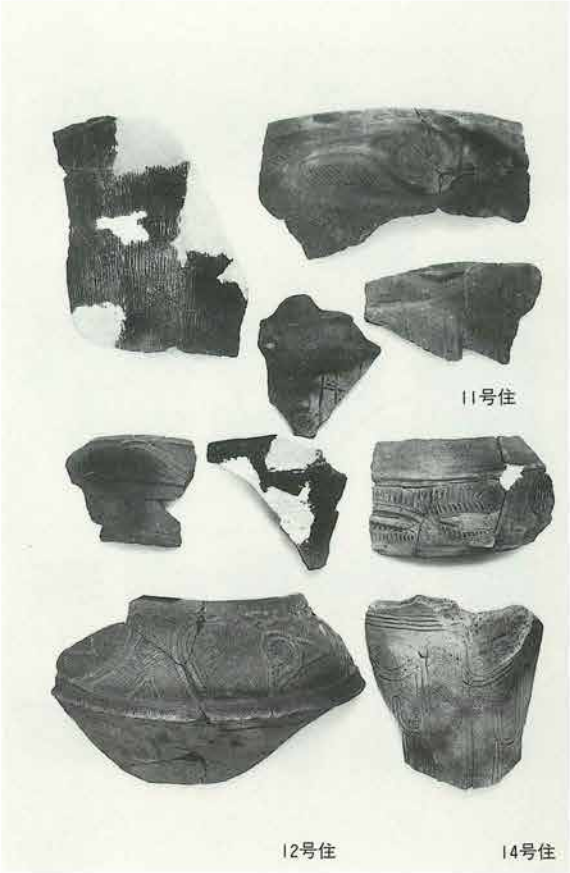
6号住


5号住


7号住

8号住

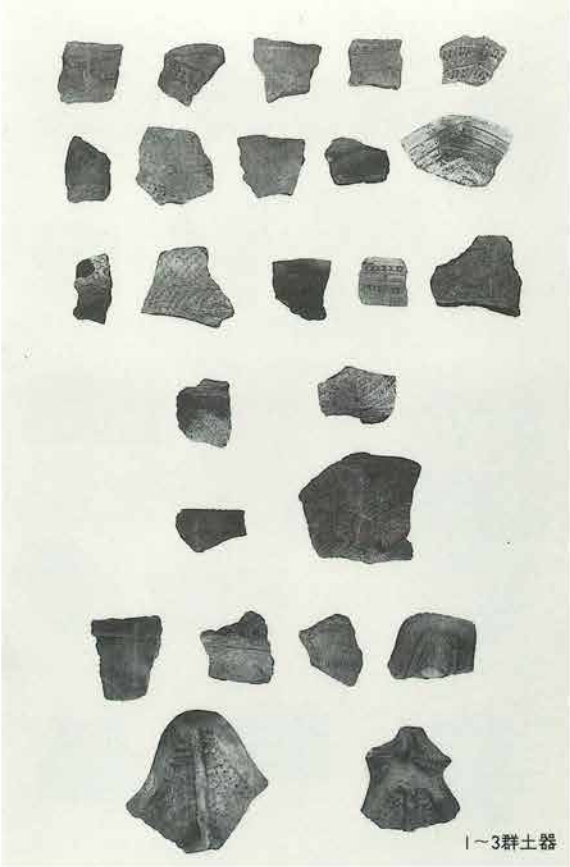

9号住
10号住


11号住
12号住
14号住

16号住

18号住

土坑


1～3群土器

7～8群土器

6群土器

4群土器

5群土器

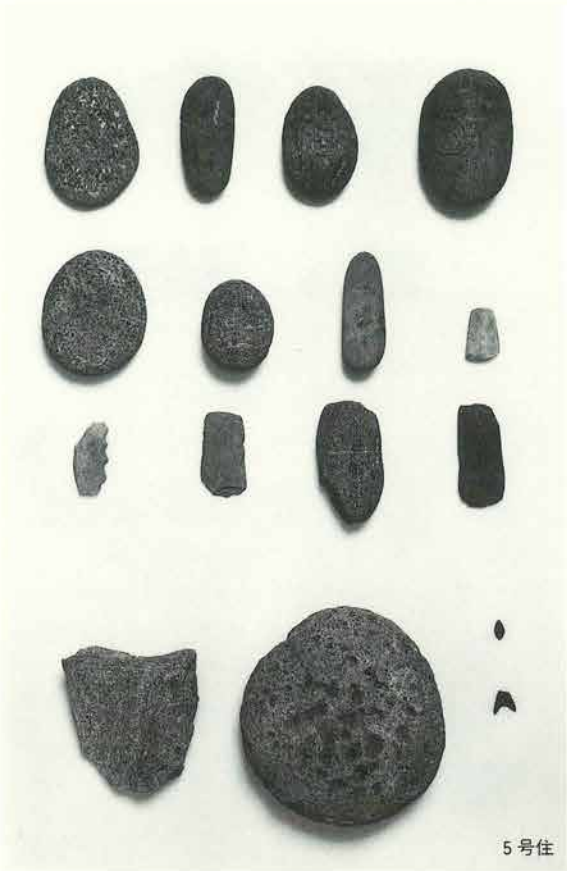
1号住

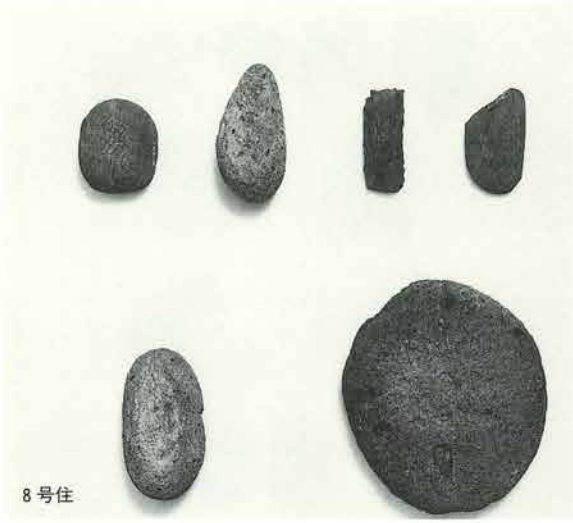
4号住

2号住

3号住

6号住


5号住


8号住

10号住

7号住

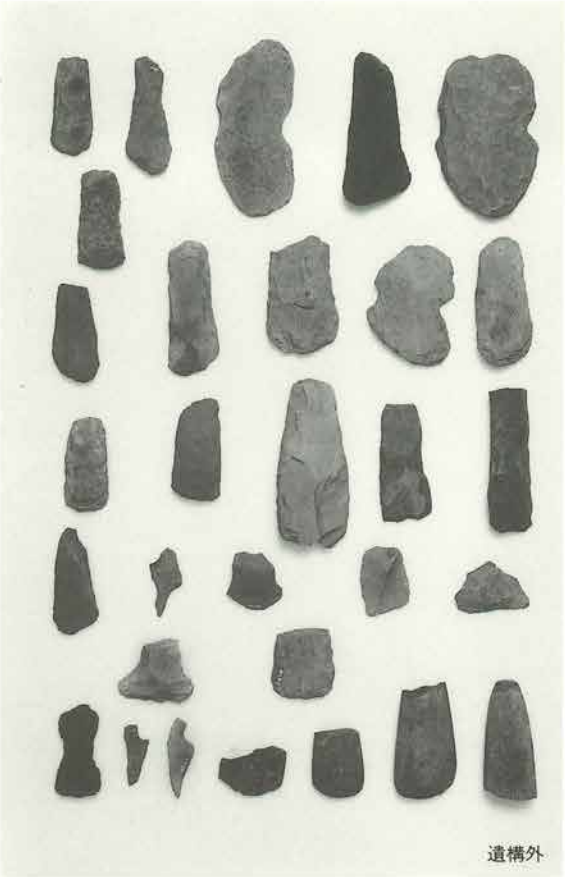
10号住

11号住

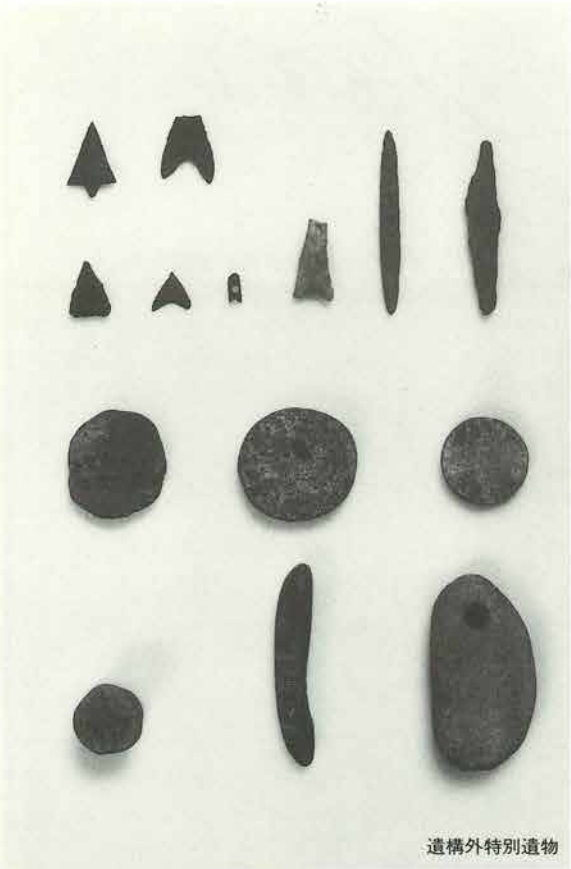
12・13号住

14号住

遺構外　　土坑



遺構外



遺構外特別遺物

寺入遺跡　昭和61年度土地改良総合整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

印刷　昭和62年3月26日
発行　昭和62年3月31日

編集・発行　沼田市教育委員会
沼田市埋蔵文化財発掘調査団
沼田市西倉内町780
TEL（0278）23—2111

印　　刷　朝日印刷工業株式会社
前橋市元総社町67
TEL（0272）51—1212